

遠に満足なる解決を得むと欲するに至つては毫も異論あるなしと。
これ亦一種の觀察たるを見るべし。

丙、彼等は此時期に於ける日本の勢力を如何に觀察せしか

ブラッド・ストリートは論評を試みて曰く、極東に於て戦端開始せられし今日、兩交戦國の實力に就き比較概評を試みるは大に興味あるべし。露國は地球上陸地面積殆ど七分の一を占め、八百六十六萬三千九十五方哩の面積と、一億二千九百萬の人口を有し、その内歐露の面積百九萬五千六百十六方哩、人口一億六百二十六萬四千三十六人を包有せり。歳入は九億弗にして歳出は稍超過し、常備陸軍は平時に於て百十萬人、戦時に於ては三百六十萬人にして、海軍は將卒を合して四萬人を有せり。次に日本國は臺灣千島を合せて其面積十六萬千九百九十八方哩、人口四千七百萬にして、露國に比し面積五十分の一に當り、人口約三分の一強を有するに過ぎず。歳入は一億二千五百萬弗にして、歳出は一億二千萬弗なり。陸軍は平時十六萬六千人、戦時六十五萬人にして、海軍は將卒を合せて三萬人なり。斯く日本の海軍々人の數は露國に比し少なきも、日本の戦闘艦は露國最良の戦闘艦

に比し一層優勝なるのみならず、實際戰場に使用し得べき勢力は、日本遙に大なり。又戦時に於ける日本陸軍の兵數は、露國に比すれば大に少なしと雖、露國が日本と同數の兵を戰場に派遣せんとせば巨額の費用を要すべし。即ち日本國は殆ど内地と同様なる程の近き戰場なるに、露國は凡て遠距離の異域に於て戦はざるべからず。其兵數は日本に比し多大なりとするも、約四千哩の遠距離を單線の西伯利亞鐵道によつて輸送し來らざるべからざるの不便あり。然るに日本の東京は旅順口を距る千哩にして、戦時中大本營の所在地なるべき京都は八百哩を隔て、佐世保は僅に五百六十哩の近距離にあり。また朝鮮との距離も百哩に足らざれば、其制海權を掌握して、陸兵を上陸せしむることも容易にして、既に多數の日本軍隊上陸せしこと云ふ。故に實際戰場に使用し得べき日露兩國の兵數を比較する時は、粗均等なる勢力を有するものと云ふべし。

ブチー・パリヂャンは三月十七日日本の財力を評して曰く、世上日本の事を口にするもの唯その陸海の兵力を囀々するに止まり、其交戦國たるの眞價を評定して、それが成功を卜し、或は戦争が同國の將來と經濟とに及ぼすべき影響を打算

せんとするに當りても、亦専ら右軍事上の見地よりせんとするものゝ如し。然れども斯くの如き觀察は頗る狹隘に失し、正鵠を誤れる者と云ふべく、是に於て、更に日本國の經濟的資力に就き説述すると緊要なりと云ふべし。蓋し同國の陸海軍力が斯く迅速の發達を遂ぐるに至りたる所以のものは、則ち正しく其經濟的資力の顯著なる者あるが爲めなり。世上輕薄の徒、若くは皮想の觀察をなせる輩は、唯日本の陶器、珍奇なる青銅製品、漆器及び紙類あるを知るに過ぎずと雖、這般兒童と相擇ぶなきの無識は、今日最早之を認容する能はざるなり。抑も日本の中央部を形成する四大島のみならず、その人口既に四千萬以上を算し、感嘆すべき注意を以て、約四千萬エクタールの田圃を耕耘せり。日本人は概して農業の民にして、國富亦主として耕作に頼れること、なほ我佛國の如くなりとす。而して毎年の農産類は約二十億フランなり。漁業の收穫も亦驚くべき巨額に上り、農業上の資力と相俟つて國民の要部を給養するに足り、又百七十萬エクタールの森林は極めて多種の材料と、漆及び樟腦の如き有益貴重なる工業上の原料を供給せり。其他毎年八九百萬噸を産出するの石炭脈あり、銅鐵鉛及び甚だ重要な富源たり。

る石油あり。凡そ國民の工業的發達を確保し、又其食料の殆ど全部を充たすべきもの、悉く自ら日本の土地に備はれりと謂ふべし。

日本の舊工業たる陶器、漆器、青銅品及び紙類の製造業は、今や佛人の想像する程盛大なるものにあらずと雖、而も重要な輸出品たるを失はず。その毎年の輸出額七八百萬フランに上り、蓆類及び菓製品の外國に於ける賣上高、亦之に二倍し、茶の輸出類は約千五百萬フランなり。農産物の一たる各種絹絲は、その日本諸港より輸出の際に於ける價格實に一億二千五百萬フランにして、絹織物の價格は四千萬フラン以上なりとす。

二十年來初めて、日本に扶植せられたる新工業中、意外の盛況を呈したるは紡織業にして、今や同國に於ける錠數は百萬に上り、その製品は遠く支那、印度に輸出せり。マッチ製造業も亦目醒ましき發達を遂げ、その販路は濠洲に及び、其製造の佳良にして、しかも廉價なる佛人の夢想だもせざる所なり。なほ其他セメント、アルコール類、油類、玻璃類、刷毛類の製造業も亦新工業に屬し、特に麥酒釀造業に至りては、其顧客マラッカ海峽地方に及び、同地方にありて英國製麥酒と其賣高を相

競へり。造船業も亦年一年に進歩發達し、その造船所は優に商船を建造し得るに至れり。

一八八九年に於ける日本國製品の輸出額は、一億七千萬フランを越ゆることなかりしも、その後十五年間に於ける進歩は、頗る異常なるものあり。輒近に至りては右の輸出額實に五億千五百萬フランに達せり。また同時期間に於て輸入は一億六千五百萬フランより七億三千万フランに増進せり。而して右購買力の増加は、機械的工業を急速に改良するの必要上、機械類機關車鐵軌等を輸入したるに基因するものと云ふべく、その他の輸入品及び輸出品の増額に至りては、生産力及び消費力共に著しく増大したるの證左なりとす。蓋し生産力の發達は即ち消費力増大の因をなし、消費力の増加は國富の進歩を示するものと謂ふべし。

今順序として日本國と列國との通商關係を一言せん。

英國及び其植民地に於ける日本產物の購買額は、一億三千万フランにして、その日本國へ賣上高は三億千五百萬フランなりとす。故に日英兩國通商關係の極めて重大緊切なることは、他列國の首班にありと云はざるを得ず。之に次ぐものは

米國にして、その購買額一億二千萬乃至一億二千五百萬フランに對し、賣込高一億フランなり。第三位にあるものは佛國にして、其日本產物を購買すること五千萬フラン、日本へ賣込高約二千萬フランなりとす。ついで日獨間の取引高は、總額に於て敢て佛國と大差なきも、日本への賣込高は、その購買額に比し、遙に多量なりとす。日本國の經濟的活動は、五千キロメートルの鐵道線路より助成せらる。これ素より多大の延長にあらすと雖、此鐵道線路はなほ久しからずして更に延長せらるべく、其他二萬キロメートルの海岸を有する日本島は、船舶により運輸の便を得ること最も多しとす。日本國の經濟的勢力は、亦その財政上の好況及び國民租税の負擔力と密接の關係を有せり。同國一九三四年度(明治三十六年度)經常豫算に於ける歳入は五億九千五百萬フランにして、歳出は單に四億六千萬フランに過ぎず。斯くの如く歳出に比し歳入の著しく超過せるは、極めて注目すべき現象なりとす。勿論臨時費の爲め、その超過額に減少を來したりと雖、なほ豫算上他の一方に於ては臨時收入の存するあり。以て平均を亂すことなし。陸海軍備及び工業の擴張に要したる巨大なる費額の一部は、日清戰役の際清國より受取り

たる償金を以て支拂はれたるに因り、日本の公債は近年に至るまで極めて少額たるに止まれり。

租税の負擔力は、十五年來課税額の倍加せられたるに拘らず、これ亦着々として増進したるものゝ如く、また以て日本真正の隆盛とその民力の間斷なき發達を表示するものと云ふべし。素より刻下戦争の経費は巨額に上るべく、且つ其一部軍隊の動員は、同國農工業の生産に對し、最も悲惨なる影響を及ぼすに相違なし。雖、而も亦一方より之を見れば、日本は自己の港灣にありて戦闘すると同様の地位にあり、従つて之に要する費用其他も亦歐洲の一國例へば英國が極東に戦争をなすが如きものと到底同日にして談すべからざるものあり。

以上概説したる日本國經濟上の地位に依りて之を觀れば、その國力の莫大なると同時に、亦整然たる紀律の具備するを知るに足るべく、佛國公衆の未だ深く知ることなき此國民が、其衆目の見て以て優勝なりとする一敵國に對し、毅然として交戦を辭せざる所以のもの、亦喋々を俟たずして明瞭なりとす。

丁、彼等は此時期に於ける日本の戦局を如何に觀察せしか

倫敦タイムスは露國の東洋に送遣し得べき兵力と、其輸送の容易ならざると、又戦争との結果に關して明快なる觀察をなせり。其要に曰く、露國が貝加爾湖に依つて兩斷せられたる單線鐵道により、帝國の中心より五千哩を隔てたる太平洋沿岸に二十萬の兵を送るは、眞に困難なる事業にして、最も事に通曉せる兵站總監は、此一事を以て失神するに至るべきなり。吾人英國人が、一大隊の兵を莫斯科より旅順口に輸送するには、一個月を要する事を想見し、此外、日常軍需品、即ち被服、糧食、彈藥等を輸送する場合を打算して、其鐵道線路の堅固ならざるを想ふときは、吾人は海國民たるを、其海路に大兵站線を有することを天に謝すべし。即ち斯かる打算をなすの後、露國の軍隊を此鐵道に依つて輸送し、之をして戰場にありて生命を保ち、有効なる動作をなさしめ、又軍需の供給と安全と兩つながら全く之を良好なる事情の下にあらしめ得る極度は、二十五萬人なりとなせる日本參謀本部の計算に同意せざるを得ざるべし。又吾人にして、海軍の軍需特に石炭輸送の爲め鐵道を要すとする緊急の場合あるを想はんに、海軍は單に斯かる要求の爲めのみ、貨車の大部分は之に専用せん事を求むるに至るべきなり。然れど

も鐵道は陸軍の掌中にあり、東洋に於ける露國海陸兩軍の任務は、其何れの地にあるよりも遙に懸隔せるものたり。故に其情形や甚だ複雑にして、アレキシーフ太守は、自ら政治に身を委ぬるか、軍旅の指揮を専らにするか、孰れか其一を擇ばざるべからず、随つて其地位たる魚の水を離れたるが如し。之を要するに露國は其糧食の爲めに戦ひ、日本は其國命の爲めに戦へるなり。今單に開始せる戰闘目的の爲めに、總て其海陸の兵力を編制したる日本の露國に比して遙に精確に、總ての事情を研究し、凡そ七の機會を計量せしは其理ありとする所なり。而して彼露國や其大を以てしても、尙、差當り起りたる事件と、凡て何等關聯を有せざる他の問題との爲めに、多くの憂慮ありて其注意を擾亂せられ、其智謀を竭くすとあるを免れず。畢竟するに露國は將來を洞察すべき先見の明を缺くが爲めに、其陥りし泥濘の裏より躍出せんと欲して、冀望なき事を努むるに似たりと。

マハン大佐は、割切なる評論を試みたり。大佐は先づ論評の材料は新聞紙に出でたる諸報にして、特に人の知らざる事實を得て之を基礎とする次第にあらざる旨を斷り、次に兩交戰國の國土の大小、人口の多寡、非常の相違あるを以て、海上の

交通を利用して、兵員糧仗を輸送し、露國の輸送上の不便に乗ずるの成算あるにあらざれば、日本は露國に對して得るものにあらざるを説き、更に露國の此缺點は長く滿洲に占據して、人口、兵員、物資を増加して戰備を整ふるに従ひ、次第に減少し去る者なれば、日本が此際開戦するは軍路上當然なりと論じ、扱て曰く、西伯利亞鐵道の輸送力如何は精密に測り知るを得ざれども、其道の人々の判斷に依れば、露國は到底此鐵道に由つて本國より多數の兵員を輸送し、且つ糧仗を供給するを得ざるべし。交通の戰局に關係すること極めて大にして、今回の戰爭に海上權獲得の大切なるは論を待たず。若しも露國にして海上に優勢を占めんか、其結果は雷に日本が韓國派遣の陸軍に給與の道を得ざるのみならず、海路は必要の物件を輸入して、西伯利亞鐵道の缺點を補ふを得べしと。それより大佐は海軍力を比較し日本の優勢なるを認めて本論に入り、

今や日本は海上に優勢を占むるのみならず、完全なる制海權を占むるを要するの位置にあり。一切の行動の此見地より出づべきは勿論にして、其水雷を以て旅順の露艦を攻撃し、引續き其艦隊を以て露國の艦隊砲臺と戰闘したるは、畢竟こ

れが爲めに外ならず。而して日本艦隊が砲臺と射撃を交換したるは、敵艦に損害を加へんとする主要の目的に附隨の出来事たるに過ぎず。然れども敵の艦隊を全滅して制海權を握るも、一步を進めて之を利用するにあらざれば、制海權握有は一場の徒爲ならんのみ。思ふに日本の目的は少なくとも朝鮮を掌握し、其地歩を進めて他日平和恢復迄に紙上の空約よりも、確實なる保障を得んとするにあり。此目的を遂げんが爲めに、日本の企畫する處は如何なる程度に達すべきや未だ知るべからざるも、鴨綠江、豆滿江を中心とせる一線が、日本の獲得せんとする土地の最小限なる事は、該線より南方に中立地帯を設けんとする露國の發案を拒絶したるの事實に徴して知るを得べし。されば朝鮮海峽に於ける馬山浦等の如き遠隔の海軍要地も、亦之を守備して敵の占領を防ぐが如きこと或は之あらん。然れども日本陸軍の最も重きを置く處は、北韓にありて南韓にあらず。北韓の日本陸軍は自ら二方面に分れ、一は京城を占領し、八道の人心を威壓して其擾亂を制し、一は鴨綠江岸に向ひて、成るべく陸送の距離を短縮し、惡路の不便を避け得る海港に策源地を求めて前進するならん。而して日本の

政治上の希望はさまで廣からずとするも、軍事的行動の先頭は、其給與の安全に繼續する限り、北に西に突進して南、旅順に達するの鐵道を威嚇し、なほ仕儀に依りては東浦鹽に通ずるの鐵道線に迫るべし。扱て斯くして日本が如何なる仕事をなし得るかは今推測の限りにあらず。茲に又一策あり、朝鮮を經由せず直接に旅順を進撃するの戰略にして、旅順口港内には敵の艦隊あるが故に、其艦隊に處するの手段としてはまた一策ありと雖、其策を實行するの得失如何は、全く港内艦隊の現状如何に由る。港内艦隊が水雷攻撃及び其後の砲彈戰闘の際に損害を被りたるは世人の知る所なれども、其損害の程度に關しては報告區々にして一定せず、若しも二隻の損傷戰闘艦すでに航行に堪ふるに至りたりとの芝罘電報にして眞なりとせば、露國艦隊は再び元氣を回復して、日本軍に對する危険の種となり、日本は之を控制せんが爲めに遙に優勢の艦隊を其方面に向け置かざるべからず。假令、日本艦隊より劣勢なるにせよ、多數の露國艦艇が朝鮮その他大陸に於ける日本軍と本國との交通線の附近にある限りは、日本軍の行動は決して安全なりと云ふを得ず。况んや別に三

隻の装甲巡洋艦は、遠隔ながらも甚だ有力なる浦鹽の軍港にありて、海路を威嚇するに於てをや。勿論予は此危険あるが故に、日本は何等の行動をもなさざるべしと云はず。固より冒険は覺悟の上の仕事なり。此危険あるが故に、日本は露國艦隊を港外に逐出して、之を全滅するに必要な手段として、旅順攻撃の決心をなすに至るやも知るべからず。

旅順の劣勢なる露國艦隊は、海軍の術語に所謂存狀の艦隊(Fleet in being)なるものゝ一例を、實戦上に示す者なれば、海軍々人は勿論海軍の事柄に心を注ぐ傍觀者に取りて趣味ある研究問題なり。抑も存狀艦隊とは、敵の艦隊より劣勢にして、これと決戦すると能ざるも、而も其軍に存狀砲臺等の掩護ある避難地にするの故を以て、斷えず敵軍の航通運送を威嚇するの力ある艦隊にして、或種の戰略論者が其敵軍に取りて危険なるを論ずるは固より當れり。此種の危険は陸戦には往々あり得る所にして、決して珍らしき例にあらず。威嚇的の軍隊もしくは砲臺——存狀の勢力——交通線の側面にありしは、屢耳にするの文言なれど、海軍戰略の極端論者が斯かる威嚇的勢力は其全滅に至らざる限り、敵軍を

して如何なる運動をもなすを得ざらしむと論ずるに至りては、予の與みする能はざる所にして、歴史は明かにその論を反證せり。即ち予は讀者と共に、暫らく露國の存狀艦隊が日本の運動に如何なる効果を有するかを觀るを要す。水雷攻撃及び其後の艦隊運動にして、永久的の損害を加ふる能はざりしとせば、日本が露艦全滅の目的を以て、陸上より旅順を攻撃するの策を定むるも、固より怪むに足らず。旅順攻撃は此目的ありて、始めて價值ある仕事と云ふべきのみと論じ、大佐は更に水雷の効力の程度は、尙疑問に屬する事を説きたる後、

之を要するに旅順の艦隊會戰(初度四砲臺の参加は附隨の出來事に過ぎず。日本艦隊司令長官が砲臺より發火を受くるの危険を冒したるは、戰爭の全局に大關係ある敵艦隊破壊の目的を達せんが爲めにして、單に砲臺を破壊せんが爲めに艦隊を以て之と戦闘したるにあらざるべし。中略)旅順は露國艦隊の避難地としての外は全く無用にして、同地の砲臺は其避難地を安固にするの外には全く無用なれば、日本軍艦の其砲臺に損害を加ふるが爲めには、僅に半打の巨弾を投ずるも尙惜しむべし。軍艦と陸上砲臺とは戰爭の全局に對して重きをなす程度よ

り論ずるも亦損害を受け易き程度より考ふるも決して互角に争ふべきものに
あらず軍艦は砲臺よりも一層有用にして、數等纖弱なるものなりと論結せり。
タイムスは更に論じて曰く。日露開戦以來未だ著しき戦争の陸上に於て起らざ
る事は世人の少しく失望する所なれども能く其事情を詳かにする者は其事の
無理ならざるを感ずるに至るべし。殊に日本人は、非常なる注意と謹慎を以て此
戦争に従事し居るが故に、此點は我々の深く感服する所なり。今年の冬は例年よ
りも寒氣殊の外強くして、浦鹽斯德の如きは、其近海猶一面の氷に鎖され、鎮南浦
も三月十四日迄は解氷せざるべし。鴨綠江も亦其頃までは依然として、解氷を見
るに至らざるべし。而して牛莊は、なほ其後にあらざれば、氷の消ゆる事なからん。
是等の事情より考ふれば、軍事の遷延は自然の勢ひにして、諸人の見て以て戰鬪
區域と認むる個所は、悉く上陸の便を缺くが故に、當局者は徐に其時の至るを待
たざるを得ず。思ふに鴨綠江方面に於て勝敗を決し、旅順口を陥れ、而して後に本
隊を牛莊に集中するは、日本軍の目的たるや疑ひなく。人或はポシニット灣に日本
兵が上陸すべしと云ふと雖、これ蓋し無用のことに屬すべし。如何となれば、なほ

是より近き場所に襲撃すべき露軍あり。又ポシニット灣に上陸を試みるには、三萬
の兵を以てせざれば、浦鹽港を陥るべき望みなければなり。假令、此點は此儘打捨
て置くも、前述の如く近き鴨綠江方面に向つて勝敗を決するの利益なるや明か
なり。戰時人の聽感最も發達したる時にありては、比較的些々たる事も深き意味
あるが如くに解釋を加へらるゝ事あれば、軍略家は之を利用して我々の豫想以
外の方面に軍隊を進めんと企つるやも測られず。然れども、日本が旅順口を取ら
んとする決心は明かなるが如し。一八九四年戰勝の結果として、當然得たる者を
強奪的に取去られし事は、深く日本人の腦裏に浸み居れるを以て、此際一舉旅順
口を陥れんと企つるは當に然るべき事なり。而して此旅順口攻撃に要する根據
地は、青泥窪或は大連灣なるべし。これ一八九四年の例を見ても明かなり。而して
露人も亦此方面に敵を受けん事を豫期せるが故に、曩に此二個所を撤退せりと
の風説もありしが、こは信を置くに足らず。扱て又其青泥窪を襲ふに當り、日本軍
は東よりするか、西よりするか、但しは東西同時に襲撃するか、豫め知るを得ずと
雖、兎に角旅順口にして一度日本軍の手に落ちんか、牛莊は奉天に向つて進軍す

るに就きて重要なる集中點となるべく、又一方に於ては朝鮮にある日本軍が、平壤より雲山に進んで鴨綠江に接近せば、之を以て此方面にある露軍を抑制するを得べく、日本軍の青泥窪攻撃は、若し天候宜しきを得るに至らば、忽ちにして開始せらるゝならんと信せらる。

露國の將軍ステッセルは、日本軍の襲來を豫想じて其軍隊に告げて曰く、汝等には三方に海ありて四方に敵あり、然れば此際決心對抗の外に術策ある事なし。汝等督つて敵軍に降る勿れど、此布令を察すれば、露人も大に覺悟する所あるが如く、其軍隊が優勝なる地點と武器とを以て敵軍に抵抗し、以て花々しき戰鬪を開始するに至るや、今より期して待つべきなり。

又著名なる二三の兵略家は、再び倫敦タイムス新聞の軍事記者に語りて曰く、日本軍が奉天以北の内地まで露軍を追躡するの得策ならざることを説明せんと試みたるは、這般の戰役を以て畢竟持久の競争に外ならずとなし、日本は只その全軍の行動を局限して、茲にその軍隊を集中し、その勢力を保持するに依りて、始めて勝利を博することを得るべき旨を指示したりと。又タイムス通信員は、幾多

の外國軍事専門家と會談したるが、孰れもタイムス新聞の所説と一致するの意見を有せり。尙曰く、日本は露國に對し其致命傷たる一大打撃を與ふる能はざるべし。故に其宜しく執るべきの策は露軍に加ふるに累次敏活なる攻撃を以てし、敵をして奔命に疲らしむるにあり。その遂に困憊して亦起つ能はざるに至らば、必らず満足なる媾和を観るを得べしと。

倫敦タイムスの軍事記者曰く、旗鼓堂々として露軍の境域ニーマン河を横斷したる、かの剛邁なる奈破翁と、其麾下に屬したる赴々たる精兵とを以て、之を鍛練の勇氣を除くの外、強勢たるの威容あるにあらず、而も敵國の軍旅より成りて、戰略整然たらざりしセバストポールの攻撃軍に對比するは固より不當なりと雖、事實に於ては却つて前者敗れて後者は勝を制したり。即ち一八一二年に於て、露國は奈破翁の大軍を粉碎して、武威を輝かしたりと雖、クリミヤ戰役に於ては露國は敗衄疲弊の極、遂に不利なる媾和條約に調印するに至れるにあらずや。日本もまた宜しく之に省みる所あるべし。遠隔の荒野凜烈たる互寒、これ皆到底對抗すべからざるものにして、敵前これ等の天險と戰ふの愚を避けざるべから

紐育サンは曰く、露國騎兵若干は北韓の地、鴨綠江の南方、少くとも百哩の邊に入り、歩兵の一團これを後援すとの公報あり。然るに吾人は次の断定をなすを得べし。即ち日本軍が據りて以て根據地となさんとする平壤より北進せんとする時には、現下鴨綠江附近にありと稱せらるる露兵は、日本軍の優勢なるに辟易して退却せざるを得ざるべし。韓國統御は今回戦争の一大目的なるが、半島帝國は日本の掌握に歸せん。但しその獨立は條約の確保する所なりと雖、其地位埃及の現地位と同一様なるべきは明白にして、京城に於ける韓帝はカイロに於ける代王と同じく、依然として名義上の權力を行ふべしと雖、實際は其保護者が韓帝の名義を以て統御に任ずべし。

日本は戦争繼續により、此外何物を得んことを欲する者ぞ。若し日本にして海陸兩軍駢進して、旅順及び浦鹽を包圍せば、數月を出でずして是等要岩を占領するを得るの望みあり。而して之を占領したる曉、日本制海權を掌握する限り、之を保有するを得べし。日本前述の兩要岩及び北韓に於ける軍事上重要なる地點を有

せば、露國が哈爾濱又は貝加爾湖附近の供給根據地に大軍を集合したる後、日本に逆撃を加ふべきは、又期待し得べき事態なり。日本軍隊を密集し、努めて迅速に哈爾濱に挺進し、依つて以て前述の如き逆撃を見越すは日本の得策なりや如何。抑も哈爾濱の地たる、旅順に至る鐵道及び浦鹽斯德に至る鐵道の交叉する所に位し、旅順に至ること約四百哩なり。日本軍斯くの如き遠隔の内地に入り敗北することありとせば、殆ど全軍を殲滅するなるべく、日本軍の奔つて海岸に達するものは少數なるべし。これに反し露國哈爾濱に於て敗を取るにことありとするも、單に行動の沮滯を來すに過ぎず。かの露軍は貝加爾湖附近の新根據地に據り、更に兵力を聚むべく、日本は哈爾濱の一時的占領の外何等の得る所なからん。蓋し經濟上及び軍事上の理由により、日本は其軍隊を進軍の起點地たる海岸に復歸せしむるの已むを得ざるものあるを以て、久しく哈爾濱を保持する能はざるなり。

故に曰く、日本司令官にして細心深慮ならば、旅順及び浦鹽斯德陥落後は、防勢的態度を把らざるべからず。日本にして現時の制海權を持続する限り、右兩港及

び韓國地峽に於て占むるを得べき倔強の地位より撃退さるゝの虞れなし。然るに日本にして、海岸を距ること數百哩なる哈爾濱に進軍せんか供給根據地と戦地との接近に伴隨する莫大なる利益を喪失し、竟に奈破翁の覆轍を履むに至らん。蓋し日本軍たとひ哈爾濱を占領するも、到底久しく茲に止まること能はざるなり。

巨大なる露國を一大會戦の下に屈服せしめんとするは不可能のとなり。されど日本の如く軍港に據りて完全なる制海權を有する敵國に對し、露國は根據地を距つると數千哩の地に於て、攻撃的動作を維持せんことを努むる時は、財政上及び物質上疲憊するの已むを得ざるに至らん。されば一旦日本の掌握に歸したる旅順及び浦鹽斯德を取戻すこと能はざるべく、韓國に侵入して成功することも覺束なきに至らん。

日本司令官は、戦史の教訓を重んずべきや否やは、乞ふ之を後日に徵せん。要するに日本司令官にして、露國の國力及び其整撻執着の性質を輕視する時は、或は思はざる失敗を招くことあるべし云々。

其二 鴨綠江南山戦争以後遼陽戦及び黄海大海戦に

亘る時期に於ける彼等の觀察

甲、鴨綠江南山戦の時期に於ける彼等の觀察

一方に於て鴨綠江岸に露軍の優勢なるあり、他方には旅順の外線南山の嶮あり。日本軍の能力の第一の試験は、此二役に存在せしなり。故に此二役は歐洲の評論界を動かしたる第一原動力なり。此時に於ける彼等の觀察眼が如何に變改せられたるか、最も注意を要すべきものなり。

(1) 此兩戦に對し彼等は如何なる觀察を下せしか

倫敦五月三日發電報に曰く、鴨綠江に於て日本軍が全然勝利を得たるを確むるの報告に接し、當地に於ける満足の大なること東京も及ばざるべしと思はるる程なり。朝刊新聞紙は何れも其社説に於て黒木大將の戰略の成功を嘆賞し、實に英國も其同盟國の軍隊が露軍と相對するに於ては、其伎倆大に疑ひなきを得ずとなし居たるものなるが、今此勝報に接す、思ふに同盟國は良騎兵を缺くと雖、間もなく又鳳凰城より露軍を驅逐すべきを疑はず。未だ巨細の報に接せずと雖、日

本軍中近衛兵は最も勇敢に戦ひ、専ら砲丸の焦點となり、最も死傷者多かりしが如し。別箇の報告は突貫の行はれたるを曰ふ。日本の成功は専ら其砲兵の精銳なりしと、露軍の大砲が餘りに輕小なりしに基因するものなること明かなり。日本の勝利は歐洲の諸都府を全然驚倒したり。此事延いて露國をして公債募集に困難を醸さしむべしと。又二日伯林發電報に依れば、夕刊新聞紙は何れも日本の勝利の價値を以て、最も小なるものなりとせり。蓋し彼等は日本の勝利を惡むものなり。併し軍人社會は此成功あるべきを豫期し居たるなり。ナチシ、ナルツアイツングはこの戦闘は鴨綠江に於ける露國の兵數が著しく過大視せられ居たる證據なりと思惟し、ダグリス、エンブンドシャウは露軍が大砲を失ひたるは、露軍の退却に對し香ばしからざる色彩を附するものなりと曰へり。

又伯林發外務省着電に曰く、
獨逸の新聞は我陸軍の戦勝に對し、特に注意すべき評論を試みたるものなく、兎角控へ目なるに似たり、尤も我電報を發表するに當り、概して附言して曰く、最初の大戦が日本の勝利に歸したるに伴ふ無形上の結果、及び露國の人命及び大砲

に關する重大なる損害は、容易に恢復せられざるべく、其倉皇安東縣を撤退したるものは、以て露軍の全敗を見るべし。下部鴨綠江の地方に於て、露軍が目下對抗運動を再始することなきは、最早論を俟たずと。

ノイエ、フライエ、ブレッセは日本の戦捷に關し、左の如く論評せり。

日本は曩に海軍に於て數回の成功を得、今また次ぐに陸軍の戦勝を以てせり。日本が歐洲の一國と干戈を交ふるに於て、其武勇必らず之に劣るべしとの豫想は、今や全く否定せられたり。今日に當り日本の陸軍を以て露軍に超越せりとなすは、早計に失すと雖、其對等たるに至りしは、最早疑ひを容るべからず。而して這般日本の成功は、政治上の局面に對して重要な影響を及ぼすべきのみならず、其無形上の結果は實に測るべからざるものあり。既往に於ける海軍の成功よりも一層深刻にして永久なる感想を生ずるに至るべし。從來の非運及び災厄は既に露國の人心を沮喪せしめたること甚だしく、其望みは一に陸軍に集注し、人民は翹首して最初の捷報を待ち居たるが、今や鴨綠江に於ける戦敗に依り、此信念も亦極めてたよりなきものとなれり。露軍は準備の整はざりしを辭柄として敗報

を糊塗するを得ず。何となれば其援軍を送遣するに於て三個月の餘裕ありたればなり。蓋し軍事上の見地より之を觀れば、露軍今回の戦敗を以て未だ大局を決したるものと云ふに足らざるべしと雖、日本軍は既に鴨綠江の右岸に占據するに至りたること及び五日間の戦闘に依り、其砲兵の優勝にして軍隊の堅忍なる、且つ其精確なる射撃の技能を證明したることは、確に注目するの價ひあり。終局の勝利は、他の軍隊と數戰の後、恐らくは一層多數の生命を犠牲に供して後決せらるべし。

今を距る四十五年前、通商條約が日本を驅つて列強と共に文明の域に向はじめたる以來、日本は亞細亞人種の常性に反し、不撓の氣力と非常なる慧敏とを以て講究研鑽の功を積み、今や遂に強大なる露國に對抗するの勇氣と自信とを有するに至れり。若し他に其匹儔を求むれば、吾人は日本を以て亞細亞に於けるピエモン(伊太利はピエモンより起りて王國となれり)又は普魯西と稱せんと欲す。今や日本の國運は懸りて滿洲の野にありと謂ふべし。

又ローカル・アンツアイゲルは左の如く論評せり。

鴨綠江畔の戦闘に就きて特に注目すべきは、海戰に於て既に嶄然頭角を顯はしたる日本人が陸戰に於ても、また熱練なる歐洲の軍隊に對抗し、其第一回の交戦に於て較著なる成功を收めたる事實、及び日本人の軍事的材能を發揮したる其作戰の方法に對する、歐洲列強の激賞を博したる事實是なり。

クロバトキン將軍は各方面よりの危険、次第に集注し來たるを以て不安の地位にあり、此危険を避くるには同將軍畢生の智慮と、其麾下軍隊の勇敢とに待たざるべからずと。

又アルゲマイネツアイツングの論評に曰く、日本陸軍の勝利は之を輕視すべからず。島帝國の陸軍が歐洲一國の陸軍と大戦場に於て對戦したるは、實に今回を以て嚆矢とす。而して今や日本は血色斑々たる桂冠を以て其軍旗に光榮を加へたり。若しそれ露人の所謂、二倍の優勢に對し十分の防備なかりしとの辯疏の如きは、實に謂はれなきの言なるのみ。日本參謀本部は、其用ひ得べきだけの兵力を特定地點に進め、優勢を以て敵を伐ち、之に酷烈なる打撃を加ふるに足るの能力を有したるなり。總ての戦争に於て初陣の成功は極めて重要な關係を有し、其影

響する所、戦路上よりも精神上に於て殊に遙に大なりとす。鴨綠江の戦捷は、日本は勿論清韓兩國(日本に於けるよりも)に與へたる感動は、普佛戦争中、ワイセンブルヒに於ける佛國敗軍の報道が獨逸に與へたる結果と相譲らざるべきなりと。又伊國トリビユーナ新聞は曰く、鴨綠江岸に守勢を執れる露國の困難は攻撃を取れる日本軍の困難の如く大ならざりしに拘らず、露國が斯くの如く急速の全敗を招くべしとは何人も豫期せざりし所なり。露軍が安東縣及び其附近の要地を委棄したるは、果してクロバトキン將軍の心算たる一般兵略と相副ふや否やの判定は之を將來に譲るの外なしと。

ラバトリー新聞は曰く、安東縣の戦争は未だ以て滿洲に於ける戦争の運命を決したるものと云ふに足らず、然れども五月一日の戦役は最重要なる事實即ち露國の陸軍に於ける準備は、其海軍に於けると齊しく不完全なりしことを證明したり。軍略上の見地より之を見れば、露軍の退却が日本軍に勝利を與へたるは疑ふべからざるなりと。

イルボ・ローマノ新聞は曰く、露國は陸戰に於て第一次の致命的敗戦に遭

ひたりと雖、而も吾人は未だ之が爲めに何等の速断を下すべからず。佛國の重なる新聞は、陸戰に於ける日本の大勝利に關し、何れも之を以て日本陸軍の一大奏功となし、其無形の影響の重大なることを認むると同時に、此事實は未だ以て現戦争最終の運命を左右するに足らずと説けり。

右の内或新聞紙は曰く、露軍の目的は唯攻撃的作戰を再始せんが爲め、中心地點に軍隊を集中すると同時に、退却の際成るべく多大の損害を日本軍に被らしむるにありたるを以て、鴨綠江の委棄は露軍の自ら豫期せし所なりと。

又或新聞は日本軍が鴨綠江を攻取じ、露國砲兵隊より多數の速射砲を捕獲せるは重大なる事實なりと云ひ、社會黨新聞紙は全然日本軍の成功を讚嘆し、露國陸軍の無能を喝破せり。

ブチットレビユブリック新聞は、露國將軍の怠慢不熟練及び不統一と、日本將軍の大膽にして且つ細心なる軍略とを對照して、著しき懸隔ありと述べ、エコー・ド・パリは恐るべき大危険は清國人に及ぼす無形の効果なり。蓋し其中立は單に風雲觀望の意に外ならざればなりと説けり。

日本捷報の至るや、巴里取引所に於ける露國公債は暴落し、最近數日間九十一乃至九十二フランの間を昇降せしも、五月二日に至り八十九フラン二十に下落し、即ち極東に於ける紛争發生以來の最低價格を現出せり。

維也納のノイエンフライエンツェは曰く、今や日本は嘗に海戦に於けるのみならず、陸戦に於ても亦勝利を收めたり、即ち日露兩國の陸軍始めて陣頭に見るや、戦闘五日間に亘り、而して其結果日本軍は終に鴨綠江を渡過して滿洲の境域に進入するを得たり。抑も此戦争は敢て大戦と稱すべきものにあらず。随つて戦局の終了に何等の影響を及ぼさざるは固より論を俟たずと雖、兩軍頑強に相争うて、終に日本軍の勝利に歸したる今回の激戦に由りて、戦局の如何を推斷し得るものとすれば、吾人はこの大戦が短期間に終局を告ぐべしとは思考する能はざるなり。何となれば戦争をして短期間に終結せしむるは、日本人が陸戦に於ては第一回の戦役に當り、海戦に於けるが如く勇敢にして戦争に熱達せる危険の敵手たることを證せざるの場合に限ればなり。今陸續到達する詳報に據れば、日本軍は露軍に加ふるに最初報道せられたるよりも遙に多大なる損害を以てし、以て

益、その容易ならざるの敵手たるを知らしめたり。日本に好意を表する英國の新聞紙は、今朝に至るまで、尙日本の鴨綠江戦勝を餘りに重視するの不可なるを警告したれども、日本軍が二十門の大砲を鹵獲し、剩へ將校を併せて多數の捕虜を得たるを見れば、其戦勝は決して之を輕視するの謂はれなく、日本人は歐洲の一國を敵として戦ふに方つては、十年前日清役の鴨綠江戦に於けるが如き戦功を收むると能はざるべしとの説の如きも、昨日來その失當の言たるを明かにするに至り、又今後移りて滿洲の野に發展する戦局には、交、勝敗あるべしと雖かの巨人と侏儒の戦争なりとの比喩の如きも、鴨綠江の一戦に依つて終に亦その失當の比喩なるを證するに至れり。勿論、此第一回の戦争に由つて、直に日本人を以て陸戦に於ても亦露國人に勝るものとなすは大早計たるを免かれずと雖、少なくとも彼此同等なることは最早疑ひを容るべからざるなり。又之を政治上より觀察するも、日本人の鴨綠江に於ける勝利は、重大なる關係あるものと云ふべし。何となれば戦争の終了期は、之が爲め更に遼遠となり、自今世界各國は永く東亞戦争の影響を受けて、不安の状態にあるべければなり。

又日本軍が第一回の陸戦に於て、收めたる勝利の効果は、獨りこれに止まらず、之が無形の効果殆ど測るべからざるものあり。蓋し其人心に及ぼしたる影響は、總て海戦に於ける從來の成功よりも一層深厚にして、且つ永久的なればなり。海戦の成功は大ならざるにあらずと雖、これ露國艦隊が旅順口に於て未だ備へざるに突然襲撃せられたるに由ると稱し得べく、現にラムズドルフ伯は兩三日前、現今及び將來に向つて仲裁を拒絶する意を示したる廻文に於て、右の事由を引用したるにあらずや。且つそれ露國は未だ曾て世界の大海軍國間にあつて優越の地位を占めたることなく、其海軍史にはツェヌメの海戦以來更に顯著なる戦勝の記あらず、曩に露國の旅順艦隊が非常なる不幸に陥り、有力なる五隻の戦艦艦前後相踵いで損傷し、その内の一隻が重望を擔ふて東亞に至りたるマカロフ中將と共に海底に沈没するや、露國に於ては之が爲め意氣大に銷沈し、皇帝すら尙且つ曩に仁川に於て撃沈せられたる装甲巡洋艦ゾリヤーク及びコレーツの乗組將校に與へられたる勅語に於て、其狀を陰蔽せらるること能はず、殆ど祈禱文に類する悲哀愁歎の語句を放たれたり。海軍の不運斯くの如くなりしを以て、勢ひ

國民の希望は一に陸軍に繫り、第一捷報の來たるを遲しと待ち構へ居たりしが、圖らずも今また鴨綠江の敗報到り、爲めに陸軍に對する希望も亦當分水泡に風するに至り、而も未だ備へざるに乗じて不意に襲撃せられたり、この事由を以て自ら慰藉するを得ざるに至れり。露人は驚くべき精力を以て、八千キロメートルに亘る長距離を、氷結したる貝加爾湖を經由する輸送業の大困難に打ち勝たざるを得ざりしにせよ、殆ど三ヶ月來戦地に向けて軍隊及び軍需品の追送をなし得たるにあらずや。意氣銷沈したる最近數週間に於て、マカロフ、スクリードロフ、クロバトキン等諸人の名聲に對する露人の希望は如何に大なりし乎、不安の念を抱きながらも自ら勵まして敢て將來の成功を豫言したる右等諸名將より結局捷報の到るを期待するの衷情如何に切なりし乎。然るに今や陸軍に期待したる希望も、亦此くの如く一頓挫を來し、初回の戦闘は遂に著しく露軍の敗北を以て終れり。尤も日本軍が五時間の戦闘に於て、其大砲命中の確實なると、其軍隊の剛勇忍耐及び砲兵の優勢なるとを現實にして、昨日以來鴨綠江の右岸を占據するに至りたるは、事重要ならざるにあらずと雖、之を

軍事上より觀察すれば、露國今回の敗戦は固より未だ大局に關係するものにあらず。その最後の勝敗を決するまでには、尙不幸なる鮮血を流すこと更に甚だじかるべき幾多の大戦を経ざるべからず。奈破翁の言の如く、神は果して強者に與みずとせば、日露の孰れか先づ氣息を絶つべきかは、一に之を將來に待たざるべからざるなり。之を大局より觀察する時は、日本陸軍第一回の勝利も亦將に起らんとする激烈なる戦闘の端緒たるに過ぎず。然れども斯かる端緒と雖、また戦敗國民に取つては、其自覺心及び奉公心を阻喪すること甚だしきものあり。況んや今回の事の如きは、既に遭遇したる不運誤想の連鎖中に、更に一の新連鎖を加へたるものなるに於てをや。思ふに今回の敗報は距離遠隔なるが爲め、實際よりも誇大に全亞細亞及び全露國民に傳播せられ、東日本海より西ソイクセル河に至り、南ヒマラヤより北北氷洋に達する露國の國威に大打撃を加へ、而して露人の運命益、非なるに従ひ、之と反比例に日本人の忍耐力及び決心は愈々鞏固に、その勇氣及び戦勝の信念又更に大に加はるべし。之を要するに日本軍が戦勝を收めて鴨綠江を渡河し、進んで滿洲の一地點を占據したるは、軍事上重要ならずとする

も、其無形の効果に至つては實に測るべからざるものありと云ふべし。蓋し露國は自國の勢力と其世界に於ける地位とに對して、從來博し居たる所の信用を保持せんが爲め、今回の敵手に向つて全力を盡さざるを得ざるに至りたればなり。歐洲の一大陸軍國と交戦中なる敵手は、往年清國と戦つて全勝を占めたるに拘らず、半世紀以來常に歐洲の徒弟として目せらるる後進者とも云ふべき異常なる島國民なればなり。彼は今を距つる四十五年前、各國と結びたる通商條約に依り、始めて世界文明の同伴に加はるの通路を開きたる以來、驚くべき機敏と智能とを以て、不屈不撓歐洲の文化を修得することを努め、遂に強大なる露國と雌雄を決せんとするの勇氣及び自信力を發揮するに至れり。吾人は正に言はん、日本人はそれ亞細亞のビエモン若くは亞細亞の普魯亞ならんと。彼は今や自己の運命を試みるの壯舉に出でたるが、滿洲の野は蓋し其運命を定むるものたらんと。我軍の鴨綠江を渡り九連城蛤蟆塘の線に至りて、其勝運を收めたるは、彼等の最も驚歎せる所なり。

ニューヨークトリビュン曰く、從來露國人は勿論他國人も亦謂へらく、日本人は海

戦に長ずるも一旦陸上に於て露軍と相見ゆるに至らば、忽ち大敗を招くべしと、然るに特り日本人は優勢なる艦隊を以て露國艦隊を突撃し、之を打破するの實力あるを示したるに止まらず、今や其陸兵を以て露軍砲兵の前面に於て急流の大河を渡り、堡障堅固の要地に於ける露軍に對して、正面攻撃を行ひ、以て之を撃退するの實力あるを示したり。これ軍事上實に感賞すべき偉功なりとす。

ニユーヨークサン曰く、日本人は何れの點より觀るも、海上に於けると均しく陸上に於ても、亦恐るべき勁敵なり。露軍の九連城に占據するや、其地の要害を得たる猶ブレヅナに於ける往時の土耳其軍の如し。當時土耳其兵は其第一戦に於て尙能く露軍を撃退し得たるに、今回日本の歩兵は一舉してブレヅナに劣らざる堅壘を攻め落したり。且つ此第一戦の事歴は以て日本が管に其驍勇無比の兵士を有するのみならず、又軍略戰術上第一流の指揮官を有することを表明するに足れり。

ニユーヨークタイムズ曰く、交戦一度開始せらるゝに至らば、日本歩兵は其堅忍不撓の點に於て露軍に優れることを示すべしとは、軍事批評家の豫期せし所なれり。

ごも、これと同時に日本騎兵は到底コサックと對抗するに足らず、其砲兵も亦均しく露國の砲兵に劣れるものと豫想せられたり。尤も露國砲兵の日本砲兵に優れる所以は、單に其行動の敏捷なるの點に存すとなし、馬匹騎手も露國は日本に優るが故に、露國騎兵が日本騎兵に超越せりと認められたると同一の理由に基づくものなりき。然れども此點に關し、最早優劣の如何を論争するものなきが如し。露軍は日本の攻撃に備ふる大砲も、亦之を撃退するに用ふる大砲と共に、戰闘開始當時の位地に其儘据る置き、終に其四十門の内二十八門を捕獲せらるゝに至る迄、未だ曾て之を移動したることなきものゝ如し。然れども最も多く敵を惱ましたる日本軍の大砲は、濠内に据付られたるのみならず、又能く掩護せられたり。加ふるに日本軍は、露軍の野戦砲より遙に遠距離の着弾力を有する攻城砲を用ひたり。これ露軍指揮官の自認する所にして、畢竟露國の遺算に屬す。露軍は巨砲を前面に輸送するに於て敵國と同等の便宜を有し居るものなるが故に、砲火を交ふるに方り、始めて野戦砲を以て之より一層遠距離の着弾力と廣口徑とを有する攻城砲に對抗せざるべからざるを發見したりと。露國は自己の外何人を恨

むること能はざるなり。

ニューヨーク・アメリカンは曰く、日本の周到なる準備は實に世界をして驚嘆せしめたり。然れども先見には自ら定限あり、自今滿洲に入ること愈深ければ、從つて其豫めの方略を用ふる能はずして、臨機の必要に應じて行動の方針を決するの外なきに至るべし。

フィラデルフィア・インタワイラーは曰く、今日の所にては日軍の勝利は間然する所なし、日軍は此勝利を得て今後如何なる行動に出でんとするか、吾人を以て之を觀れば、彼等は滿洲内地に露軍を窮追せずして、寧ろ遼東半島に占據し、同半島を扼制して交通の途を斷ち、以て旅順の陥落を速かならしめんとするに似たり。然るに今回の鴨綠江畔の會戦に就きて、露國新聞は五月五日までは尙詳報を待つとを言ひて、批評甚だ多からざりしが、なほ其一斑を案するに、ノーヴェ・グレミヤは曰く、クロバトキン大將の聲明せる忍耐の時は、今漸く將に來らんとす。日本人は前進すると共に益、困難を感せん。今日の大患は清國の態度にあり、わが外交官たるものは、清國政府をして局外中立を破るの危険なるを悟らしむるに務め

ざるべからず。露國は必らず勝たざるべからず、而して我犠性をなすこと益、多くして、敵より要求すべき損害賠償は益、大なるべきなりと。

ウイェドスチは曰く、これ日本の一勝利なり、吾人は今かれこれと戦敗の責任者を問ふなかれ。勝敗は戦争の常なり、唯、大優勢の敵と健闘したる戦死者生存者に光榮あらしめよ。然れども日本人が此成功を買ふには不釣合の大高價を拂ひたり。しかも斯くして得たる成功が、彼等は旅順閉塞の上にもあらしめんことを希ふに相違なしと。

陸軍社會の機關ルスキ・インヴァリツドは曰く、一八〇五年露人は五千人を以て埃國シエーリングラーベルン人三萬に對して會戦をなし、爾後百年鴨綠江畔に於ては八千を以て日本人四萬人と戦ひたり。古來露國人は義務の命する處にありては生命を抛つに勇なるものなり。日本は此勝利を得るに不釣合の高價を拂ひたり。其回復蘇息するには必らず長時日を要せん。

ノーヴェ・グレミヤの軍事批評家は曰く、カシタリンスキ少將の報告を見るに、露軍は四月三十日の夜撤退せざるべからざりしは明かなり。カシタリンスキ

は明かにその潰滅に了るべきを豫見したるなり。唯露軍が踏み止りて敵に此くの如き大損害を加へたるは、驍勇剛毅より生ずる所の一奇蹟と謂はざるべからず。想ふに黒木大將は近々前進に用ふべき軍隊八箇師團を有せん。而して奥大將の軍上陸するときは之と相合し南方街道を取りて進まん。南方街道は其海軍と協同し得る利益あるのみならず、鳳凰城を經由する山岳地の困難なし。然れども日本軍は遼東の聯絡を遮断するの策を試むるの前、先づ鳳凰城の露軍を始末せざるべからずと。露國參謀本部の一高等官は、日本軍が今直に滿洲に進軍せざるべきを説いて曰く、日本人は必らず自ら注意を加へ、鳳凰城の露軍に我側面を曝すが如き失策に出でざるべし。予の見る所を以てすれば、彼等は鴨綠江畔の陣地に築壘し、大孤山より軍隊を上陸せしむるの策に出でん。遼東を横断して前進するが如きは、彼等必らず之をなさじ。何となれば一方遼陽方面よりはクロバトキン大將より一側を衝かれ、一方旅順方面よりはステッセル中將より一側を衝かるゝ虞れあればなりと。

以上は鴨綠江戰に對する批評の重なるものなり。南山戰に對してはロイテル電報先づ英國の激賞を報じて曰く、日本軍の金州に於ける勝利は、日本軍が海陸共に露軍よりも優秀なるとに對し、鴨綠江の勝利より一層強固なる要求權を設定する者なり。何となれば金州に於ける露軍は、其防備を整ふるに對し多大の時日を有したればなりと。倫敦に於ける新聞紙は一般に之を激賞し、テイリー・テレグラフは、此勝利は如何にして戰鬪なる者が指導せられざるべからざるかを示すに於て、あり得べき最も完全なる標本の一なり。日本軍の品質は、日本軍を殆ど理想の軍隊たらしめんとす。日本軍は最も驕慢なる歐洲軍の伍伴なりと曰ひ、スタンダードは日本軍人の勇氣は又々凡ての障害の打克つべからざる者なると、及び優勢は常に其敵をして勝者たらしむる者たることを認識するを拒否せしめたりと曰ひ、グラフィックは露軍は優秀なる指揮と最も不撓なる勇猛とに依り、其堅壘より驅逐されたりと云へり。佛國の主なる諸新聞は南山に於ける我戰勝に對し特に論評を試むるものなりしが、各種の報道を掲載するに當り、附言せる處の諸評論を綜合するに、彼等は

之を以て赫々たる成功とし、我陸軍の勇敢忠實にして又愛國心に富むの證左と認むるに於て一致するものゝ如し。然れども戦争終局に於て大なる影響ありと認めざりしものに似たり。

獨逸新聞フオツシツシエツアイツング新聞は、再び金州に於ける我戦捷を評論して曰く、露國側の報告に依れば其防禦は單に示威的に止まると云ふも其然らざるは該地點に堅固なる堡壘を設けたるを以て知らるべし。今回の戦争に依りて、旅順口の進軍は既に盡きたり。是實に作戰の巧妙を極めたるを示すものにして、恰も普魯西近衛軍のサンブリヴァを略取せしに比するに足れり。他の一方に於て露人は此戦争の價值を縮少し、之を以て些々たる事件と看做さん力をむと雖、今や露國陸軍の威名は既に地に落ちたり。日本軍が其精銳なる砲兵を以て近日旅順口を陥るゝを得るは最早疑ひを容れざるに至れり。露帝は旅順口を救はんが爲め、クロバトキンに南進を命じたりとの風説あるも、是果して事實ならば、最も不吉なる行動たり。昔佛將マクマホンは自己の意思に反し、命令に服従するの已むを得ざるに至りて、終に悲むべき末路を遂げたりしにあらずや云々

と。

因に記す、サンブリヴァはメツの東北十三キロメートルに位し、一八七〇年八月十八日佛軍はカンロペール元帥指揮の下に、最も堅固なる堡壘を以て防禦せるも、普軍は多數の死傷を冒し、一舉して之を拔きたる所なり。

南山の戦勝は鴨綠江畔の戦勝を承けて、歐洲大陸をして日本陸軍の價值を承認せしめ、併せて此承認は今後の政略を決定せしむる力あるを以て、其評論は詳かに之を講究するの必要あり。倫敦タイムスは、五月三十日の紙上に論じて曰く、露人が五月二十六日の大敗衄に就きて、緘黙言ふ所なきは、其未だ敗衄の真相を知らざるに由る乎、若くは之を言ふを欲せざるがためか、これ最も注意すべし。彼等の軍隊は、數週中二たび自ら選定せる陣地に於て、其心中は知らず、外面には輕侮を極めたる敵より攻撃せられて全く潰敗し了れり。既往十年間、全亞細亞をして白人露帝の陸軍が、不可敗てよ口碑を注入傳播せしむるに務めたるの勞は、今や之が爲めに、一敗地に塗れ、また之を隠蔽せんとして能はず。又これを辯解せんとして能はざるに至れり。想ふに爾後幾十年間、全亞細亞は露國の今日を記し

て忘るゝことなかるべし。見よ露國は海陸共に相劣らざる潰滅、償ふべからざるの打撃を蒙りて、其海陸軍の恐るべきといふ觀念は、亞細亞人の意識中より拭ひ去らるゝに至れるなり。則ち此戦争は畢竟其成敗如何を問はず、此一事既に永久に涉り、極東に於ける露國權力の消長に大影響あるを免るゝ能はざるべし。由來露國の極東に重きをなせるは、其實力如何にあらずして、主として其威望にありしなり。而して所謂威望は、一朝にしてなるものにあらず。例へば一種の植物の如し。其初芽の暴風に吹荒さるゝ時は、發育極めて緩徐なるを免れざるなり。故に露國は假りに今後好情態の下に復すと想定するも、その東洋人心に對する往日の勢力を挽回するに至るは、必らず長年月の後ならざるべからず。蓋し東洋人は自ら想像力を逞うし、謂はれなく露國を恐怖せしなり。これ即ち從來露國が東洋に勢力ありし所以にして、而して此勢力は、かのカシニ―伯が常に誇れる所又其自ら務めて之を養成し、又下僚をして務めて之を助成せしめたる所なり。虛威遂に何をかなさん。而して露國は、虚喝の萬能力を信すること餘りに深く、又餘りに繁く之を用ひ、而して遂に其使臣の警告をも聽かず、之をかの決して之に恐怖せず、

又其術に欺瞞せられざる國民に用ひるに及んで、早くも自ら其果報を收めたり。其太平洋艦隊の精銳は、之が爲めに亡び、其陸軍は、之が爲めに重ねて大敗駟を招き、而して其多年遂行に刻苦せし政略の第一目的物たる不凍軍港は、之が爲め孤立重圍に陥るに至れり。將來の事、今に於て之を言ふは尙早の誇りを免れずと雖、公平無私の局外者より之を看れば、聖彼得堡官邊の大言壯語にも似ず、露國の前途に當つては、專制君主國を顛覆するに足る所の諸大危険の伏在せざる乎を感ずるに禁へざるなり。

奥大將の戦勝や、凡そ司令官たる者之を得て、皆自負して可なり。露國參謀本部の一人は、鴨綠江戦前、奥大將と黒木大將とを捉へて冷評して曰く、黒木大將も一大將帥なり、奥大將も一大將帥なりと。露人は今其冷評せる奥大將の爲めに此勝を制せられたるにあらずや。奥大將の戦勝は、之を單に物質的結果より言ふも効果莫大にして、即ち今後成功の門を開くものなり。然れども奥大將に見るべき者は、其物質的結果にあらず。古來帥兵術の拙悪なるにも拘らず、幸運と勇氣とを以て之と相等しく、若くは之にも勝れる結果を得たる者固より之あり。奥大將

の戦勝に至つては、即ち遠見深慮兵事の大則に通じ、實地の詳細を極め、處務の慎重決行の勇を示す者なり。決行の勇とは時機到來を視るや、慎重如何に拘りたらず、僅少時の間に百物を賭して邁往決行するの謂ひなり。金州戦報を閲するに、巧みに此等の諸性能を併せ用ひたるを徵すべく、是、奧大將が眞に能く其戦勝軍を指揮する人たるを示す者にあらずや。凡そ日本軍の戦勝は皆同様の諸特長を示せり。是即ち先づ其應になすべき所を審かにし、而して後に之を決行するの準備を整へ、以て事の最大効力あるを期する者なり。此驚嘆すべき國民が科學の力を兵術とを如何なる程度にまで完備する乎は、之に由つてこれを知るを得ん。凡そ人の智慮と勞力とを以て成就し得る所は、皆豫めこれをなし、一も成敗を運に任せず、乃ち其一度攻撃に着手するや、全軍の士皆其努力と犠牲とを傾注するにあり。日本將校が殺人の術を其歐洲教官より學び、而して之を改良して數學的の精密を加味する伎倆に至りては、亦甚だ推稱するに堪へたり。然れども如何に科學の力あるも、直に之を以て職員として勇氣忍耐紀律あらしむると能はず。それ兵火相交ふるに當つて、此等の素質は義務上一層緊要の元素をなすものなり。今よ

り四年前北清事件の際、佛國司令官フレール少將は、清國に於て親しく日本軍を見て、其世界の大陸軍たるを豫言したるが、世界の衆目をして日本陸軍の此高地位を認めしめし所以は、實に其科學の力と職員の勇氣忍耐紀律の功とを併せ有するに基つかずんばあらず。金州の戦ひ如何に戰略其妙を制することも、日本軍下士卒の遺傳的剛膽と愛國心とあるなくば、安んぞ之を奪取するを得んや。日本軍司令官の報告は簡單なりと雖、能く之を讀破する眼力あるものは、其意味深長、趣旨無量にして、能く其實を審かにせるものあるを感得すべし。彼等は十六時間の久しきに涉つて、突貫又突貫、薄暮遂にステッセル中將が防禦工事を悉くし、砲五十門を以て頑強に防守せる堅壘を陥れたり。其死傷三千五百を算ふるに至れるは、如何に其奮戰健闘せる乎を想はしむ。鴨綠江畔の戦ひに於て、露軍司令官は日本兵が白刃に辟易して進む能はざるを言へりと雖、こは陋劣の誣言たるは亦以て之を證せり。彼等が極東露軍の最も精銳なる者を、旅順口の主要外壘より撃攘し、旅順要塞攻撃の道途を開くに至れるは、實に長時大激戦に於ける奮撃突進の功に由るもの云はざるべからず。鴨綠南山兩役の他面に於て、旅順には閉塞の運動

行はれつゝありたり。米國の諸新聞紙は特筆評言を吝まずして曰く、第三次旅順口閉塞に關する東郷中將の報告發表せられたり。想ふに米將フラガットのモビル灣要塞攻撃及び英將ネルソンのコペンハーゲン港にて丁抹艦隊の撃滅を防ぎし外、此くの如き壯舉は海戰史上蓋し絶無と云ふべし。かのフラガットは、麾下の艦隊を率ゐて、南軍の水雷を沈置せる波間を疾馳し、敵の術策を罵倒して曰く、水雷何かあらん。四點鐘せよ、艦長トレイトン前進せよ、ジューエット號一杯を而して旗艦ムートツフォード前頭となりて力戦し、遂に全勝を博せり。又コペンハーゲン役に際し、サー・ハイド・パークは、ネルソン及び其麾下諸艦のデンマーク要塞及び艦隊砲火の爲め、將に殄滅せられんとするを見て、退却すべしとの信號を掲げたり。ネルソン此信號を望見するや肩を聳し且つ謂へらく停戦すべしとや、吾豈中途にして戦ひを停むる者ならんやと。更に艦長を顧みて曰く、フオーリッ、予唯隻眼を有するは汝の知る所の如し。故に時々盲人となるの權利ありと。因つて望遠鏡を採り故らに之を旨する所の眼に加へて曰く、我真に信號を見ず、我接戦の信號を依然掲揚せよ、是、我長官の信號に應答するの法なり、我信號を樁柱に

釘せよと。

前頭二箇の史跡は、閉塞隊の爲め旅順口に於て踏襲せられたり。即ち軍船八隻は石塊を滿載し、白晝東郷麾下の艦隊と分れ其行程に上りしが、勁風猛雨急に起り、諸船相失せり。閉塞隊指揮官は天候不良の爲め行動効なからんことを憂ひ、中止の信號を掲揚せしが、各船之に従はず、強烈なる風雨、要塞の猛火、若くは露軍の敷設水雷を冒し、全力を以て續航せり。二隻は水雷に罹りて爆沈せしが、殘餘の諸船は其目的地に達し、閉塞員に依りて爆沈せられ、而して閉塞員の大半は戦死せり。惟ふにサンチャゴに於けるホブソン大尉の快舉も、赫々たる日本人の旅順口閉塞事業の爲め、其光輝を失へりと云ふべし。而して日本人の行動は、海洋に於て舉行せられたる最も壯烈なるものとして、永く史乘に特筆大書せらるべきなり。

(ロ) 彼等は此時期に於て如何に戦局を觀察せしか

鴨綠江戦は互にクロバトキン將軍の首力を目標として前進する第一の大戦なり。南山戦は旅順口を目標として前進する第一の大戦なり。海陸兩面よりの攻撃

陸面よりの包圍の序幕なり。戦局は之より開展し行くなり。
モーニングポストは曰く

遼東の野に於ける日露兩軍の運動を報ずる通信は頗る錯雜にして正味少なきが故に、未だ俄に刻下の形勢を揣摩すること能はず。雖、獨り日本軍が今日迄些しの失計誤策をなしたる形跡なきは斷言するに難からず。今や兩軍相對戦すること既に三旬に垂んとするにも拘らず、曾て日本軍に些しの失計誤策の形跡なしと言ふは語簡なり。雖、意深からざるを得ざるなり。

今や日本軍は、遼島半島少なくとも、蓋平を東西に貫く一線以南を占取するや疑ひを須ひず。即ち蓋平以南を占取せりと云ふ。雖、露軍地を掃へりと云ふにあらす。日本軍は戦路上重要なる、あらゆる地點を略取せんと期し、而して其目的を達したり。既に戰略地點を占む、露軍其間に點々散據することも、日本軍此地を占取せりと云ふに何の不可か。是あらん。日本軍は三軍より成れり。第一軍は一個軍團にして黒木大將之を率ゐ、激烈なる戦闘を以て鴨綠江を渡れり。爾後の消息は之を詳かにせず。第二軍もまた惟ふに一個軍團を下らざるべく、遼島半島の西方海岸

に上陸して鐵嶺を占領し、其一部は旅順の周圍に地歩を占めたるものゝ如し。第三軍は其勢力未だ詳かならず。雖、是亦小軍ならざるが如く、第二軍の上陸と殆ど時を同じうして半島の東方海岸に上陸せり。而して日露兩軍の運動に對しては、毫も確實なる報道に接せず。雖、種々の風説續々吾人の耳朵に達し、中には風説として雲煙過眼視し能はざる者少からず。蓋し日本軍の目的は明々白々にして、今更絮説するの要なし。刻下の問題は其目的を達する用兵の道如何にあるのみ。而して旅順口は封圍若くは急進なる攻撃に由つて之を陥落せしむるや明かなり。其果して封圍と急攻の何れを採るべきやは斷言し難し。雖、蓋し惟ふに後の方法に出づるならん。そは兎も角もあれ、日本軍は封圍若くは急攻するに十分なる勢力を此方面に留め、殘餘の軍を以て徐々に北進し、露軍の大々の抵抗を試むるに及んで、之を撃破せんと期す。刻下の戦闘は皆斥候の衝突に過ぎざるは、蓋し之が爲めにして、これ吾人の豫期せる所なり。露將曰く、敵の行動甚だ緩漫なり。露將の觀察を以てしては、爾かく感ずるも無理ならず。雖、其緩漫なるは、將帥の優柔不斷なる爲めにあらず。適當の所に三個の軍團を集合したる迄は、成るべ

く無益なる小戦を避くる方針なりと知らずや。乞ふ少しく吾人が斯く断言する所以を説かん。抑も遼陽奉天は鐵道を以て北方に通ず。日本軍たとひ正面より之を攻め、之を陥れ得ることも、唯露軍をして北方の守地に退かしむるに過ぎず。而して露軍は彌、北すれば彌、本國に近づき、援軍供給の便益を加ふるに反し、日本軍は益、根據地即ち海岸方面に遠ざかり、而も破壊せる鐵道は、容易に用をなさざるべし。日本軍の輕々しく、悪軍長驅せざる所以蓋し此處にあり。

然らば即ち日本軍の作戰如何、吾人を以て之を觀るに、戰線には見兵小勢を出して、永く露軍を南方の守地に引付け、別軍をして側面を迂回して退路を断たしめ、一舉して之を殲滅するの策に出づるや必せり。吾人は日本軍の一部奉天の北東に向つて行進するを聞けり。眞偽未だ知るべからずと雖、要するに此風説は、賢明なる將帥の當に採るべき作戰の一端を揣摩せるものと云ふべし。以上論じたる日本軍作戰の豫想は、果してその圖に當るや否やは、時を俟たざれば知るべからずと雖、日本軍の一部、一度露軍の背後に出でたる曉には、全軍忽ち目覺しき活動をなすべきは、今に於て之を断言するを憚らざるなり。

鴨綠江畔の戦勝に先だつ數日、佛獨英の諸新聞は四月より五月に掛けて海土樓は既に日本に歸し、略、動かすべからざるに至りたれば、爾後日本は陸戰に於て敵を撃破するに専らなるべきを説きて、露國の計畫如何を問へり。而して其所見に至りては各、相異なりき。巴里新聞ゴローアの軍事批評家は、クロバトキン大將は今や日々會議を期し居るならん。大將は兵家の所謂攻勢的守勢を執り、日本軍の進み來たるを待つが爲めに防勢を執り來りたれば、一朝時機の熟するを見るや、元氣恢復せる軍隊を指揮し、進んで攻勢を取り、日本軍を攻撃せん。而して其第一大戰は必らず露軍の勝利に歸せんと論じて疑はざりき。

伯林新聞フランクフォルター・ツァイツングは、之に反して牛莊、哈爾濱間の戰略的、情形は、巴里新聞の論するが如し、遂に露軍の戦勝を断するを許さず。露軍の戦線は延長極めて大なり。而も露國軍隊は鐵路本國より陸續到達するが故に、大に之を減縮すべきを期するを得ず。日本は即ち獨逸人の所謂、血なき戦争は無意義の戦争なりと云ふ教訓を學び知らば、必らず露軍の中心に向つて全力を集注するを疑はず。而して此中心の何處にあるやは未だ知るべからずと雖、日本は必らず

之を知らん。若しクロバトキン大將にして、其中心を強固にせば、日本軍は此事實を看破し、側方を攻撃するに努めざるべからず。即ち日本軍は、時と處を見て臨機應變に戰術を用ひ、露軍の戰術に勝たんことを要す。然れども此事あるを以て、未だ遂に日本陸軍の勝利を斷定すべからず。日本人は戰略戰術に明かなりと雖、寧ろ學者的なり。彼等はヨミニ、クラウゼキッツ等の兵學大家の原則を遵奉して、クロバトキンの軍を攻撃すべしと想はるゝも、露軍は必らず日本兵學教官の未だ講修せざる戰略戰術を以て之を迎へん。乃ち戰爭の結果如何は今豫め説くべからざるなりと論せり。

獨逸のハンブルグ、ナハリヒテン、ライプツヒ市、グレンツポーター、伯林の軍事週報等二三新聞は、みな戰局を説くこと略前記新聞の論調の如し。露國新聞ノーツエ、ウレミヤ及びグラーツダニン等は、英國新聞の現戰局を推論するに、地理の上に重きを置けるを非難して曰く、倫敦新聞は、日本軍は逐次露軍の各連鎖地點を占領して、以て其決勝地點まで進攻せば、即ち可なりと論ずるも、一地一市府の占領は以て戰爭の大局を定むるに足らず。露人より見れば、極東決勝地點と云ふべ

きものなし。開戰の始め、英國新聞は日本軍は如何なる危険を賭するも、旅順口を攻陥せざるべからずと勸告したるが、旅順口には未だ其事あるを見ず。即ち歐洲大陸の専門家の意見以上の如くなるに拘らず、亦他に多少ながら日本陸軍の價値を認むるものも尠からず。露國新聞グレンツポーターの如きも、亦露國が古來外國との陸戰に於て、日本の如き勁敵に接したることなしと公言せり。然れども巴里新聞フィガロの海軍批評家は、非常の樂天主義を執りて、今日世人が露國海軍のなすなきを悲むは謂はれなし。今後遠からずしてバルチック艦隊は極東に至り、而して浦鹽艦隊は日本海に出沒するに至るべく、驚天動地の報に接するも近きにあるべしと説けり。倫敦タイムスの軍事寄書家は、旅順に艦隊あり、且つバルチック艦隊來援の威嚇あるに於ては、日本は二萬人を失ふも急に旅順を攻陥せざるべからず。今や旅順艦隊は、日本の第一目標たる價値を失したれば、未だ以て安んずべからず。大陸に陸戰を行ふには必らず先づ旅順の艦隊を全滅するを期せざるべからずと論せり。

五月十二日の巴里新聞エコー・ド・パリに掲げたる露都通信員の電報は、露國軍人

社會の意見を承けたるものとして、當時歐洲に於て注目を惹きたり。其説に據るに日本軍の海城方面に前進するは、目下其主目的が旅順口にあらすして、黒木與兩大將の聯絡を通じ、前者は遼陽に向つて正面攻撃を加へ、後者はクロバトキン大將の右側を攻撃するにあるものと見るべし。貔子窩、金州、復州には日本枝隊四萬人上陸したり。是等の枝隊は、旅順の露軍防禦の爲め小部隊を留め置き、海城に集中せんと計るが如し。今、日本軍がクロバトキン大將を其右側及び正面より攻撃するの準備に忙はしきは、露國參謀本部に於ても能く之を知れり。一大會戰近きにあらんとなり。又、巴里刊行の紐育ヘラルドの露都通信員は、露都軍人社會の意見として、日本軍の成敗は主として其運動の遲速にあり。クロバトキン大將が日本の大軍を制壓するに足る兵力を備ふるには、今なほ五週間を要すべし。日本軍此機を外さば、成功六つかしからんと云へりと報せり。

獨逸新聞ブルリナーターゲブラットの特派員グートケ大佐は、五月十五日附を以て奉天より電報して、日本軍は牛莊より遼陽に至る鐵道線に並行して北進中なり。日本軍の右翼は戒慎を加へて前進し、左翼は一層の戒慎を加へて前進しつゝ

ありといふ。露軍騎兵の強力部隊は、日本前進軍の兩側を嚴密に監視せり。又、遼東半島の露軍に對しては、日本の一大部隊亦前進し居れるが、其數頗る大なりといふ。目下雨降り續き道路泥濘、奉天は平穩なりと報せり。

又、ルースキヤ、ウヰドモスチの軍事觀察員、エスカカー氏の所見によれば、日本軍屢奇捷を博し、進んで鴨綠江を渡り、威を南滿に振ふ。人或は大に之を惧るゝも、是決して戦局の全般に重要な價值を有するものにあらず。蓋し夏季に至ればクロバトキン大將は、大兵を提げ日軍を邀撃して、再び之を韓土に掃却するは、更に疑ふべくもあらず。若しそれ日軍にして南滿の要地に據り、根底を堅くし之を死守するに於ては、或は之を撃退すること亦容易ならざるものあるべし。然れども戦ひは獨り南滿の野に限るべからず。我左翼の大軍は浦港より南下して韓國に入り、一舉これを奪ひ、再舉京城を略し、進んで日軍の背面を突き、猛然彼を掩撃せんか、彼は必然また起つ能はざるに至るべし。世間往々、秋季に至り露の大軍滿洲を南下して、日軍を粉砕すべしと云ふも、これ大に不可なるものあり。抑も南滿の地たる道路險惡にして、廣狹一ならず、我三十萬の大兵は、一團として之を進むるの術な

し。宜なる哉、日軍進路を數道に分ち、三軍相並んで北上するや、鐵道線路より鴨綠江に向ふの道五條あり。其内稍、良道と謂ふべきものは、奉天及び遼陽の二道にして、大概車輛を通ずるを得べく、海城、大石橋及び蓋州の三道は、狹隘崎嶇、到底軍道と稱すべからず。かの秋季滿洲南下策の如き、偶、勞多くして効力なきは、また多言を要せざるなり。二十五萬の大兵、豈輕々しく之を動かすべけん。況んや我兵の秋季南下するに當りては、沿道の各驛既に幾回か戰場となり、隨處荒寥兵を駐むるの便鮮なきに於てをや。

元山及び京城等掩蔽の爲め、多大の兵力を浦港に集中せんとするも、目下輸兵上緊要の機關たる西伯利亞鐵道は、輸送力に對しては何等支障を與ふることなかるべし。此方面に於ける輸兵の方法を案するに、五月上旬後にありては、水路及び鐵道の兩者に頼るを以て最も適切なりとすべし。即ち歐露カザニ市より、西伯利亞のチメニ市を経て、イルクーツク市及びハバロフスク市に出づるを可とす。カザニ市よりベルミ市までは、ウォルガ水域の汽船及び貨船極めて多く、兵員十五萬、輻重一千餘萬布の輸送は、眞に易々たるものにして、ベルミ市よりチユメニ市迄

は、此間七百七十一露里鐵道に依りチユメニ市よりは、トーラ、トポリ、イルツイシユ、オビの四大川並にオビ、エニセイ兩河間の運河と、エニセイ及びアレガラ河の兩河を利用して、イルクーツク市に達するを得べし。若し右運河にして大船の通航に不便を感ずるときは、オビ河の支流トミ河の一大埠頭たるトムスク市より、汽車に便乗して、クラスノヤルスク市(此間五百七十六露里)に至り、エニセイ河の水路に依り、アレガラ河に浮んで、イルクーツク市に至るべく、イルクーツク市よりアレガラ河、貝加爾湖及びセレンガ河を経て、ウエルフネウチンスク市までは、水路を用ひ、それより後貝加爾湖鐵道に移り、スレーデンスク驛(此間は百七十九露里)に至り、又ミルカ及び黒龍の兩河に浮んで、ハバロフスク市に達し、烏蘇里河與凱湖及び綏芥河は共に該鐵道と並行し、其水路は孰れも舟楫の便に依るを得べし。此他ハバロフスク市の上流二百一十一露里に於ける黒龍、及び松花兩江の合流點ミハイル、セメヨノフスカヤ村より、松花江を遡りて、哈爾濱に至り、同地より鐵道浦港に出づるも亦一の道途なり。

オビ河及び黒龍江に浮べる汽船及び貨船は、其數夥多にして、軍隊輸送上の便利

極めて大なり。獨り後貝加爾鐵道線路に於けるウエルフネウチンスク市より以東ガルイムスカヤ停車場までは、滿洲行及び浦港行の軍隊輸送に並用せざるべからざるが故に、此間は稍、輸兵の困難なきにあらざるも、目下この線路は行合停車場約二十個所増設中にして、異日竣成の上は十二露里の速力を以て、一晝夜に二十四列車までを運輸し、自然右輸兵の困難を排除するに至るべし。

ウォルカ河以東、水路及び鐵道に頼れる輸兵の道途は、上來詳述せる如くなるに、行進の途中幾回か水路と鐵道との乗換を要し、且つ輸兵列車が速力は、毎に快速ならざるの缺點ありとすると、一面に於て滿洲軍の輸兵に妨碍をなさずして、同時に浦港に大軍を進むることを得るの實効真に至大なるものあり。即ち前述の道途を經過すれば、五月より八月まで約四ヶ月間に、歐露より浦港に十七萬の軍兵を送達すること寔に易々たるものなり。浦港より南下して元山及び京城に至るの道路は、之を義州街道に比すれば頗る平易にして、進軍亦甚だしき困難なく、従つて進軍すれば、従つて軍用鐵道を布設し、後部を整備し、益進んで日本軍の背面を攻撃することを得べし。而も進軍の途中は到る所人口稠密にして、百事の便

宜少なからざるものあり。然るに日軍は南滿又は西韓の地に主力を集め、我滿洲軍に對抗せざるべからざるを以て、到底威鏡地方に大軍を出すの餘力なかるべし。よし此地方に日本より出師するも、其兵種は國民軍に屬するものにして、兵數も僅々十二萬五千乃至十二萬八千を出でざるべく、而も是訓練不十分のものなるを以て、我南下の強兵には殆ど敵すべくもあらず。况んや秋季に至れば、我バルチック艦隊は、舳艫相啣みて東洋に進航せんとする者あるに於てをや。日本艦隊は又昔日の猛威を逞うするを得ざるや必せり。一朝我露軍にして京城を占領するに至らんか、日軍腹背敵を受け、命旦夕に迫らんとす。之に反し、露軍は滿韓兩土を擧げて是を掌中に斂めんか、茲に日露の戦局全く終結を告げ、是より折衝の時期に入るを得べし。茲に於てか、交戦の目的始めて將に達せんとす。但し媾和談判中は、時に或は我艦隊は日本沿岸に示威運動を試むるも亦可ならずとせず。

獨逸の公論は、此頃に至りて始めて、稍、日本戦勝の特性と價值とを了解するに至れり。伯林が嘗て聖彼得堡の附屬たりし時より以來、獨逸人は露國の戦力を信認すること牢固なりしかば、漸次其魔力の崩頽するに至りしも、尙之を信するに困

める程なりしなり。然るに今回の戦争に於て、其結果斯くの如くなるを以て、扱ては然りしかと始めて其眞價を首肯するに至れり。

フオッシュニエツアイツングは曰く、大國が深き思慮もなく、漫然危険極れる冒險業に投じたるは、露國の今此大戦争に於けるが如きもの、古來決して例を見ざる所なり。露國が日本と對等の抵抗をなすに、其見込をすら立て得るまでには、尙十萬人幾億圓を投せざるべからず。況んや之を打破せんと期するに於てをや。聖彼得堡及び莫斯科よりの各通信は、露國は戦費を支辨せんが爲めに幾何まで國費を節減したるかを詳報し、殊に地方農民に及ぼしたる影響は慘情を極め、如何に輕く打算するも、一箇年分の戦費を支辨するが爲めに國民に及ぼしたる悪影響を恢復し、慘憺たる形迹なからしめんには、凡そ十年の苦心經營を要すべし。加之、露國の亞細亞を通じて威信を失墜したる結果は、更に重大なるものなり。亞細亞人は、露國が僅に二三十年までは齒牙にも掛けざりし邦國の爲めに、今や打撃を受くるを見て、驚愕の念に打たれ居るものなりと。

事態此くの如きを以て、露國は幾何まで此打撃に堪へ得るか、日本は幾何まで自

制の力を守り得るか、は獨逸人の推究する處となれり。其意見に據れば、露國が十分の準備を以て急遽戦ひを交へたるより考ふれば、若し日本にして是迄其作戦の特筆たりし慎重と先制とを併用して過らずんば、奉天に前進し若くは哈爾濱に前進するに於て、前途の大障礙あるを見ず。又露國の嘗て、極東に於ける同國の位地を防備する大城壁と頼みし旅順口には、外國人の觀察のみならず、聖彼得堡の信憑すべき向の意見を以てするも、既に拋棄して其運命に一任せんとするが如く、結局下關係約當時の現情を再顯するに至らんと云へり。事ここに至らば、則ち如何、露國外相ラムスドルフ伯は、各外國の干渉を排斥するを宣言したりと雖、獨逸新聞中には日本益、戦勝を收め、露國をして其君主制の安全を危うくするの媾和條件を以て、和議を訂結せんとするに至らば、歐洲列國は各自の利害心より、結局外交上の運動に出づるなきやを豫想する者尠からざるなり。將來に對する此等の危惧を説くは、今尙早し。加之、滿洲處分問題は、暫らく通商列國が滿洲の現情に異議なきを表するを得て、日本は此地を占領する期間中に於て之を解決し得ざるにあらず。日本は通商列國の領事が滿洲に赴任し、各條約港と通商する

に至るを歓迎するを疑はず。何れにもせよ、日本は現に開戦の始め、滿洲を清國に還附するの意を發表したる事情もあれば、滿洲は露人の手にあらんよりも、日本人の保護の下にあらば、列國の通商及び政治上の利益安固なるを得べし。然るに此事情は獨逸新聞多く之を忘失して、黃人患の悪夢に襲はれ、日本の戦勝は歐洲列國の清國に於ける福祉及び前途を破壊するに至るべきを推論するもの尠からず。又此等の社會にては、日本の約束は是まで露國と相反し、堅きこと證券の如く、曾て渝ることなかりし事實をも忘却せるなりと。

戦局の將來に就きて、批評家交之を論ずるも、露國陸海防禦力の崩解に關しては、毫も新解釋を與へず、北獨逸ガゼットの軍事批評家は、今尙ザスリーチ少將の決意して鴨綠江畔に決勝戦を試みたるは、クロバトキン大將の意に出でたるを信ずること能はず。思ふに日本軍は、滿洲鐵道の南部線を利用して、旅順口に重砲を送致する事を得ん。又日本軍は、遼東半島の西岸に沿ふ諸地點に於て、其運送船より兵器其他の重要材料を揚陸するの便を有すと云へり。又聖彼得堡よりポストに達する通信は、露都の人心極めて悲嘆に沈み、人民は露軍の用兵上に對する一切

の信用を抛棄したりと云ひ、又鴨綠江畔の戦敗は、初めは一の事變と思惟したるも、今や國家の一大災禍たるを悟り、而して此戦闘に参加したる露軍の四割、或は死し或は傷けるを承認せりと云へり。維也納發電に曰く、九連城の戦勝を以て始まり、旅順口の孤立及び鳳凰城の陥落に至る、前週中の日本の成功は、維也納の上下をして惘然たらしめたり。維也納人は此に至りて、始めて露國戦力の輕重を疑ふに至れるなり。彼等は日本の機先を制して着々成功するを見るは、猶迷信者が其確信する所の迷信を醒まさるゝの感あるものゝ如く、尙自ら幾多の惑ひあるを免れず。且つ政治上の理由より、澳國の官邊及び政府は、開戦の初めより露國最負なりと。蓋し此態度たるや、既往七年の間、澳露兩國は輯睦なる干繋を維持し來れるを以て應に然るべきなり。澳國の露國に同情を表するは、固より自然の理なり。今日のフレンデンプラットフォーム曰く、今日まで陸海の作戦は、總て獨り日本の計畫に相合するのみならず、露國計畫と相合するものなりと。蓋し此くの如き奇怪なる説を聴くも、亦敢て怪しむに足らざるなり。

澳國の露國に同情を表するは、政治的理由の外に、黃人患を憂ふるが如き一種の意味あり。黃人患の説は、澳國の輿論に浸潤すること極めて深し、某大學の教授の如きも、昨日公衆に演説して、黃人患の故に日本の戦勝を怖るゝ所以を述べ、又清國に事業を營める某請負師の如きも、電車の中にありて吾等獨逸人基督教徒は、黃人の浸襲を防がんが爲めに、死せる露兵に代りて隊伍に加はらざるべからずと演説し、衆之を喝采せり。

然れども、ガリシヤ若くは匈牙利に於ては、此等の蒙昧なる豫言に賛成せざるなり。波蘭人は日本の勝報を讀むも憂色なく、匈牙利人は日本人の勝報を喜ぶの餘り、日本の戦勝は果して繼續すべきや、今の連戦連勝は却つて良好に過ぎざるなきやを恐るゝばかりなり。匈牙利のベスターロイドと、澳國のフレンデンブラットとを對照せよ。兩新聞は共に保守黨にして官邊に縁故なしと雖、澳匈兩國人の戦争に對する感情は、此等に由つて能く之を徴するを得べし。匈牙利の新聞界は、概ね日本の戦争を喜び、其喜色を隠す所なし。未だ遂に排露を以て目すべからずと雖、日本に同情を説きて自ら憚らざるなり。

敵國人の中には、戦争の前途を悲觀するもの漸く多く、五月二十四日維也納ノイエ・フライエ・プレッセ亦左の報を掲げたり。

今や露國が急に勝を制すべきを信する者は、極めて少なきを見るに至れり。近頃軍事通信員中には、日本軍は前進を躊躇し、鳳凰城より退却すと報するものあれども、樂天主義の人々にあらずんば之を信するものなく、其他は皆クロバトキン大將に對する信用を減じ、隨つて人々は旅順救援の策決行せられざる今日にありて、大將の攻勢を執りて敵に對するあるを思はず。却つて奉天以北に退却するものと期し居るもの如し。かの軍事に精しく愛國心に富むポトヤノフ將軍の如きは、疾くに國民を警むるに旅順の陥落、敗殘艦隊の全滅に至るなきを保せざるを以てし、以て豫め國民の覺悟を促したり。將軍は曾てセバストポールの役に參加したるが、もとの悲觀者なるなり。又、黒海艦隊の一部を出して、ロジニストウエンスキー少將のバルチック艦隊に合せしむるは、之をして再び黒海に復歸せしめざる覺悟ある場合に限るべし。

孰れにもせよ、増援艦隊の急速出港は、今に於て殆ど不能に屬するもの如し。何

となれば極東に派遣せんとする新戦艦中、オスラビヤを除く外は、ロジンスト
ウエンスキ少將の旗艦となるべきアレキサンデル三世號の一艦僅に準備成れ
るのみ。其他アリヨール、ポロヂノ、フェルスト、スウオロフの諸艦の如きは、目下クロ
ンスタットに於て武装中にかゝれり。故に此等諸艦が、本年初秋前に戦闘に加はる
に至らんとは、何人も思ひ及ばざる所とす。

又極東大守と滿洲軍總司令官と相和せずとの報も、亦世人をして大に危惧の念
あらしめたり。莫斯科新聞モスコーフスキ・ウエルドモスチが、近頃クロバトキン
召還すべからずと痛論したるが如きは、内國に不平あるを示す所の頗る不吉の
兆と見るべく、同新聞は曰く、露國の敵若し一方に於て、政府をして將軍を召還せ
しめ、他方に於て内亂を醸生せしむるを得ば、是即ち日本をして勝利を收めしむ
る唯一の機會なりと。露國新聞中に斯くの如き言論あるは、正しく據るべき事實
なくんばあらず。然らずんば彼等豈斯かる不吉の言をなして、自ら悲しむものな
らんや。

クロンスタット發行の露國海軍機關紙コトリンは、自國に都合好き論説を掲げて

曰く、東郷艦隊の依然旅順口外を去らざるは如何。我右翼攻撃の爲め、牛莊附近に
上陸せんとする自國軍援護の爲めなり。我軍事上緊要なる鐵道線路を破壊せん
が爲めなり。旅順口と他の地點との聯絡を遮断せんが爲めなり。東郷艦隊は之が
爲め、既に二回旅順口の水道閉塞を試み、今後十分の成功を見るまでは、尙幾回か
之を繼續せんとす。而して牛莊方面の防禦として、我の約八萬の兵を駐屯せしむ
るは尙二箇月を要す。此間は東郷艦隊の行動に著しき變化なかるべしと雖、之を
經過せば我陸兵は牛莊に集まり、是より大勢一變して露軍攻勢を取るに至らん
されど牛莊防禦軍にして十分の兵數を得ざらん乎。依然東郷艦隊の封鎖を受け
ざるべからず。且つこの間黃海の航行權は全く日本に歸し、其軍隊及び軍需品の
輸送は縱横自由なるべし。然れども此くの如きは長く持續すべからず。クロンス
タット軍港にある我新成艦隊が、太平洋上に進航するの日は、東郷艦隊の旅順口外
を去るときなり。即ち我新艦隊が、旅順口を南に距る六百哩の地點たる、臺灣の
北端より將に黃海に入らんとするとき、東郷艦隊は去つて長崎方面に退却せざ
るべからざらん。此際東郷提督は必らずや全艦隊を率ゐて我艦隊を進撃するな

るべし。而して旅順艦隊も亦東郷提督の背面に突進威嚇するは勿論なり。然れども若し日本艦隊にして、又北進して旅順に迫らん乎、我新艦隊は之を追撃し、日艦を殲滅して又起つ能はざらむべし。要するに日本は船艦數多を有し、設備整へり。故に我艦隊は日艦を全滅する乎、拿捕する乎、二途其一を選まざるべからず。而して新艦隊と旅順及び浦鹽の兩艦隊との聯絡の如きは、誠に易々たる者、敢て喋々を待たざるなりと。

又日本軍の旅順包圍は、現今歐洲諸國民の最も熱心注意する所の大事件にして、軍事専門家は勿論、諸新聞の軍事評論も、盛に此事を論評し、クロバトキン將軍は果して旅順救援の目的を達し得るや否やは、旅順問題の燒點なり。今タンノ軍事寄書家が、クロバトキン將軍の旅順救援軍の戦ひに關し、得失賛否正反對の兩説を掲げ、最後に自家の意見を發表せるもの左の如し、素より露國最負の偏見と知るべし。

クロバトキン將軍の旅順救援軍の勝利を辯護する者は、日本軍の占め居る戰略位置の全く不良なる事を云へり。風風城方面に於ける日本軍は二個師團にして、

一方には第二師團と第十二師團の一隊あり、他方には近衛師團と第八師團あり、關東半島には第一、第三、第五の三個師團にして、遼東には第十一師團あり。此黒木將軍と奥將軍の統率する兩軍の間隔は甚だ遠ざかりて、其間には太孤山と西南某地方の處に甚だ薄弱なる第九師團と第十師團の連結あるに過ぎず。是、クロバトキン將軍に取りては最も僥倖なる事態にして、同將軍が此日本の最も薄弱なる陣地を攻撃するは、恰も奈破翁一世が敵の中心を襲撃せる例に則り、日本軍の中堅を突くの戰略に出づるを得べし。斯くて同將軍は旅順に到達するを得ん。旅順救援に赴かんとせる四萬の露軍は、日本の第二軍を背面より撃ち、ステッセル將軍の四萬の兵は正面より迎撃すべし。斯くの如くなれば、旅順包圍攻撃は全く不能に歸し、其代りに一場の野戦を惹起すべし。其野戦たるや、假令兩軍死活の別る大決戦となる迄には行かざるも、最大激戦の一たるべきは論を俟たず。されど露軍の頼みとなる所は、其増遣軍の到達なるべきを以て、此野戦は之が爲めに多少の利あるに相違なし。然るに論者或は言はん。此露軍の主力は、南方よりの牽制に依つて、其力を殺がるゝに相違なく、遂には日本軍の右翼となり、中堅たらんと

する師團の爲めに最も危険なる地位に陥るべしとされど此非難は其當を得ざるなり。何となればクロバトキン將軍は假令四萬の兵を失ふとも彼には尙十萬の精兵あるを以てなり。是山坡の間に陣地を占め其後背を常にコサック騎兵の爲めに脅かさるゝ日本軍に當るに餘りあり。

以上は露軍の優勢に左袒せる説なるが其反對に露軍の不利を豫想悲觀せる説は左の如し。

クロバトキン將軍の救援軍の不利を主張せる論に曰く露軍主力の位置は甚だ優勢にして十分の活動をなすに足れり。然りと雖此活動は幾多の方法を以てなすを得べく今クロバトキン將軍が自ら以て最好方法なりと信する所を以て活動すると假定せん彼には必らず彼の思想彼の畫策あらん彼は著名なるビルラが若し我報にして我計算を窺知せば我は之を燒棄せんと言ひたる如く自己の畫策は何人にも告げず然も露國はなほ同將軍をして或活動を選択せしめんとするか若し幸ひにして一の活動を選択せしめ得るとするも彼をして決して旅順に到着せしむべからず若し斯くの如き事をなさば彼は不知の間に旅順の

地勢のみに妄想し一の最も緊要なる事情——即ち敵軍の生ける力を忘却するものなればなり。論者或は日本の第二軍が背面攻撃をなして之に損害を與ふべしと云ふ然れどもこは到底成功するを得ざるべし。何となれば此第二軍は既に金州旅順靴子窩の各方面に於て優勢なる大軍の擁護を有するを以てなり。露軍は遼東の尖端に進むに従ひ其戰場狹隘となるを以て日本軍の側面より攻撃を受け多大の損害を被むるを免れず。此日本軍の側面は露軍の右翼より密集して其運動を扼捉すべし。されども若し日本軍は之を扼止せずとするも地勢の爲めに其運動を妨げらるゝを免れず。金州はこれ天險の要塞なり。日本軍は據りて以て此地を兩方面より其砲隊の重砲にて防禦し難攻不落の地となすに相違なし。想ふに日本軍は地勢を利用し遼東の門を鎖して茲に籠城すべし。斯くの如くにして露軍の運動は其目的を遂げず日本軍は豫て期する所の希望を達し露軍の主力は何等の活動をもなし得ざるまで損害を被ひり。只交通を妨ぐる位の事をなすに過ぎざるに至るべし。斯くて露軍は再び歐露より増遣軍の到着を待つを要するとなり。作戰計畫は再び之を變せざるべからざるに至らん。今や計畫は

断然たる運動に出でざるべからず。されど兵力の集中を完了し得るとするも、軍隊は其長官の何人たるを識らず、士官も亦部下の士卒を識らず、作戰計畫の變更と軍隊の集中を完全ならしめんが爲めには、月餘に亘る時日を要すべし。又兵力の集中が、必らずしも完全に成功するや否やは何人も證言するを得ざるべし。埃國新聞は説をなして曰く、滿洲南部に於ける日露兩軍の戰略上の位置形勢は、クロバトキン將軍が其主力を遼陽以南に前進せしめたるにより、戦争の局面は一變せり。露軍主力の正面は従來東南に向ひ、其前營は摩天嶺を睥睨せんとしたるも、今や露軍主力の正面は西南に向へり。露軍が新に占めんとする戰略的地位なる奉天を経て、哈爾濱に退却する自然の退路線は、今や其正面より一直線となり、以前この退路は、其左翼に偏したりしなり。露軍の正面が西南に移轉せるは、これクロバトキン將軍の爲めに甚だ有利なるべし。されど露軍左翼の新地位は、鳳凰城方向より前進し來たる黒木將軍の爲めに、擊破せらるゝの憂ひなき能はず。又日本軍の主力も、既に東方より西方に移轉したりと聞けり。野津將軍の大孤山上陸の第三軍は、岫巖の道を擊破して海城に向ひ、旅順を包圍せる奥將軍の第

二軍の背面を安全ならしめたり。日本の第一軍は、朝鮮の西北なる鴨綠江一帯の地線を防禦し、鳳凰城以北の敵を掃蕩して、其主力を西方に向けて前進せり。之に依りて黒木將軍の軍は野津將軍の軍を一層優勢ならしめ、第三軍と連結一致の活動をなさんとせり。

斯くの如く日露兩軍をして其陣形を一變せしめたるは、露軍の活動其原因となりしが、抑も日本が大孤山より牛莊に劃せる一線より其軍を滿洲に進むるは、一は其軍の根據地を海岸に置き、軍の供給に便宜を與へ、一は旅順包圍軍の背面を掩護して、之を安全ならしむる戰略に基づけり。斯くの如くにして、日本軍は旅順を攻撃すべく、又其主力の大部隊を遼東灣に據れる牛莊より、朝鮮灣に依れる大孤山までの一線に集中すべし。事態若し茲に至らば、遼東半島は全く露軍の南進を遮断せられ、旅順は到底救護すべからざるに至らんとす。

桑港クロニクルは曰く、輕薄なる批評家の言の如くんば、すでに日本の有に歸すべかりし筈の旅順口攻撃も、其進行捗々しからず、近々の中に其陥落を見るに至るべき望み至つて少なじと云はざるべからず。旅順口に止ること二ヶ月にして、

去つて遼陽に着したりと云ふアツソン・エーラッド・プレス通信員の報する所に従へば、露軍は一旦日本軍の手中に落ちたる陣地を恢復し、且つ數、攻勢を取り、旅順攻撃軍は目下徐々に工兵の力により進行しつつありて、終局の勝利は占め得べきも其行動は大に露軍の爲めに妨害せられ居れり。露軍は日本軍の工事を窺知するや、直に砲撃を加へて之を妨害せり。露國艦隊は損害を受くることなく、又守備兵の健康は良好なり。且つ要塞内には永く之を保持するに足るの糧食ありと云ふ。

此くの如き状態なるが故に露軍が旅順の陥落を免かれ得ることを信するは、強ち無稽にあらず。日本軍が港口閉塞に失敗し、且つ要塞の攻撃を奏せざるに依り、勇氣沮喪せしと云ふは恐らく眞ならざるべし。然れども右の如き結果は、若し守備軍にして今數ヶ月間頑強に抵抗を繼續し得ば、或は之を見るに至るべきか。事若し茲に至らんか、日本は外部の助力なくしては、勝利を博し得ざるべしとの説は開戦當時に於けるよりも、今日に於て寧ろ理由ありとすべきが如し。蓋し戦争初期に於ては事々物々皆日本の利と認められざるものなく、又皆露人の不屈不

撓の精神の如きは之を認めざりしなり。

軍事通信員ウイグナム氏は、二個月間滿洲にありて、遍く露軍の情形を視察し、六月中奉天より其結果を報道せり。其言に據るに大要左の如し。

日本軍の成功甚だ大なれば、若し其初め露軍絶望の域にあるに及んで、早く之に乗せば其功更に大なりしを疑はず。戦争開始の時にありては、露軍の兵數は鐵道其他の小守兵を除けば、五萬人を出でざりき。故に日本は二月八日旅順の水雷攻撃の後直に一軍團を大連灣、若くは靴子窩に上陸せしむること甚だ容易にして、旅順も忽ち陥落の悲運を免る能はざりしは、露人も自ら稱する所なり。當時鴨綠江畔に露兵三萬人ありしも、到底之に赴き救ふの遠なく、而して日本能く此打撃を加へ得ば、永久至大の打撃を感せしめ得たるなり。日本人が見ず、此好機會を逸せしは蓋し日本人は朝鮮を占領するを第一の目的と見たるに由るものなるべし。然らざれば吾人其理由を知る能はず。

二月中、本國よりの援軍南滿洲に到ること極めて捗々しからざりしかば、露人も始めて西伯利亞鐵道の輸送力を危ぶむに至り、而して其多少ながら陸續到着し

始めは三月末頃にしてそれも先づ砲兵を輸送する必要ありしかば歩兵の到着は自ら後廻じとなりて尙未だ多きを得ざりしなり。

クロバトキン大將が遼陽に到着したるは、形勢最も危急の時なりき。大將到りて之を見るに、軍隊は六萬五千、砲二百門に過ぎず、而も其兵は遼陽旅順間の單線鐵道に沿ひて配置せられ、其左翼は遠く百五十哩先の鴨綠江に差遣せられ、右翼は營口の舊砲壘に砲數門を以て自ら守るあるのみ。當時營口は日々敵襲を恐れ、たれば其劣弱を掩はんが爲めに種々の手段を施すに忙はしかりき。

因つて鐵道停車場へは砲六十門を卸したるも、繫馬備はれるは僅に二中隊のみ。他は皆人目を惹かん爲めの具のみ。軍隊は毎日外國居留地を経て、砲壘に往復せしは、これ畢竟此附近に大部隊あるを示さんが爲めの手段のみ。

クロバトキン大將が營口に往訪せし時、露兵五千人は砲壘附近に之を迎へたり。此内三千人は當日特に大石橋より來りしものにて、出迎への事終るや、即日午後大將と共に大石橋に還りたり。真にこれ一場の滑稽劇のみ。而もこれ相當の効果を生じ、外國通信員は皆歐洲に打電して曰く、營口には露兵一萬人より一萬五千

人ありと。

露軍の野砲五中隊、小口径砲若干門、大砲約五十門は、旅順のステッセル中將の許に送遣せられたるが爲めに、遼陽方面の露軍はこれだけを失したる譯なり。之に由つて、六月初めクロバトキンは砲兵の不足を憂へて、當時チタに於て動員中の砲兵四中隊を急に派遣せんことを求めたり。此砲兵は後に到着せしも、人馬共に教練半ばの者なり。後又砲兵五中隊來着せしも、其砲門は特種の型式に係るものなれば、當分用をなさず。但しこの間鐵道は都合好く運轉し、第三十一師團も既に着し、始めたれば、八月初旬には滿洲の野戰場は更に二個軍團を増加し、砲數も二百門を増すに至るべし。

モスコーフスキ・ウルドモスチは奇策を立言して曰く、

日本を打撃するの妙案は、巡洋艦を以て日本の商船を殲滅するにあり。蓋し此方法たる既に日本が宣戰公布に先ち、我商船に向つて實行したるの策なりとす。日本の海軍は約一千三百艘の多きに上り、帆船亦少からず、我よりこれを攻撃するは實に易々たるものにして、到る處の海上に好結果を得べきは疑ひなき所なり。

曾て本年四月二十五日、我浦汐艦隊出航のときの如き、忽ち三隻の日本商船を撃沈したるの好例あり。故に今若し我に十數隻の快速なる巡洋艦ありとすれば、日々數隻の商船を拿捕撃沈し得べきは勿論、之が爲め千餘隻の日本商船は航海の自由を失ひ、彼の貿易の損害は擧げて數ふべからざるものあらんとす。然れども之が爲め我有力なる巡洋艦、ノック及びハリソンの如きものを使用するは、偶、牛刀を鶏肉に擬するの嫌ひあるのみならず、旅順方面の實戦上、寸時も缺くべからざるものあるを以て、暫らく之を使用せず、唯何等武装なき商船に對するに、は假裝巡洋艦を以てするも、十分其目的を達することを得べし。假裝艦となすべき商船は、亦之を亞米利加方面に購求すること決して難事にあらざるなり。況んや曩に諸新聞紙に散見する所の如く、我政府は英米より巡洋艦購賣をさへ申込まれたることありと云ふに於てをや。

我旅順艦隊の運命日に非なるの今日は、實に日本商船に攻撃を加ふべきの好時機なり。日本艦隊は鋭鈍を擧げて、黃海に集まり、爲めに彼の東方海岸は何等の防備なく、縱横攻撃意の如くならざるはなし。此種の攻撃は、自然旅順封鎖の牽制な

り、黃海方面に於ける日本の威力を減殺すること少からざるものあるべし。わが利益は、特りに之に限らず、旅順艦隊は或は守勢より攻撃に變することあるべく、同時に商船に對する我假裝巡洋艦を益増加するに於ては、終に滿洲に於ける日本軍の後路を絶つての奇策なしと云ふべからず。若しそれ假裝巡洋艦に要する商船の購入費の如きは、幾百萬留に上るも決して之を吝むべからずと。

(六) 此時期に於て彼等は如何なる一般的觀察を下せしか個人としての此頃の觀察者が下じたる觀察は、尙頗る不透明なりし傾きあり。贅露夜日其何れにあるも、眼光紙背に透るものとは絶えて見るることなし。

贅露者たるヘンリー・マン氏は曰く、露國が日本の爲めに敗北すべしとなすが如きは論外なり。露國は斷じて敗北するものにあらざるなり。これ日本政治家が開戦を布告するに先ち、既に業に察知したるべき筈にして、苟くも斯くの如く明白なる事實が、彼等の注意を惹起せざりしとは到底想像し得ざるに似たり。故に彼等は或程度まで露國を撃破したる後、他國の干渉を求め、以て自國の勝利を確立すると同時に、露國の敗績をして到

底價ぶ能はざらじめんと豫想したりとなすを以て、事實の正鵠を得たるものとせん。然れども是亦無稽なりと言はざるべからず。思ふに干涉の提議は、今後幾回か起らんとするの機會あるべし。予は先づ日本に取り最も都合良き想像を試みる。即ち若し日本にして海上に更に多くの成功を得、旅順口は落ち、陸軍は初期に於て勝利を得、滿洲の大部分に對し一時的な主人公となることを得んには、列國が清國の保全を保證し、且つ戦争を休止するを條件とし、滿洲を清國に還附すべし。これに反じて、吾人をして露國に取り最も都合なる形勢を想像せしむれば、露國の災厄は既に一段落を告げ、旅順口は能く命を保ち、クロバトキン將軍は將に來らんとする日本軍の攻撃を撃破して攻勢を取り、有力なる露國艦隊は現下の非運を挽回するの望みを齎らして、東方に出航し、引續きクロバトキン將軍をして能く日本國に進軍せしむるにあり。事ここに至らば、日本並に英米兩國に於ける日本の友が、又干涉を求むべきや必然なるべし。或は當分大決戦を見ずして、日本は日本が戦争を持続するに堪へたる人と金とを有せざることを發見し、露國の大靜止力は露國をして究極の勝利を得せしむべきを自覺したりと想像せん。

是又等しく干涉を求むるの時なり。然れども露國が斷じて干涉を容れざるは、明々白々なり。しからは英國の地位は如何、思ふに英國は孤立を以て露國と相對し、事實海軍に取り何等のなすべきことなき場合には、戦ひを取てすることあるべし。また露國に取り都合悪しく、露國に對し戦ひを開きたる國に取り都合よき時機に於て、露國をして干涉を強受せしむるが爲め、米國が吾人と共に亞細亞大陸に戰闘を取てすべしとは、米國の政策を熟知するものゝ想像せざる所なり。此外干涉をなすことあるべしと思惟せらるゝ佛獨兩國と雖、一は露國の同盟國なるが故に、また一は或目的のために只々露國の歡心を買はんことを故に、共に露國に對し干涉を強行せざるべきは言ふまでもなし。思ふに日本政治家及び殊に一般日本人は、戦争を持続するも其到底彼に取り成功なきを見るや、日英同盟條約の正文を讀まんとするよりは、寧ろ専ら同盟の事實を見て、深く吾人の彼の爲めに計らざるを恨み、我同盟國は吾人をして地に委するに任すといふなるべし。而して日英同盟の結果が、我國をして列國中より好意を受くること、最も少なきものたらしめんとするは悲しむべ

きことなり。勿論戦争の結果は露國と列國の關係をして一變せしむべく、其總て繋かる所は露國の領土商業に關する平和條約の條項にあり。然れども幸ひなるかな、露國は敵國をして又もや露國を攻撃するの準備は、當分之をなさしめざるの保證を得ると同時に、商業土地に關し、歐米諸國の反對を買ふが如き條件は、之を附せざるを得べきことは吾人の信する所なりと。

右ヘンリッソールマン氏の主幹せるウァイルド・ウァイク雜誌にフレッド・ジーン氏の論文あり、曰く、日露戦争より推斷せられたる教訓にして、最も廣く行はるべきは所謂「魚形水雷の勝利」にして、筆を執るの人若し海軍の仕事に就き知る所愈、少なければ、右の説を主張すること愈、堅し。而も戦争中若し比較的著明なるものありことせば、それは魚形水雷の評価を減少したること是なり。

これ事實なり、魚形水雷は其成功したる場合に於てすら、尙且つ其成功は不十分にして、最も多くの場合には全然何の効をも奏すること能はざりき。露國の海上に於ける敗亡は、此魚形水雷の失敗に歸すべきものなり。

此言或は無理なるが如く聞えん。然も試に開戦以來の出來事を一瞥すれば、自ら

釋然たるものあるべし。魚形水雷を使用して成功を得たるは、二月八日の奇襲あるのみ。思ふに當時十隻の驅逐艦は、少なくとも二十發の魚形水雷を發射したるに相違なし。而して露國艦隊は、凡そ艦隊をして碇泊すべからざる位置に碇泊し居り、日本驅逐艦は巧に露國の信號を使用して、以て理想のごとく絶好なる状態を得たり。これ當時行はれたる説なるも、後に至り露國艦隊が味方の驅逐艦を見誤りて同志打をなしたるものなり。こと判明したり、本誌の記者は未だ其真相を知らざるものなるべし。故に露艦の位置は精密に知れ居たり。水雷の發射數は、精密に之を知るべからざるも、只三箇の水雷が露艦に多少の損害を加へたるのみにて、然も其損害は豫想より遙に少なかりき。若し魚形水雷の効力顯著なるを信するものにして、今假りに右の襲撃に先立ち、當時の状態にして示されたりとせば、何人も露艦の全滅を豫言したりしならん。

爾來日本の企畫魚形水雷のは、其都度失敗に歸したり。加之、露國亦日本艦隊を發見せんとして、損害を被り、大にその水雷艇を破滅せしめき。若し巡洋艦パーヤン并に其乗組員が、水雷艇の退却を掩護したる勇猛の動作なかりせば、露國は今や

恐らく水雷艇は皆無ならん。同國は少なくとも既に三隻若くは五隻の水雷艇を失ひしなるべし。茲に云ふ水雷艇とは嚴正の意義にいふ水雷艇にはあらずして、廣く魚形水雷を發射し得るものゝ謂ひにして、無論驅逐艦をも包含せしむるが如し。

茲に一箇の教訓あり、専ら公衆に對するものなり。日本艦隊は、最良なる英國流の水雷防禦計畫を正しく蹈襲したり。換言すれば巡洋艦を以て水雷艇隊を援護し、右の援護巡洋艦は常に敵の努力、魚形水雷を使用せんとするを以て無効に歸せしめたり。茲に忘るべからざるは、水雷艇に乘組める露國將校が極めて有力なる人士にして、生命を以て成功に對し支拂ふべき些小なる直段と心得居るものなる事是なり。然るに日本艦隊は何の苦もなく彼等を撃破し去りたるは抑も何の故ぞ。これ日本が有して、露國が有せざりし優勢なる巡洋艦のあるありしが爲めのみ。然れども若し假りに露國にして優勢なる巡洋艦を有したりとするも、更に別箇の障害のあるならん。日本の戰艦、即ち是なり。蓋し援護なき水雷艇隊は、到底戰艦隊の第一防禦線内に侵入すること能はざるを以て、全然無用の長物たるなり。

るなり。これ一般公衆が飽くまで記憶し置かざるべからざる所なり。

此教訓は、今日までの處、パーヤン號艦長ウインレン大佐の不休の努力によりて、多少模糊たりしなり。彼は一小艦を以て、幾度となく日本巡洋艦を喰止め、撃破せられたる露國驅逐艦をして能く沈没を免れしめたり。是、有力にして決斷ある人は、一見拮抗すべからざる優勢なる強敵に對して、能くなし得るの所のあるを教ふるなり。當時に於ては、實日本の傾向ありしが爲め、公にせられたる報道中、パーヤン號并に同艦長の功績に對しては、比較的輕少にして不完全なる公報中に於て、僅に之を窺ふことを得たるのみ。これ不幸なることと云ふべきなり。何となれば教訓を得んが爲めには、問題の兩側を見ること最も肝要なればなり。吾人はパーヤンが出港し、露國驅逐艦が歸來したるを讀むと雖、其他に至りては何事も聞かず。たと海戰を好める日本軍艦の行動のみに就きて詳報し、其艦隊の面前に於てパーヤンが其任務を行ふ上に於て必要なりし熱練決斷、勇俠は往々にして看過せんとす。若し露國にして三隻のパーヤンを有したらんには、同國水雷艇のなし得たるどころ、自ら異なるものありしならん。故に中型にして、良裝甲を有

せる快速の巡洋艦は、斯かる場合に於て最も必要なりと云ふこと、これ一箇の教訓なり。抑もパーヤンの装甲は哀れなるものにして、大砲の準備亦薄弱なり。然るに同艦の活動力に對し由々しき損傷を加へ得たるものは、戦艦の大砲あるのみ。同艦が屢、出港し屢、損傷を被れるに拘らず、遂に沈没するなくして歸來し得たるは不思議なり。我英國のカウンチー級の巡洋艦即ち州名を冠するものベッドフォード、ウエルウィック號など云ふは、パーヤンの有する甲帯を有せず。即ち吾人はパーヤン型の巡洋艦をも有せざるなり。我巡洋艦の甲帯は總て危険なるまでに薄弱なり。

海戦に於ける戦艦の必要を主張したる人士は、其彼等は誤らざる證據として、今回の戦争を指すことを得べし。露國は二月八日の災厄よりして、常に劣勢なる戦艦隊を有したり。故に同國は常に襲撃せらるるを待たざるべからざりき。偶、露國より攻撃を採れば、日本巡洋艦は退却して萬能なる戦艦の蔭に隠れ、露國艦隊は殄滅を甘んずるか、或は退却をなすか、二途其一を選ばざるべからざりき。今回の戦争中起りたる出來事は、一として戦艦の増建を忽諸にすべからざり。

るを證據たてざるはなし。戦艦は將棋のクインルクにして、巡洋艦はナイト、ピショップ、水雷艇はポーンなり。ポーン時にクインを取ることあらん。然れども之を以てクインルクの不用を云ふは、苟くも常識あるものゝ取らざる所なり。單に艦列を拾集するの點より云ふも、戦艦は何れの海軍に取りても最も必要なり。

射撃。今回の戦争が與へたる教訓中、最も重要なるは巧妙なる射撃の必要なること是なり。日露兩國は共に惡射撃をなせり。日本は未だ嘗て一流の射撃手となりしことなく、露國海軍には絶好なる射撃手ありと雖、スタルク提督は未だ嘗て演習の機會を與へたることなし。射撃距離亦極めて遠かりき。開戦前日本軍艦は、幾分か大距離射撃演習をなしたれども、大したることはあらず。露艦は全然此種の演習をなさざりしと想像す。兎に角兩國の射撃は極めて拙劣なり。若し第一流の遠距離射撃手を有せる一隻の軍艦あらば、敵をして悉く戦力方を失はしめたるべき筈なり。故に遠距離射撃演習は吾人に取り絶対に必要なり。英國に於ては艦砲射撃に對する一般公衆、并に軍人の注意は甚だ深く、吾人は今や敵

に對し戰闘距離以外に於て決して發砲することなし。是全くアーノルド・ホアイト氏に負ふ所なり。然るに目下動もすれば遠距離射撃は人其物の巧拙に基づくものにあらすとの故を以て、懸賞射撃の距離を増加するに對し、反對運動を試みるものあり。斯くの如き馬鹿らしき意見は、速に撲滅せざるべからず。かの海軍省が、懸賞射撃を以て規模を大にしたるピスリー英國クルスターにありに行はるる懸賞射撃同様のものとなさんことを計畫せるが如きは、大に賞讃せざるべからず。兵は戰闘距離に於て射撃する事を訓練するを要す。其他の距離は遊戯と異ならず。

嘗て説をなすものあり。比較的小にして最も有力なる艦隊は、比較的大にして有力ならざる艦隊よりも善し。然れども今回の戦争は斯くの如き説を胚胎せしむべき出來事を有せざるのみならず、却つて反對の事實を現はし、從來の戦争が輕んせんとしたる物質は、益人よりも肝要となりつゝありとなせり。是吾人の亦首肯する所なり。

日露兩國の軍人、指揮將校は別問題として、日本の勝利を得るは、其軍人が露

國に比し、優越なるものあるに負ふ所甚だ多からざるなり。我英國に於ては、日本協會々頭アーサー・デオンシー氏の如き俗人の説に動かされて、日本軍人の能力に就き極めて過大なる觀念を抱けり。予は日本海軍に幾多の知己を有せり。如何にも彼等は激烈にして愛國心強く、多大の勞働をなせども、無限の苦痛に堪ふる能力を除きては、眞箇の天才と稱せらるべき將校を見たることなく、水兵亦伶俐なるものなきにあらす。雖、彼等は深く重寶がられず、寧ろ愚鈍にして順良なるものを採る。即ち日本人の優れるは耐難の結果なり。

露國軍人の無能は英國新聞に於て説かれたり。然れども是未だ嘗て露國の軍艦に赴きたることなき人の言のみ。露國の將校は、事實に於て寧ろ英國將校の如く只その優劣の度合一層甚だしきものあるのみ。立派なるものあり、又愚鈍なるものありと雖、其何れに於ても英國よりも更に甚だし。又露國艦隊は英國の如く常に好適なる提督を有す。其例に至りては、或は英國も及ばざる所あり。露國水兵は極めて愚鈍にして、其性質は恰も善く成人せる子供なり。然れども方法を設けて彼等の長所を利用し、彼等の當惑すべき職務あれば、複雑を避けて簡易なるもの

とせらるゝなり。パーヤン號は別問題なり。同艦の乗込員は社會的失敗者並に悪運兒より成り、若し之を雇使するに其法宜しきを得ば、同艦長の云へるが如く、最も怜悯なる海軍々人となるべきものなり。今回の戦争より推すに、彼等は凡て怜悯にして、艦長ウイレン大佐は偉大なる人格を有せり。

日本成功の原因、故に人に就きて言へば、日露兩艦隊中一方が他方に比し特に優れるところなし。然れども物質は然らず、日本の軍艦は凡て露國の軍艦に優れり。大砲宜しく、彈丸彈藥は殊に宜し、數字上の優勢亦日本の占めし所なり。

日本艦隊は操縦其宜しきを得たり。然れども東郷提督のなし得たる所は、嘗てドレーキ、ファンツロン、ブルーアル、ネルソン、フイーグランドのなせる事業と其性質を同じうせず。マカロフは東郷より更に一層の天才なりき。斯くいへばとて、日本の功名には敢て累を及ぼすものにあらず、寧ろ日本が今日得らるべき最良の物質を有したる機敏を章表するものなり。然れども物質と數との脊骨的因子なるを示すスタルクを提督とし、露人が日本艦隊を操縦したりとせんか、其東郷艦隊よりも些少なる功を收めたるは疑はずと雖、若しマカロフをして同様の場合に立

たしめば、東郷同様若くはそれ以上のことをなしたりしならん。戦争は吾人に教へて曰く、英人の最上の戦闘力に關する套語を棄て、今後物質が人に比し、一層緊要なるものなることを知らざるべからず。實に吾人の海上に於ける將來の運命は、一に繋かりて軍艦武器彈藥をして、量に於ても質に於ても、批難する所なからしむることを努むると否とにあり。

ノルマン氏の論文に對し、ジッキンス教授は書を倫敦タイムズに寄せ、これを論駁して曰く。

ノルマン氏は謬れり。此戦争は日本の露西亞に對する戦争にあらず。此戦争は無腦無情の役人政治と、上テンノーより下ジンリキシヤマンに至るまで、堅く相一致せるダイニッポン國民の戦争なり。二千四百年前希臘人は希臘の存亡、アゼン人の自由の爲めに戦ひぬ。之と等しく日本人は今や日本領海の自由、日本國家の存亡の爲めに戦ひつゝあり。希臘人は勝ちぬ、而も數千の募兵を以て幾百萬の衆に勝ちぬ。露國外交官は何等の主義の爲めにも戦ふものにあらず。只領地を貪らんとし、只、温き海水を求めんとするにあるのみ。人或は露國が世界一般、殊に四面、温き

海水を以て圍まるる國を犠牲に供して、以て所謂温き海水を獲取せんとするを以て、正當の權利なりとなすものあるが如し。

予は多年英國協會の會員にして、露人并に其言語文學の嘆美者なり。又予の中年は其大部分を極東殊に日本に於て送り、極力ダイニッポンの難解なる言語珍奇にして興味ある文章を理解するに力めたり。予は千八百六十幾年以來、同國發達の大部分を親しく目撃したり。予は徐々として而も多少嫌々ながら日本人並に其以前教導者たりし支那人は、精神上より見るも、道徳的より見るも、品質に於て決して西歐人に劣るものたらざるを確信するに至れり。

露國の打滅ばすべからざるは勿論なり。日本人はノルマン氏と等しく、斯くの如く明白なる事實はよく之を知れるなり。日本の目的はかの無慈悲尊大にして、且つ侵略的なる露國の政策の滅却し、人種の味方を以て門戸開放政策を辯護せんとするなり。故に露國にして、日本に降りて和を講ずるも、些の國威を傷くることなかるべし。日本は一八九五年の失敗を再びするものにあらず。日本の要求せんとするはその尨大なる敵が肯諾するの名譽を荷ふべき正義にあるのみ。日本は

大陸に領地を獲得するを拒否すべし。これ同國が今日喜んで臺灣を手離すを見ても明かなり。

國の大小は、強弱の標準にあらず。クリミア戦争は其一例なり。加ふるに日本政府には殆ど腐敗と云ふとなし。勤儉なる日本人に取り、一圓は我一磅の價ひあり。故に其強弱に於ても、日露兩國の間には、さしたる差異を見ざるなり。若し列國にして干渉をなさずんば、日本人はノルマン氏の悲觀説を顧みるの必要なし云々。

又かの有名なるチャールズ・スチュルク氏は、北米評論紙上に極東の戦争と題し、一般公衆の知らざる事實に基づき、國際關係を叙したり。其言また聽くに足るものあり。吾人は之に依りて、日露戦争が啓發し來たれる時運の推移を知ることを得べし。彼は現下の戦争は、獨逸の仲裁を見ずしては、終結を告ぐることを能はざるべしとの説、及び獨逸の仲裁は露獨佛三國の同盟を誘起し、英國の損害を招くべしとの説に關して、英米兩國將來の關係を論じ、英國が米國の友情に信頼するの誤謬なるを説き、次で曰く。

露佛獨三國同盟は、日清戰役後克く日本を滿洲より驅逐したり。佛國有力者の言に依れば、爾後獨逸は二回即ち、フーシヨグ事件の際及び南阿戰爭の際、排英政策の爲め三國締盟の事を佛國に申込みたれども、佛國は之を拒めり。尤も今回は兩州遼附を申出で、其爲め佛國の誘致せらるゝなきを保せずさへ言傳ふる者あり。現下佛國に於ける排英思想は、俄然として滅却したるを以て、前述三國同盟成立の危惧は減少せり。然れども、若し獨逸にして日本に宣戰せば、英國は日本との條約に依り獨逸に對して宣戰せざるを得ず。故に佛國も亦日英兩國に對して宣戰せざるを得ざるべし。事茲に至らば、日本は東京を攻撃し、英國艦隊は獨佛兩國と歐洲に於て戰闘することならん。若しそれ、米國に至つては清國の門戶開放に關し、英國と同一なる利害關係を有するものなり。

次に同氏の日本軍を評する言に曰く、獨逸將校さへ日本軍の有力なるを認めたり。天津攻撃の際、日本軍は慘烈なる砲火を冒して、猛然前進したれども、他國の軍隊は逡巡し、英米兩國の陸戰隊は暫し躊躇の後前進せり。而して他國兵の之に續きたる者なし。

又天津に於て、清國砲兵一橋上に向け霰彈を雨注するに當り、他國軍は該橋を渡り露軍を援助すること能はざりしが、日本軍は彈藥滿載の騾車を引き來り、而して騾車の橋上に到るや、騾馬は概ね砲彈に斃れたるも、日本兵は騾に代つて車を挽き、遂に渡橋運送を了したり。

日本兵は單獨にては逃走せしことなし。以て印度のグールカー兵に比すべし。米國兵は稀に英國兵は往々逃走せることあり。日本兵はグールカー兵に似て、之に優る所あり。其雇兵ならざること、即ちこれなり。彼は好戰の士にあらず、愛國の士なり。此點に於て露國兵に似たり。

日本は此精銳なる兵を率ゐて何事をかなさんとするぞ。數年前予は陸軍當局者の意見に反對して、我英國の兵力にて攻撃し得べき唯一の地點は、太平洋沿岸浦鹽港にあることを主張せしことあり。然るに旅順口への鐵道は、實に露國をして制海權を有する國々をして、之を攻撃し易からしむるに至れり。されば日本軍が旅順口附近に於て鐵道を切斷し、海上より到達し易き地點に陣地を取らんとするは、自然の數なりと云ふべし。

尙日本軍に取りて、第二のトルレス・スエドラス(ウエリントン)が佛軍を防ぎたる地と稱すべき地點北韓にあり。茲に守備軍を置けば以て旅順口應援の爲めに來たるべき敵軍の側面に當るを得べし。翻つて露國より之を見れば、旅順口にして日本の手に歸せば、其極東に於ける威望は大々的打撃を蒙らざるを得ざるものなり。

又滿洲鐵嶺にありし露人ベコーノフなるもの、此度の露京新聞に書を送り、我軍の將校に一言すと題して將校の放肆と兵士の冷遇及び無教育を非難し、日軍に對し大に遜色ありとし、忌憚なく所思を明言して將校の注意を促したり、曰く。頃者滿洲に旅行し、日夕沿道の各停車場に到る毎に一見目に觸るゝは多數の兵員を滿載したる列車が南北に馳せ違ひ、此邊一面點々將校兵士の影ならざるはなく、日々唯同一の風色を繰返すに過ぎず、而して最も吾人の心目を引きたるものは他にあらず、將校は祭日の來りしが如く悠々として濶歩し、又は三々五々閑談に餘念なく、又中には列車内に數人一團をなして骨牌を弄び、輪贏を争ひて我能事足れりとなすものゝ如し。之に反し、兵卒は車内に閉ぢ籠められ、連日連夜小

さき棚上に起臥し、無聊遣る所を知らず、時に窓硝子越しに外邊を打眺め、或は石の如く堅くなりて物思はしげに壁を見守り、或は首を垂れて憂鬱に苦しむものあり。又其容貌により年齢を察するに、老壯不定にして中には又新兵多く打交り、文字の明は勿論、軍隊の教育皆無のものも混合し、其雜多なること譬ふるに物なし。これ即ち世界有名な陸軍國たる我露軍の一部なりと云ふを得んや。吾人甚だ怪訝に堪へざるものあり。列車の進行中は、將校共打集りて取止めもなき四方山の雜談を喋々し、勇壯活潑の物語は絶えて聞くことなく、多くは婦人に關する淫猥の事のみを得意氣に放談し、或は世間の出來事に移り、或は戦争のあらゆる細狀を問答し、新聞を高讀し、小説を繰返し、中には往々長官の處置命令に就きて、憚る所なく縦横の批評をなす者あり。甚だしきは只管部下の無教育を歎息し、事に接し折に觸れ、無暗矢鏢に之を叱責し去れり。然も此輸兵列車が、歐露より滿洲に至るまで四十日間の長日に亘るも、其間一回も列車内より將校の車室より出で、他の列車内にある部下の兵卒と舊知を温むることなし。況して途中の停車は、場所により他の瀛車待合せの爲め、一時間乃至二時間の暇あるも、兵卒は依然車

内に蟄居せしめ置き、一步も散歩の自由を與ふることなし。曾て車外に出して、之に困難且つ複雑なる軍事教育を授くることなきは勿論、差向き列車防禦法又は鐵道線路の守備に就きて之を教ふるも、裨益する所少なからざるべきも、之を放擲して顧みる所なきなり。今や露國は至大の困難に瀕するを以て、一同は邦家の干城として軍に極東に越くものなるを諭し、放肆逸樂を戒め、士氣を鼓舞し、義勇公に奉ずるの道を教ふべき筈なるも、是等將校としての本分は、一度も之を踐行せしことを認めたることなし。

抑も戦争なるものは、國と國との争ひにして、勝敗を決すべき機關は軍隊なり。故に國は兵力を恃んで、其主義を固守せんと欲するものなり。國は相對して主義に強きも、其軍隊は弱きもの之なとせす。國家としては何處迄も文明開化にして、其軍隊は欲するが儘に之を擴張することを得るも、軍隊其物は依然として野蠻の風習を脱せず、唯掠奪と放逸とをこれ事とすることなしとせす。

我露國人は、千載の下今日に至るまで、體軀長大宇内の巨人とも稱すべく、其居住する面積は全世界の約七分の一を占め、従つて其双肩に擔ふ所の責務も中々に

重大なるものあり。而して我國の貧弱なりし時代は僅に一時的にして、他は常に雄を四隣に振ひ、其實力は眞に宏大無邊とも云ふべし。斯かる青史を有するの國民は、之が生地との關係極めて深く、國家は恰も泰山の安きにあるものなり。若し之を破壊せんと欲せば、土壤を一々運び去つて泰山を一層づゝ剥ぎ取らざるべからず。千年にして成りたる國家は、亦千年ならずして之を毀つ能はざるなり。此故に我國土は、表面稀に敵の砲彈を受けたることあるも、其土中は未だ此災ひを知らざるものなり。否、今日まで未だ敵彈の臭味を嘗めざるものにして、之を喰ふれば地上の表面を鋤き去るも、其地中には依然水源滾々として湧出し、常に我生民の福祉を存するが如きものなり。我露西亞の實力は常に軍隊に依つて發揮せられ、威力赫々たるものあり。我軍隊は猶一の巨人の加し、一臂を擧げてなすべき場合にも、容易に其巨臂を動かさずして、單に指先のみを以てあしらふが故に、戦争の初めに敗を取ると珍しとせす。然れども、奈那翁と大戦の當時、莫斯科以北への退却、セバストポールの陥落、ブレヅナの死守の如きは、能くわが軍隊の眞價を發揚したるものにて、結局我露軍の不撓不屈一難を経る毎に勇氣更に一倍し來

り、苟くも初志を達せざれば止まざるの氣概を表彰して餘りあり。故に困難の起るに際しては、殊に國家の安危に關する大戦に於ては、我露國民及び軍隊は特に其勢力を滅殺せざるのみならず、却つて大に敵愾心を發揮し、直に起つて奉公の職に赴く者なり。

斯かる次第なるを以て、わが軍隊は能く我國民の稟性を發揮し、刻下の日露の大戦に於ては、我國家は泰然自若、聊かも動搖するを要せず。如何に戦局の擴張せらるゝに至るも、吾人は飽くまでも其本分を竭くすものとして、吾人の聊かも疑はざる所なり。それ然りと雖、諺に曰く、神に依頼せよ。然も己れを慎めよと。我軍隊は今日精良無比と誇稱するも、尙最も深く考慮せざるべからざる事あり。即ち日本軍は我に敵ふるに、刻下の戦争は決して兒童の遊戯にあらざるを以てせり。而して露軍は既に日本人及び全世界に向け、自家の弱點を曝露し了せり。露軍の任務は、決して日軍に對し僅に抵抗し、大に防禦力を盡すにあるにあらずして、寧ろ進んで日軍に痛撃を與へ、彼を殲滅して又起つこと能はざらしむるにありとす。事茲に至り、初めて我軍隊は我民衆幾億萬の希望に副ふものにして、又我皇帝より

本年二月十七日極東大守に與へられたる勅諭、即ち太平洋岸に於ける露西亞帝國の優勝なる地位を確保すべしとの聖意に報ひ奉る所以の者とす。

顧みて日本の陸軍を見るに、かの三十三年北清の變に於て其眞價を顯はし、當時榮譽の二字の外は如何なる批評も聞く所なかりき。誠に世界有數なる完全の軍隊なりと稱すべし。而して其軍隊を組織する者は侏儒とも謂ふべき小人にして殆ど風にも堪へ難き矮軀を以てするも、然も各兵士の訓練はあらゆる動作に精熟し、各、その本職を領得し、好んで其責任を盡くさんことを熱望し、單に所屬長官の命令を嚴守するのみならず、獨斷專行すべき場合には、如何にせば能く長官の希望に適すべきかを知悉し、日夜己れの技能を發揮するの手段を考慮せり。斯くの如きは、誠に天晴れなる心懸にして、神妙とも殊勝とも、將、何とも言はん方なく、實に百練の甲兵と稱すべきなり。

偕ても我軍はこの精銳無比なる百練の甲兵と戦場に相對峙す。何事ぞ、一樣に饅頭帽子を打列べ、又は親譲りの智識に伴はざる腕力のみを取集めたりとて、又如何に盡力すればとて、到底彼に向つて勝算あるべき筈なし。我軍は須らく、靈智、學

藝應用の材幹精神の堅實及び道德の牢固に伴つて兵器彈藥等の整備を以てし、必要の時適當の方法に依り、如上の本能を發現せざるべからず。平時に於て十分に之を教練し、戦時に於て即ち之を實驗應用すべきは、亦吾人の喋々を待たざる所なり。

聞く所に依れば、日本即ち亞細亞の海軍に於て、其戦時の大局に當らんが爲め、平素如何なる場合に於ても拮据精勵、苟くも怠慢に流るることなく、上は司令長官より下は一兵卒に至るまで、時々刻々非常の熱心を以て練習に従事し、如何にもして奉公の誠を致さんとの事に思ひ焦せれりと云ふ、さもあるべき筈なり。また聞く處に據れば、海軍の行動は之を複雑なる陸軍に比すれば、頗る容易の點多しと云へり。如何にも軍艦は平時も戦時も同一にして、機關兵器器具員より帳簿の類に至るも、其組織を改むるにあらず。はた實戦の射撃は、標的とする所のもの、人爲のものにあらずして、進退常なき敵の艦船に向つて發するもの、而も戦時は多くは常に水面にして平素演習の時と異ならず。交戦の際は互に遠く相隔て、砲彈を献酬し、陸戦の如く突撃接戦するの場合は、眞に稀有とも謂ふべし。故に軍艦の

武装は完全にして、指揮官其人を得、乗員亦精練のものなりとせば、是到底近づくべからざるの堅城鐵壁と言ふべきものにして、交戦の最中と雖、艦内は無事安泰甚だしく平素と異なる所あらざるべし。

陸軍にあつては大に之と趣を異にし、時と場所とに依り、常に情勢の變轉すると猶人の顔容事物の形狀の相異なるが如きものあり。されば陸戦は此限りなき變狀に對し、一々適當の行動を執り、作戦の妙を盡くさざるべからず。各部隊には或は年少にして教育不十分の者あり。或は豫備役にありし者にして、既に科程を忘却せる者あり。是等は悉く大に教練を加へざれば、戦闘の用を辨せず。又各部隊には、未だ試射を行はざる新銃及び軍役に馴れざる馬匹も少からず。之に加ふるに、實戦にあつては、日夕生活と其状態を異にし、睡眠の不足、食事の不十分、寒暄燥濕等の爲め、疾病者續出し、敵彈に斃るるよりも、寧ろ罹病の爲め、戦闘力を減殺するの例多しとす。而して實戦にあつては、往々にして殆ど人力のあらん限りを盡くすも、尙且つ及ばざらんとすることあるものにして、斯かる重大の場合に臨みては何處までも精神の冷靜と鞏固とを肝要とし、非常の精力を奮ひて能く部下を

統率し部下に於ても亦均しく能く軍事上の學術を領得し、將卒心を併せて鬱勃たる敵愾心を振ふにあらざれば、敵軍に強烈なる對抗を試み、或は敵中に奮闘し、從容として死地に就き、赫々たる武勳を奏する能はざるなり。かの神に依頼せよ、然も己れを慎めよ、とは眞に千古の箴言なり。人若し其本分に於てなさざるべからざるものあるときは、専心一意全力を擧げて事に當り、苟くも左顧右盼餘念を挟むが如きことあるべからず。亂射したる光線は物を温るむこと難く、集合したる光線は金石も亦之を鎔かすにあらすや。即ち今露西亞帝國威信の消長は、懸かつて將卒の双肩にあり。決して偷安苟且貴重の時日を徒費するの時にあらす。此故に、我將校にして時世を忘れ、或は新聞に目を勞らし、或は常に骨牌を手にし、或は長官の措置を妄評し、以て我能事足れりとなすが如きは、獨り吾人の贊成する能はざる所なるのみならず、寧ろ其放漫に對し大に其反省を求めざる能はざる所なり。我將校たるもの、更に大に奮起して、時々刻々、營々役々、其本職に勉め、以て其士卒を教導し、兼て自ら大に修養する所なくんばあるべからず。然るに我國の將校が終日益もなき新聞の貪讀に耽り、戰鬪には何等の關係もなき茶話雜談に

日を消すが如きは、心なき沙汰と云ふべし。殊に骨牌の遊戯は直に淫酒を誘ひ、心神部疲勞せしめ、勇者は化して懦夫となり、牌戰あるを知つて國家の大戦あるを忘れしむるに至らん。又長官の措置を批評するの弊害は、第一、何人と雖、多くの執業中瑣少の過失なき能はざるに、之を捉へて棒大に惡口するは餘弊を生じ、第二、を下の士卒にして學術未だ修まらず、物事の判斷に不十分なるものあるときは、如何に長官に於て好成绩を收めんと欲するも、遂に本志に違ふことなきにあらす。然るに部下は之を以て一に長官の失策と見做すの餘弊を生じ、第三、長官に對し無限に信服すべきに反し、漫然不滿の端を開き、將卒互に離反の餘弊を生ずるに至る。これ凡て軍紀の嚴肅を害し、協力一致の精神を滅し、全く敵軍に對する最高最大の目的を達すること能はざるに至るべし。詢に寒心すべき事共なり。將校は須らく、其士卒に銃劍の操術より、陣地、地形の選擇、射撃の好惡、進退の愚引等を一々解得せしむると共に、亦大に士卒に親しみ、士卒を愛撫庇護し、又努めて彼等の健康を保ち、敵軍よりの損害を輕うせんとを計らざるべからず。我將校昨今の行爲の如きは、一舉一動總て其本分に背き、奉公の道を講ずる者殆ど之なく、彼等

は全く將校としての價値を自ら悟らざるに近きが如し。日本軍は之に反し、將卒は共に百鍊の精銳にして、勇悍無比、然も忠君愛國の志最も堅く、一度戰場に臨めば唯死あるを知りて生あるを知らず。滿身の勢力は、總てこれ丹心の源より湧出し、硝煙天を覆ひ、彈雨篠を突くの裡、悠揚として事に當るなり。我將卒は此偉なる敵軍に對し、抑も何の面目あるや。願はくは速に猛省奮起、我邦家の大事に當らざるべからず。吾人は聊か茲に忠告する者なりと。

又北米合衆國デトロイト市のパークデビス製藥會社は、英國倫敦其他各處に支店を有せる有名なる會社なるが、同社の各國支店巡回員にニコライと云へるものなり。もと露國人なりしも、感ずる處ありて米國に移住し、米國に歸化したるものなり。同人近頃シマイカを巡視せる際、同地の新聞記者は日露の關係に就き同氏の意見を叩きたるに、氏は次の如く語れりと云ふ。

君の知るが如く、予は今や純然たる米國人となり、米國人の思想感情を有すれども、元より露國の生れなるが故に、日露の戰爭に對しては、對岸の火災視すること能はず。

日露の戰爭は、露國の平和を愛したるに拘らず、既に久しき以前より豫想せられ且つ海牙萬國平和會議は、露國皇帝陛下の主唱に出でし者なるに拘らず、斯くの如き事件の發生したるに依つて見れば、陛下に信を置く能はざるが如きも、願ふに是陛下の意志を沮害する原因の存するか、然らざれば他に確信の勇氣を有するに由るなるべし。露國に於ける大臣大將の多くは露西亞に生れたる者なれども、獨逸其他の民族に屬し、是等の人は皆野心滿々として各自の榮譽を欲するが故に、露國は一方に世界の平和を絶叫しつゝ、他方に支那を壓迫し、西伯利亞鐵道を布設し、新領土を得んとし、之が爲めに兵器彈藥其他莫大なる費用を吝まず。是等の人々の政略は、常に權政者彼自身を富ますが故に、租税の負擔益増加し、露國全體は茲に苦痛の聲を發するに至れり。

加之、一方には内國出版物を制限し、輸入新聞書籍の嚴密なる檢閲を施すに拘らず、國民は旅行教育困窮等の刺戟に依り、己れ自身の状態を悟り、他國民と甚だしく軒輊あることを知り、故に政府と宗教とが人民の從順ならんことを欲して、國民を無知の状態に置かんと努むと雖、既に四方怨嗟の聲に滿ち、虛無黨甚だしく

跋扈し、皇帝の居室の戶外さへ安心することを得ざる有様なりとは誠に悲しむべきことならずや。

然るに日本は之と大に異なり國民の性格と其進歩の點に於て羨望に堪へざるものあり。日本國民は普く世人の注意を喚起し、世の稱讃を博したるは、抑も清國との戦勝に由來するものにして、日本國民の價值が、其進歩性なると、非常なる消化力を有すること、之によりて始めて世に知られたるなり。支那若くは露西亞が泰西文明の輸入を嫌ひしに反し、日本は寧ろ進んで自ら之を採り、地球上のあらゆる部分より新智識を輸入し、信教の自由を許し、基督教の感化を尊び、英、佛、獨、米に人材を送りて、法醫、文、理、工、農、商の諸學校より、陸海軍の技術を修め、斯くして全く改造し去れり。日本開戦の理由は、虚榮を欲するにあらずして、自己に對する正當防禦なり。日本は近時人口の繁殖甚だしきが故に、狹隘なる土地は益々狹隘となり、朝鮮及び清國と協議して適當の處置に出でんとせり。

然るに事偶、露國の意志と牴觸し、久しく外交的戦争を試みたる後遂に干戈を以て相見ゆるに至れり。今や戦争は進行中であり、未だ愷々しく日本の勝利を稱すべ

からず、何となれば數月の猶豫は寧ろ露國を利すればなり。只此際露國の大軍に抵抗し得べき日本の利點は、其位置運送の便と船艦の優勝なるにあり。而して結果は如何なるべきやと云へば、戦勝の光榮は強力のみにてはなく、勇敢なるものと主動的なるものに歸すべきなりと。

聖彼得堡の一紳士なる陸軍高官の一人は、日露戦争終局後滿洲に於て露國の取るべき政略に就き、一片の建白書を露帝に奉れり。即ち、

滿洲は今、貸借の有様にて、露國の所有にあらずとも、東亞に於て未來久しく之を持続するは、政略の得たる者にあらずして、永久争論の種子となるのみならず、經濟上大なる不利益ならん。既に今日迄も、非常の金額を費し、殊に鐵道工事に其大部分を投せり。加ふるに、常に一大艦隊を設備し置かざるべからずと雖、英國或は日本と競争し得べきだけの強盛なる艦隊を置くことは、到底なし能はざる所なり。畢竟海上の技術は、遠く他國に及ぶ能はざるは、ウラルガ一の小河の如きに於ても、外國の火夫を應用するの必要あるを以ても知り得べく、海軍を以て世界に立たんことは、決して望むべからず。露國の強力なるは、陸軍にあり。陸軍

を以て國威を示すことを勉めざるべからざるなり。露國の艦隊の消滅する莫大なる金額と海軍擴張の爲め國民は出資する金額とは之を擧げて陸軍に轉用すべし。これ我社會の狀態を高むる第一の政略なり。蓋し思ふに露の終極の戦勝は疑はざる所なるを以て戦勝後滿洲を支那に返與し鐵道は之を米國に賣却するか或は萬國共同管理の下に置くときは従つて鐵道の負擔を免れ西伯利亞及び歐洲に一大陸軍を有するときは東亞に艦隊を置くの必要なくして大に用途を省き將來の爲めに大利益を得べきは疑ひを容れず云々と論せり。右に對し露帝は未だ建白者に回答をせられ然れども外務大臣ラヂスが伯は此建白に同意を表するが如く他の大臣も此寫を落手せりと云ふ。露國戰時通信員にして露軍に従軍し過日ハバウマス艦上にて戦死したる畫伯ウレンスチヤン氏は開戦後露都新聞ウラヂスに投寄して極東に於ける日露關係に關する意見を吐露せり。而して平和主義の鼓吹者たる氏は現今の日

本人を以て好戦の念頗る熾盛なりとなり邦土擴張は日本に必要なること露國の政策は其擴張に對し主たる妨物たること及び露國が如何程讓與するも日本の戰意を減すこと能はざるを痛言せり。氏即ち曰く日本は露國の提出せる一條件をも容るゝを欲せず。爲めに吾人と戦端を開くに至れり。予は日本の民情を熟知するが故に日本政府にして若し責任の大なるを悟り依つて以て兵火の災ひを避くべき政治的妥協を容るゝの決心ありとするも其妥協たる永續せざるべきを確信する者なり。日本人は日清戦争に依り武威を顯揚し且つ全文明世界の好意的賞讃を博せしが爲め軍事的名譽を得んとするの念然ゆるが如きものありと。又同氏は日本の植民政策を執るの必要を承認して曰く。且つ韓國に植民せんとするを有體に云へば日本が勢力を亞細亞大陸に及ぼし且つ韓國に植民せんとするを非難すべき理なし。何となれば日本這般の努力は單に自負尊大の念より發するにあらざるを以てなり。實際日本人口は四千萬の多きに達し悉く之を其島嶼に容るゝの餘地なし。蒸々たる蒼生を早晚清韓の地に移植すべきは必然の勢ひな

り。蓋し思ふに、何れの邦國も日本の韓國東部に漸次植民するに反抗せざるべきを以て、早晚日本は平和的に半島に其領土の半分乃至三分の二を征略するを得べかりしなり。

然るに日本は事茲に出でずして、其軍事的成功に心酔し、予は故意に心酔と云ふ小國を以て尙能く全世界の活劇場裡に飛躍せんことに熱中し、驚然として天下に絶叫し、自ら人道擁護者を以て標置し、露國を滿洲より攘斥せんとするの至難事を企つるに至れり。其數度露國を破り、強ひて汚辱的平和を構せしめんと欲し、莫斯科進撃に對して準備せんと欲するが如きは、た露國に償金を拂はしめんと欲するが如きは、取るに足らざる妄想なり。日本人は歐洲人の虚禮的賞讃を真正の賞讃と妄信し、地球上日本の如き人民、日本の如き陸海軍を有する邦國なしと思ふに至れり。

更に同氏は、日本が攻略的行動を執るに至れる責任は、英國にありとして論じて曰く、日本は孤立なりし間は固より理和なりしも、一旦好誦なる英國と結盟するに至

つて、日本の語調は俄に激烈となり、實に世界を動すの概あり。日本人は到る處冷笑して曰く、露兵何をかなさん、露人は軍人とし、清人と擇ぶ所なしと。此言たる英國新聞の反覆唱和する所なり。其結果として、日本人は總て其兵力が露國の上にあることを確信し、熾んに其政府を促して早々開戦せしむるに至れり。ヴレンスチヤン書伯が、以て非常なる日本最負なりと稱したる露國公使ロイゼン男は、露國の戦備不整にして、日本の戦備完全なることを熟知したる士なるが、日本大臣に對し、次の如く述べたりと云ふ。

注意せよ、宜戦難きにあらず、然れども戦争を終了するは、容易ならざること。記せよ、露國を覺醒して起たしむるは難し。然れども一旦厥起するや、露國は敵國を全滅するにあらずんば休止せざるべし。日本人は須臾にして富裕ならざる貯金、及び負債金を消費したる後、平和の民たらん。蓋し大戦争の軍資とし、一億の金員は區々たる些類にして、何事もなす能はざるなり。且つ資金缺乏の爲め、遂には莫斯科進撃の妄想を抛擲せん。然れども予は信ず、日本人は全く此思想を棄つることなく、一たび雌伏し、以て好機會を俟つ

公認の要何となれば日本人は極めて執拗不撓にして復仇の念に富むを以てなりと。其の言はるるは、我々の義勇精神を表現するに過ぎない。又此頃倫敦に於て開かれたる英國海軍協定の會同の席に於て、國防委員クローネ大佐は一場の演説を試みたるが、其中吾人をして日本より學ばしめよ云ふ一段に曰く、

世界中露人は最も勇敢なる兵士水兵なり。彼等は幾度か彼等の義務に忠實なるを示せり。而も露國は災厄を劈頭として戦争を開始し、今や同國の軍略的形勢は甚だ危険なり。然るに日本人は最初より機先を制し、今に之を持続せり。一たび海上の安全を得るや、彼等は續いて陸上にて痛撃を加へたり。此大なる差あるは何の故ぞ、一語にして盡くすを得ん。曰く、**「艦隊是なり。剛勇なる提督マツリマン」**は之を別語となして**「智識的機装」**と云へり。予は之を**「艦隊」と**云ふ。日本に於ける最良の艦隊は、此戦争に對し海陸軍を準備するが爲めに使用せられたり。艦隊は勝るたる作戰計畫を策するに使用せられ、又些細なる點も之が爲めに看破せられざるものなし。艦隊は海陸軍兵を指揮する上に於て使用せられたり。而して海

陸兵の艦隊は、又彼等の上に下されたる大命に呼應しぬ。

世界中、其事情の我國に似たるもの日本の如きはあらず。苟くも同國の歴史を讀むものは、其不思議なるまで我國に似たるもの多きを見ん。即ち日本が過去に於て示したる海戦に對する異常の適合は、我國の如く幾世紀の海軍訓練より來りたるものにして、日本の將來の進歩も、亦我國の如く係つて海上にあり。故に吾人は目下進行中なる戦争の教訓を十分に學ばざるべからざる理由確かなり。何となれば日本が今日なむつとある所のものは、明日吾人がなす所のものなるや、知るべからず。吾人は日本の執事たる方法に働ふと否に依りて、成功若しくは失敗すべし。我が同盟國の偉大なる兵は、同身一體となりて動きつべし。兵士は各、それ自身の役目を務めねばならず。而も彼等の間には十分なる相互的依頼あり。殊に注目すべきは海陸軍が共に攻勢的戦争の爲めに編制せられ、且つ準備せられたるにあり。東郷中將は巧みに其役目を遂行したり。而して旅順口に於ける露國艦隊の威力滅殺せらるるは、直に其瞬間を以て陸軍は既に痛撃を加ふるの準備を了り、其結果は殆ど小説的なり。かのクローネ大佐が稱して「海軍の恐るべき武器」

となすものは、最近數週間の出来事に於て最も善く發揮せられたり。嘗て戰爭の経過は全然陸軍の力に依らん。而して吾人は我同盟國の陸軍力に就き失望するが如き事あるべしと思惟せず。

若し吾人にして十分有力なる海軍を有する以上は、陸軍力をも十分に養はざるべからず。然らば之を世界の何れの地に於ても使用することを得ん。日本は既に三十萬の兵を動員し、尙三十萬を動員するの用意あり。而して彼等の背後には我本國の人口よりも多數なる強健男子あり。彼等は明日船に乗せらるるも、唯無限の喜びを感せんのみ。諸君これ眞箇の愛國心なり。吾人は日本の陸軍と英國の陸軍と比較せざるべし。雖陸軍を攻撃的運動に對して使用するの編制をなすは恰も日本の如くならざるべからず。

又ベルリナーネル・ロカールアン・ツァイゲル記者は、此頃メッセル少將を伯林附近なるグロースリッタルフルドの邸に訪問して、日本軍に對する將軍の意見を叩きたる問答なりとして、同紙に掲載せる所左の如し。

記者問 將軍は何時頃日本將校の教育に従事したるや。

將軍答 一八八五年當時予は獨逸國參謀本部附少佐にして、最初は二ケ年間に日本に雇聘せらるるの許可を得、漸次雇ひ繼ぎとなりて、遂に同八八年に至る迄かの國に留まり、軍隊の編制を完成せしめたり。

記者問 將軍は其當時日本軍を如何に觀察せられしや。

將軍答 當時日本軍隊の編制は決して戰爭に適せず、一言以て之を蔽へば、駄馬も容易に動かす能はざる状態なりき。當時は佛國人を教師に採用し居たるも、其教ふる所は學理一方にして師團命令の何物たるをさへ解せざりき。是予が今より十九年前に新に編制に着手したる際に於ける日本軍の状況なり。

記者問 日本國は一般の兵役義務を有するや。

將軍答 然り恰も獨逸の兵制の如し。之を採用するに就きても、予は幾分の力を與へたり。

記者問 日本の兵力は如何。

將軍答 常備軍は約二十五萬乃至三十萬、其他に後備兵十萬あり。故に優に四十萬の兵を有す。露國と遼東洋に於ては給養に困難なるが故に、此數に超過する

將軍答 常備軍は約二十五萬乃至三十萬、其他に後備兵十萬あり。故に優に四十萬の兵を有す。露國と遼東洋に於ては給養に困難なるが故に、此數に超過する

の兵力を有する能はず、貴紙は此頃日本國は十萬の兵を戰場に送りたる旨を報じたが、或は事實ならん。何となれば予は尙十五萬の兵が故郷にありて他の任務を待ちつゝありと信ずればなり。

記者問 日本軍は旅順口を陥落せしめ得るならんか。

將軍答 日本軍は好時機來らば、要塞に襲撃を加へて、破竹の勢ひを以て之を遂行する事は予の疑はざる所なり。金州城にありても既に其例を示せるにあらすや。此目的に向つて日本は尙五千人の兵を損失するは成功を確實なる者と豫定じて意をせざる所なるべし。普く世界にも知らるゝ如く、由來日本人民は勇敢にして青年輩は殊に出征を喜び、出發の際涙を流す兩親あれば他人は之を賤しむの風あり。其譯は一滴の涙の爲めに、出征者が國家に盡くすべき忠節心を挫折せしむと云ふにあり。斯くの如き強敵は、露國が世界中他に見出すべからざる所なり。

記者問 戦闘の終局は如何。

將軍答 如何にするも目下の状況變轉すべしと思はれず。軍隊の死を決す

る勇氣は依然たり。兵備に關しては些この缺點を見ず。軍隊の編制は最早改正すべき餘地なき迄に完備し、諸種の報告に依るに、日本の砲兵は世界に卓越し、用兵に長じ、頭腦明晰なる將校の數に於ては、遙に露國の及ばざる所、予は尙去年迄は日本の將校六名を教育し居たるが、彼等の博識なるには屢、喫驚したり。而して彼等將校の戰術教師たりじものは、曾て予の生徒なりじものにして、第一軍司令官黒木大將の如きも、予の統監の下に參謀旅行をなしたる事あり。總軍の指揮官たる山縣大將も、常に予に對して好意を表したる人なり云々。以上個人の下せる一般的觀察は、甲是乙非、讀過して一種の趣味を感ぜざる能はず。今は斯くて、列強新聞紙の觀察論評を概観せん。先づ英國の諸新聞は如何なる論評を試みしかを見るべし。五月十日スペクテタタの社論に曰く、露國の日本の勝利に對する大陸の驚愕は、吾人の同業者中の或ものが想像するが如く、爾かく不思議なるにあらずと吾人は思惟す。蓋し大陸に於ける操觚者は、僅に東西近代の歴史を知れるのみにて、然も固より其知得せるを、不十分なるを以て、歐羅巴人の亞細亞に於ける近頃の事歴は、自ら亞細亞人は歐羅巴人に比すれ

ば大業に關して無能力なりとの感想を與へたり。即ち英國は未だ嘗て印度に於て撃退せられたることなく、かの自國の訓練したる軍隊自身に取り、最も好都合なりし境遇を利用して、叛亂を企てたる時に於てすら尙且つ敗績を見ざりき。露國はクルルジャーに於て、僅に一回の敗戦を採りし外、未だ嘗て北方亞細亞に於て退却したることなく、其同國が時々被りたる頑強なる抵抗は、歐羅巴歴史家の注視を脱したり。獨逸政府は一種外交的の輕打を以て清國の抵抗を破り、一彈を發せずして山東省に占據するに至れり。一八八三年黑旗軍に對する佛國の敗北は既に忘却せられ、印度支那はさしたる戦闘を見ずして獲得せられたるが如く誤解せり。拳匪の亂は、一回の大戦闘を見ずして戡定せられ、さして多からざる聯合軍は、尊大なる滿洲朝廷を蒙塵せしめ、包圍攻撃若くは歐羅巴に於て大抵抗と思惟せらるべき衝突を見ずして北京を占領したり。故に吾人のごとくグールカー(英領印度兵)混血アラビヤ人が戦場に於て實際如何なる動作をなすやを知らざる大陸人が、亞細亞人を以て既に軟化し、且つ歐羅巴の軍隊と戦ふの能力なきものなりと想像するは無理ならぬ事なり。尤も大陸人と雖、土耳其人が人類中最も

勇敢なるものゝ内に伍せること、マレイ人が最も勇敢なるが故に、海賊中最も恐るべきものなること、普通の英吉利兵が矮兵なるグールカーを以て、少なくとも彼等と同等なりと認むること、米國軍隊がフイリップピンの土賊と戦ふにあたり、必らずしも勝利を期せざる事等熟知せりと雖、然も海月の如き亞細亞の諸帝國は、殆ど過去一世紀に亘りて、大戦争に對する能力を示すことなかりしなり。故に大陸の批評家が、日本をして一見して以て滔々たる群弱の中に伍せしめたるは、非常なる失策とは云ふべからず。故に彼等の驚愕や無理ならぬ事にして、殊に日本人が歴史上殆ど其例を見ざる勇氣を示すを見るに及び、益、其驚愕の度を高めたるは尤も千萬なり。死を輕んずると彼等の如きは、未だ嘗て聞かざるところ、加ふるに勇往邁進の膽氣を以てす。随つて其突撃猛烈なる世界の最良の軍隊を除くの外之を支ふる能はず。かの旅順口を閉塞せんが爲め汽船を沈没せんとするや、彈丸若くは溺水の何れかに依つて、其命を失ふこと殆ど疑ひなきに拘らず、二千の決死隊が身を挺して募りに應じたる事實は、同國の歴史のあらん限り、傳唱し以て永へに其名譽朽ちざるべし。若し軍隊にして、斯くの如く絶えざる望みを維

ぐの人を以て組織せられんか其軍隊は何事をもなし得ざるなし。英人は他國人に比し日本人の真相を知悉すること多かりしと雖然も斯くの如く思慮ある大勇氣は嘗て期待せざりしところなり。況んや私に露國の力を恐れ居たる大陸人に於て未だ嘗て先例を見ざる現象に對して眩惑せるは固より其處なり。然れども日本人が近來陸海兩方面に發揮せし所のものは嘗にその勇氣に止まらずして尙別に二箇の注意すべきものあり。是亦盛に發揮せられて日本人を全然他の亞細亞人中より區別す。即ち其一は彼等の水兵として強烈ならしむる刺激物はなり。刺激物とは何ぞや。かれ日本人は歐洲に於てすら稀に見る大愛國者にして吾人の知るところに依ればタイタス帝に抗してエルサレムを守りたるものを除き亞細亞に於て其儔を見ず。曾て奇警なる觀察者公言して曰く亞細亞に愛國心なるものなしと。此語は今年まで亞細亞全體に押して一見差支なきが如く見えたり。勿論亞細亞人は屢或は信條の爲め或は主權者の爲め或は人望ある領主の爲め花々しき戦ひをなしたるもありと雖廣義に云ふ彼等の國土を愛するの事實に至りては明確なる證據を發見すること難し。支那人が中華を以て

誇るは事實なり。アラビヤ人が蘇格蘭人と同様の感情を以て沙漠とオースチスのある邊境に歸來するは事實なり。記者は嘗て有力なる印度人が尤も千萬なる自慢心を以て故國の豊饒なるを説き古代の都市古代の文明を有するを語るを聞きたることあり然も此等の人種は故國の爲めに死し若くは故國の名譽故國の美を以て他國に優るものありと感ずるものなきにあらざるなり。戰略が閉塞を要求したる所の者を實行せんが爲め汽船沈没の任務を申出でたる人々は英獨佛の決死隊と等しく直に故國の爲めに死せんことを申出でたるものなり。此感情の躍如たるは必然の結果として日本人に對し彼等をして人種中最も有力なるものたらしむるの決心を與ふ。吾人は彼等と呼ぶに小國民を以てす。然も彼等の人口は佛蘭西に比し幾百萬の多數にして苟くも其威嚴權利に係はるものあらば彼等は一體の如く感じ且つ動くなり。是彼等にして一度動けば其強きこと比を見ざる所以なり。

第二のものは彼等の先見力はなり。彼等は得意時代の獨逸參謀本部の如く精密なる科學的先見を以て凡てのものを準備す。彼等は日清戰役の勝利品が不當

に掠奪せられたるを恢復せんが爲め、大準備をなすこと十年に及べり。彼等は海上に大兵を輸送し、且つ大損害を被らすして之を陸揚するの秘訣を學びたり。故に彼等が上陸を了りて進軍するや、彼等の糧食、彈藥、地圖の間然するところなき、恰も彼等の軍隊は測量を専門とせる土工兵を以て組織せられたるが如し。此機敏を以て、かの普魯西に開戦を宣したる際の奈破翁三世と比較し、大統領クルーゲルの最後通牒を受けたる際の吾人と比較し、若くは第一の砲彈が旅順口に落下したる際の大陸軍國露西亞と比較せよ。吾人は有體に言ふ、これ勝戦に際するも、尙且つ輜重隊を有せず、豫備武器を具へず、死傷者を委棄して進軍する凡ての亞細亞人種に比較して、劃然日本人を區別すべきところの最近の歴史的事實なりと。

右の事實は遂に吾人を驅つて或一種の考へを抱かしむ。これ吾人の今日言はんとするところなり。曰く吾人が日本人を呼ぶに亞細亞人を以てするは言葉を以て事實を隠蔽しつゝあるにあらざるやと。勿論彼等は本源に於て亞細亞人たるや疑ひなしと雖、然も幾世紀に亘りて島内に孤立し、其間彼等自身の文明を發達

し、且つ之が感化の下に生長し來り、一般島國人の如く、其觸着したるものより何ものかを吸入したり。彼等は歐羅巴と等しく永く封建を有し、封建制度は、少くとも勇氣並に首長に服従するの慣習を教へたり。彼等は自身の技術、彼等自身の口碑により、他の亞細亞人とは全然其趣きを異にせる政治思想を發達せしめたり。今に至るも、彼等が實際果して如何なるものなるやは、多くの點に於て歐洲人に取り秘密に屬す。然りと雖、吾人が諸大陸を呼ぶに用ふる廣濶なる一區分は、十分日本人に妥當ならず。換言すれば、彼等は多年孤立したるが爲めに、全く別箇の人種となり、其長短は共に彼等自身の創造に基づくものにして、歐洲人ならざると同時に、又亞細亞人にもあらずと云ふことを得べしと。

同紙は又曰く、鴨綠江役以前に於ては、白人は深く日本人の能力及び其海軍人の忠勇を感じたるに拘らず、日本陸軍は相當の歐洲軍に拮抗し、若くは之を破るを得べきや否や猶疑惑を懷きたり。由來歐洲人の自負心は、三百年間の歴史之を是認するの觀あり。其自負心は暗々裏に一個の觀念を生じ、之が爲め歐洲人は許多の戦勝を得、且つ剛勇を發揮せり。然るに鴨綠江の役は、全然此迷信を消却せり。此

役日本軍は、歐洲軍を面前に控へて大河を渡り、要害堅固なる丘陵に據れる歐洲軍に向つて行進し、銃劍相戦ふの接戦を以て之を撃退し、日本製の砲門及び彈丸の力を以て敵火を壓倒し、歐洲砲を裝置せる砲臺を略取し、而も驍勇を以て自ら誇る歐洲の砲兵を潰走せしめ、其投降を待たずして激闘中に其數百名を俘虜としたり。是殊に特筆大書すべき事實なり。換言すれば、亞細亞に一國家勃興し、既に歐羅巴艦隊を破りたるのみならず、六萬人を以て一軍團とするもの三個を統率して専ら攻勢を取り、歐洲大戦術家に均しき周到なる先見、伎倆、及び勇氣を以てするを得べきことを證明せり。露人が日本軍の員數露軍に二倍したりと辯疏するも、そは取るに足らざる嘆語なり。何となれば露軍は堡砦に據りたるを以て、近世の先例に依れば攻撃軍を撃退するを得ること當然なればなり。又日本砲兵隊大に優等なりしと云ふも、猶更取るに足らざる辭柄なり。何となれば此言たる、日本砲兵隊が歐洲獨特の技と信せられし精巧絶妙なる理學的智能を有すること、を反證するを以てなり。又日本將官は非凡の技能を有すと云ふと雖、これ最も取るに足らざるの言なり。それ然り、日本人は戦闘者として他の歐洲國の軍隊に對

して遜色なしと稱せらるる露軍に對し、假令卓越せざるまでも、少なくとも伯仲するものなることを事實上に證明したり。黒木將軍は露軍が強固なる抵抗をなしたりと報告し居れり。而して露軍の強固なる抵抗てふ文字の意義如何は、夙に戦史家が數多戦役の記録に依りて明知せらるる所とす。英軍にまれ獨軍にまれ佛軍にまれ、露軍の向ふに當りて悸動せざる者は稀なり。而して日本軍の露軍を視る此くの如きものあり。

以上の事實は二個の結果を生ずるの必然なるを見る。一は明瞭に不良にして、他は其波及する所廣大にして、其良否如何は兎に角疑問たらずんばあらず。今や戦争は長期に亘らざるを得ざる事となれり。蓋し露國は全く困憊するにあらずんば、媾和を容諾せざるべく、外は他邦の干涉も亦之を拒絶し、内は變亂の虞れあるも、敢て抗戦の行爲を緩弛するものにあらざればなり。其海戦に敗れたるは大苦惱にして、國辱とも稱すべきものなれども、之を陸戦の敗北に比すれば素より輕重同日の論にあらず。抑も露國は海國にあらず、同國人の多數は海洋又は艦隊を目賭したるとなし。海上權なる語は、普通英國人すら了解に苦しむ所にして、露國

人の多數は其何たるを知らざるを以て、彼等に對しては海上の戦敗は變災又は遺算に因り、若くは敵艦より味方の未だ知らざる爆發物を、突然擲られたるに因ると説服するは敢て難きにあらず。然るに陸上の戦敗に至りては、全露國人を周章驚愕せしむるものなり。露都當局者が、鴨綠江役の真相を隠蔽彌縫せんと努むるや、無理ならずと云ふべし。此敗報露國に達するときは、舉國一齊に名譽の復仇をなすべしとの聲を發するに至らん。露國人は陸上の戦敗を以て、皇帝及び自己の汚辱なりと思惟す。故に露國は何等の媾和條件を容るゝに先だち、十二分の兵力並に十二分の耐忍力を出すべし。是に於て乎、戦争は數年に亘らざるを得ず。露國にして前週吾人が論述せる内訌を避くることを得ば、其出兵力は無限なり。又黄金萬能の今日、露國は新艦隊を組織すること能はずとも限らず。露國の財政は無限にあらざるも、人民は勞銀及び食料に對し、甘んじて不換紙幣を受領せん。されば吾人は斷言す。戦争にして内亂に依り休止せらるゝことなくんば、露國の絶體絶命となるまで之を繼續すべし。若し露國にして窮境に瀕するの曉は、宇内形勢の變動は果して如何なるべきか。日本は一新帝國として優勝なる地理的位置

に勃興し、能く太平洋北部を制御し、海戦に敗を取らざる限り、何時にても亞細亞洲中何れの沿岸にも六軍團の精銳を派遣することを得。此六軍團の精銳には同數なる歐洲軍以外の兵力を以て之に當るは、専門家の認めて愚の極となす所なるべし。事茲に至らば亞細亞大陸に緊切なる利益を有し、若くは大領土を有する各白人國の地位は爲めに一變し、露骨に云へば稍不安となり、米國亦之に洩れず、其ヒロピン植民地を守備すること前日より難きを見るに至らん。若し又強國にして印度支那を領する佛國が、自然海南を獲得せんと欲することあらば、日本は海南は支那の屬地たらざるべからずと聲明することあらん。又日本は大統領グランドが、かの奈破翁三世に諷したるが如く、獨逸皇帝に向ひ、或好辭柄に依り、獨逸議會の否決と云ふが如き、膠州灣を放棄すべきことを諷することなきを保せず。英國と雖新興國の影響を免るゝ能はず。何となれば英國は尙海上に雄たるも、永遠に印度洋又は支那海に大艦隊を置くを欲せざるを以てなり。日本にして今日豫期せらるゝ如く、永く英米兩國と友誼的連鎖を保たんとするも、上述の事態は宇内形勢に於ける二大變動たり。記せよ、吾人は日本國政策の深奥なる動機を

知了すること妙きことを吾人の確知する所は日本人は才徳あるに拘らず覇氣満ちたる國民なり。日本は人口大に増殖し國土の狹隘なるを感ずるものなり。日本人は臺灣、韓國に於て且つ清國に於てすら果斷なる統治の才幹あるを實證したり。而して吾人は未だ以上の外日本人に就きて多くを窺ひ得ざるなり。鴨綠江の役に於ける日本軍の戦勝は歐洲人が皆知覺し來れる第一の結果を今直に現出することなすも兎に角今後容易ならざる諸種の結果を生せんとするもよの如し。今や清國の動搖は日を逐うて較著となれり。故に日本の勝利に望みを屬する同國主戦派が俄然勢力を占めて活動するに至らば吾人が頃日來の忠言は剴切なる忠言として首肯せらるゝに至らん。清國にして鴨綠江役の勝利者たる日本人の指揮若くは制御を受くる所とならば其力侮り難かるべく歐洲の政治家或は米國の政治家も深慮以て此事態を考覈せざるを得ざるに至らん。吾人は日本人の勇氣及び伎倆を賞揚すと雖歐亞兩大陸は利害を一にせざるを知る者なり。それ吾人は鴨綠江の役を以て憂慮の因子と思惟せざらんと欲するも能はざるを奈何せん。

又倫敦デイリー・メールは曰く。日本數次の戦勝は歐洲大陸に青天霹靂の如く傳はれり。多年日本の大國民たるを解せる英國人より見れば歐洲大陸人の驚愕こそ妙からぬ驚愕を與ふるものなり。

英國人民は日本を識る點に於て英國新聞の善く之を報ずるあり。且つ其本能たる旅行の觀察に明かなるあり。即ち英國人は日本を識り大陸は日本を識らず。佛國人露國人は僅に昨日まで日本人を半開矮小の怯夫と見做せしも英國人は此多能なる人民の志を執ること堅く志望の高尙なるを解したり。殊に同盟を相結んで以來日本の陸海軍人は吾人と親密輯睦の干繋を相保ちしを以て之を知ること益深く吾人英國人にして日本人此戦ひに敗れんか寧ろ其意外なるに愕然たらすんばあらず。

今や佛國に於てもクロバトキン大將の任務の極めて重大にして到底如何なる名將もなし得る所にあらざるを漸く承認するに至れり。佛國參謀本部の機關エーコード・パリは曰く。クロバトキン大將は益々猶豫すれば其危険益々重大ならん。其策源地より切斷せらるゝ虞れあるは日本軍にあらずして露軍なりと。此結論は正

確なり、然れども佛國人にして此結論を下すに至れるは、如何ばかりか斷腸の思ひあらん。佛國人は常に露國の不可侵を信じ居たるものなればなり。如何にも佛國人は其同盟國に忠實なり。これ猶英國の其同盟國に忠實なるが如し。然れども露國は滿洲より退却するも、猶一の大國たるを失はず。而して本年二月日本の正當なる要求を排斥するに當りて、其求めし所は取りも直さず日本の獨立を無効となし、即ち日本を大國の列外に逐ふのみならず、自治國としての地位を奪ひ、併せて亞細亞全體を露國の統治下に置かんとするものなり。此事は佛國人たるものも一考して可なり。

倫敦新聞スタンダードの在露キエフ通信員は、五月十日附を以て、前の露國外務省亞細亞局の一局員より、左記の説を得たりとして報ずる所に據れば、歐羅巴は決して亞細亞を開化し能はざるべし。開化の原動力は、亞細亞に屬するもの自身にあらざれば能はず。而して今や其原動力は、旭日の昇るが如く、炳焉爛然世界に表示せられたり。日本の隆々たる盛運は、曾て多數の近視眼的政論家が、吾人をして妄信せしめしが如き、黃禍の發源にあらずして、斯かる風聲鶴唳的恐怖の終止

をなすものなり。第一流の域に入りたる日本の文明開化は、日本をして東亞の指導者たらんとすの野心を抱かしめ、而して此野心は、毫も宗教的偏見、人種的怨恨を挾まざるものにして、かの基督教徒と羅馬教徒との間に有するが如き、相侵すべからざる塲境の存せざるとは、世界の感謝せざるべからざる所なり。實質的物質的精神的勢力に於て、日本はあらゆる亞細亞人民中、最も卓越せる地位を占むるに至るべきは、明確に豫期せらるる所なり。否、日本文化の風潮は、西伯利亞、貝加爾州以内の我露國民にも、其勢力を波及するに至らんとすも、強ちあり得べからざる事とは限らざるなり。諸君、乞ふ驚くことを止めよ。吾人自身は、早晚貝加爾州が露國東方の疆界となるに至るべき事を確信す。吾人をして幸ひに、今回の戦役に於て日本が結局人口の上よりして、露國の爲めに壓服さるべきことを揚言するを得せしめよ。斯くして其場合に至らば、果して如何。日本は從來制海權を保持す。而して日本は即時に其艦隊を二倍にし、其陸軍を四倍にするの計策に出づるなるべし。されば結局、日露何れが東亞の牛耳を取るべきや。は單に一回の戦役に依りて決せらるべくもあらず。

而して吾人の見る所を以てすれば、日本の挽回力は我露國に比して非常に超越す。これ即ち吾人が貝加爾州は遂に吾人及び新に東亞に勃興せる大國との間を分つ限界的疆界となるに至るべしと説く所以なりと。

また同新聞の通信員所報の一節に曰く、近世文明の影響は、一國民としての日本人に對し、多大の變化を與へたり。然も彼等の國家的理想、信念、即ち彼等の精神的態度の上には何等の變化なし。驚くべき模倣力を有せる彼等は、西歐の近世文明が淘汰したる所のものを大に模倣して、之を彼等の必要に應せしめ、凡ての西歐諸國より、各其長を採り、優秀なる其判別力を發揮したり。然も日本人の日本人たる神髓的分子に至りては、西歐文明も未だ觸るゝことだに之なきが如し。

斯くて日本海軍は、西歐世界が供給し得べき武裝上の最新發明及び應用を有せる最良の新式軍艦を有し、英國海軍の大經驗に基づける新式の戰術によりて、訓練せられたる乗組員を以て操縦せられ、日本陸軍は日本人一般の服裝が、西歐諸國と全然相違せるに拘らず、歐洲の陸軍と同様なる制服を着し、最良の歐羅巴軍隊すら、尙且つ之を讚稱するに足るべき方法に依りて、徵集、編制、動員せられ、歐羅

巴列強中より粹を選べる制度に依りて訓練せられ、最新の施條銃、野砲、重砲を以て準備せらるゝを見る。實に西歐は凡て此等のものを日本に與へぬ。然も其軍事的義務、役務の觀念を與へざりき。蓋し日本兵士は天皇陛下の爲めに戦ふものにして、其天皇陛下とは彼の神、統治者、郷國并に彼が凡ての敬愛の觀念の集中する處なり。史を遡りて日本の古代記を窺ふに、日本天皇陛下は直接神より降下し給ひ、陛下の後繼者は凡て天上よりの代表者なりとあり。最良の教育を受けたる日本人と雖、其家には一室を分つて拜殿となし、祭壇上に兩陛下の御肖像を安置し、奉りて、日夕之が前に跪座して禮拜をなす。天皇陛下は神と民衆との間に立ち給ふ調和者なり。

日本兵士が天皇陛下の爲めに戦ふや、愛國心以上に尙多大の意味を有す。彼は再び歸來すべしとの觀念を抱きて戰場に赴かず。彼は彼と郷國に連結せる凡ての纏縛を斷ち、兵役に徵募せらるゝや、彼は彼の生命を天皇陛下に捧ぐ、これ絶對にして又最終なり。平時に於ては何事も彼の義務に干渉する能はず。戰時に於ては彼の死にして些少にても陛下に對する報恩の一端とならんには、彼は喜び進ん

で死すべしとの異常なる決心を以て出陣す。日本の海陸軍に於ける此兵役観念は、第八回旅順口攻撃に對する東郷中將の四月十八日の報告中にある一節に依り表示せらる。

此連續せる作戰に於て、聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戦果を擧げ得たる者は、一に大元帥陛下の御威徳にして、麾下將卒は終始勇往敢爲其任務を遂行するに忠實なるも、其奏功成果に至つては人力の及ばざる所多し。特に多數の艦艇が、晝夜を問はず敵の機械水雷を浮沈せる洋中を縦横に航行し、然も今日に至る迄一の危害を受けたるとなきが如きは、只天佑と確信するの外なきなりと。

勅語に對する東郷中將の答辭中にも同様の言あり。曰く、

今回旅順口攻撃に於ける聯合艦隊の奏功の如きは、一に陛下の御威徳に依るものにして、臣等人力の及ぶ所にあらず。然るに又優渥なる勅語を賜り、臣等恐惶に堪へず、尙益精勵殘敵を剛滅せんことを期す。

更に山本海軍大臣の送れる祝電も亦同様の感情を表言す。

第八次旅順口攻撃の報告に接し、我計畫最も宜しきに適ひ、施設一々其圖に當り、

顯著なる効果を收められたるは感激に堪へざる所なり、これ實に大元帥陛下の懿徳に依ると雖、亦忠實なる我將校下士卒の其事業を的確に實行して遺憾なきを證して餘りありと信す。

此文辭は偶然にあらず、將又高貴なる位置を有せる人に對する世辭にもあらず、これ實に日本人の天皇陛下に對する精神的態度を明晰に表はすものにして、陛下は普通の統治者以上の更に大なる或ものとして認めらる。これ魔術的駿速を以て日本の海陸軍が歐羅巴式に改められ、且つ少なくとも驚くの外なき優秀の程度まで發達したることを説明するものなり。日本の海陸軍人は其職を行ふに最も眞面目にして、平時は只その爲めに生息し、戦時はその爲めに喜んで死す。

海陸軍人は殆ど農夫なる大階級より徴集せらる。彼等は身體的に良好にして、彼等はまた大に彼等の家庭家族を愛好すと雖、然も一度軍隊よりの命あらば一人として逡巡するものなく、彼等の生命を天皇陛下に捧ぐることは義務にあらずして光榮ある特權なりと認められ、母親は彼等の子供が徴集せられたるを悲しむ代りに、彼等が天皇陛下の爲めに捧ぐべき更に多くの子供を有せざりしを悲

しむ。徴集の兵士は父母の膝下を離れんとするや、彼の親族に對し永久に別れを告ぐ、彼はゆめ再び歸來すべきを思はず、親族亦之を豫期せず、若し彼にして徴兵當時婚約ありとせば、これは形式的に破毀せられ、若し彼にして財産ありとせば、彼が榮譽ある最後に出會したりと報じ來たる場合——普通の死歿にあらず——には如何に之を處分すべきかを言殘すなり。

予は此程出陣中なる三人の子息を有せる某貴族に會ひしが、これより先其三人の子息中、一人は重傷を負ひ、日本に送還中なりとのことなりき。予は之を知れるが故に、右の負傷せる人に早く恢復し、且つ他の二人の兄弟亦恙なく歸來せんことを望むと述べしに、件の老紳士は頗る喫驚の體にて、儼然語をなして曰く、予の子供は凡て彼等の生命を天皇陛下に捧げたり。予は決して再び彼等を見ることなかるべしとて、彼は固く彼の子供が死を求め、以て戦争終るまでには凡て彼等の素願を達すべきを信じ居たり。又曰く、かの負傷兒は未だ彼の義務を果さざるに歸國するの已むを得ざるに立至れり。是、家名を辱かしむるものたり。療養を加へて速に全快せしめ、再び戰場に出で、曩の汚名を滌ぐまでは、公衆に顔を出す

を許さずと。

日本一等戰艦朝日の廣瀬中佐の生涯及び其死は、詳に日本將校の熱誠を語る者なり。中佐は今回の戦争に於て戰死したる將校中、最高の位置を有したる人にして、サムライ即ち英國幾年前の封建時代に於けるナイト・スクワイアに相當す。サムライは絶対に死を輕んじ、勇氣と武藝を以て彼等の唯一の資格となしたり。此サムライの子孫は、又今日、日本海陸軍部内に於ける將校の多數を占むる者なり。廣瀬中佐は日清戦争の時少尉として扶桑艦に乘組み居たりしが、丁提督の威海衝に蟄伏するを知るや、中佐は扶桑艦より派遣せられたる一隊の人と共に、猛烈なる敵の砲火を冒して、防材破壊の任務に當り、首尾克く功を奏せり。此時中佐はさる者の爲めに不思議なる命拾ひをなしたり。さる者、之を杉野といふ。爾來兩者の友情膠漆の如く、骨肉も只ならず、斯くて年を閱すると十年、今茲四月東郷中將は旅順口の閉塞の命を下しぬ。中佐は直に命に應じ、商船を指揮して旅順口に向ふ。杉野亦之に従ふ。敵の砲火激烈を極めたりと雖、中佐は首尾よく其任務を遂行し、今や引揚げんとする時、杉野の姿を見ず。中佐は之を捜して遂に之が爲めに

死を遂げぬ。残るは一片の肉片のみ。斯くの如き光榮ある死は遺族をして容易に之に堪ふることを得せしむるや否や。これ吾人に取りては疑問なり。然れども日本に於ては然らざりき。葬式の日、男女親族の面上一點の悲哀なし。却つて彼等の態度には自慢的喜悅を見たり。弔詞は與へられず、却つて未曾有の熱誠なる祝詞は與へられたり。實に死せる人は華々しく其運命を遂げたるなり。彼が海軍に入るや、彼は既に業に此時を以て死し居たるなり。此觀念は吾人外人に取りては理解すること難く、偶これ語らんには理想を以て現實と誤りたるの批評を受けんのみ。世界中日本人の如く其短所を掩はんと力むる國民なし。若し日本人と語り、而してその言ふ所を信せんには、殆ど國家的缺點なき國なりとの結論に達せざるべからず。此奇怪なる人種は其感情を表現すること稀なり。然れども一度激越なる感情に打たるや、彼等の面容は偽りを語らず、若し羨望の情にして此人類の面上に描かれたるゝありとせば、そは廣瀬中佐の葬式に列し、天皇陛下よりの有難き勅語を拜誦し居たる日本海陸軍將校の面影なり。彼等が廣瀬中佐の死じたるが如く、彼等も亦死するの機會を私に待ちつゝあるは、之を見たる凡ての

ものゝ疑はざる所なり。

又五月二十八日倫敦タイムズの所論に曰く、

日露戦争にして日本が全捷を得る能はざるか、又は露國が容易に屈伏せざる爲め永續するが如きとあらんか、日本は能く數年間其戦争を繼續し得るの實力ありや如何、日本の財源は戦争の爲め間もなく涸渴し、如何なる條件を提出せらるゝも、餘義なく他國より借入るゝ外なきに至るべしとは、歐洲に於て一般に豫想せられたる所なりしも、今日迄の事實は其誤謬なりしこと明かにして、之を事實に依つて證せんには、日本が制海權を有することは、同國に取つて多大の利便を享受せり、近頃二隻の戦艦を失ひたる爲め、其海軍力を減少せしも、尙現時に於ては依然海上權を制せるは、其狀態英國が嘗て佛國と大戰をなしたる當時の様に酷似せり。

日本の現狀は英國に相似たり、依つて佛國の革命戦争當時に於ける、英國の狀態を説き、日本現時の狀態と比較考究する所あらんに、佛國の革命戦争は其初め埃普兩國がルイ十六世を復位せしめんとの希望に依つて發じ、英國は後年に至り

其戦争に加はることとなりたるものにして、開戦の當時に於ては佛國を撃破すること容易なるべしと豫想せしも、事實は全く反對に出で、佛國は和蘭、白耳義瑞、西、伊、太利に捷ち、普魯西、西班牙をして餘義なく、講和の締結をなさしむるに至り、再三塊地利を征して遂に和を講せしめたる結果、終に英國をして單獨優勢なる佛國と交戦せしむることとなり、其戦争は前後二十二ヶ年の久しきに亘り、其間英國は開戦前僅に二億六千萬磅なりし國債をして、八億九千五百萬磅の巨額に達せしめ、即ち六億三千万磅の増加をなせり。戦争の當初に於ては、何人も英國が戦争を繼續して斯かる巨額の國債を募集し得べしと思考せしものなし。殊に英國は佛國との開戦十一ヶ年、米國の植民地を回復せんとして敗られ、一七九三年に於ける英國の勢望は到底現今の比にあらずして、内外共に其實力を疑慮せり。開戦當時英國の人口は確實なる統計なきを以て之を知る能はざるも、一八一一年の人口千九百萬人なりし事實より推算するに、一七九三年頃の人口は約千五百萬人内外なるべし。然るに日本の人口は四千五百萬人乃至五千萬人にして、當時の英國の人口に比し、約三倍の多數を有せり。此事たる最も重要にして、英國

は奈破翁との戦争に於て、僅少なる人口を以て能く其之が海軍を支持したるの事實より推究すれば、日本の如き多き人口を有するもの、一度意を決せば幾何の海陸軍兵を派出し得べきか。今普通の推算により人口の五分の一を戦闘に加入し得べき者とせば、日本は現時九百萬乃至千萬の戦闘員を有する筈なるも、實際訓練を受けたる戦闘員は五十萬人内外なり。然るに露國は日本に比し二倍半の人口を有するが故に、戦場に於ても日本軍の二人に對して五人を派出し得べき勘定なれども、不幸にも露國は大軍を滿洲に派出するの困難なる事情ある爲め、如何に本國に多數の軍隊を有するも、何等の効果なし。而して一方日本は之と反對に既に制海權を獲得し、且つ戦場に近接せるを以て容易に大軍を派出することを得べし。併し急に大軍を派出するは、其財源を費消すること大なれば、日本は直に之をなさざるべし。

日本の實力は果して如何。日本が戦争の爲め其財源を涸渇するに至るべしと思惟する人々は、最近の事實に留意するを要す。例へばブーアは能く二ヶ年半英國と戦争を繼續せしが、其戦闘の前既に四ヶ年間米聯合國の南部諸國と戦ひたる

の事實あり。此くの如く奈破翁戦争時代の英國と云ひ、ブーア戦争と云ひ、能く其戦ひを久しきに持續せり。今日日本の實力が戦争の爲め速に疲弊涸渇するに至るべきや否やにつき、少しく所思を述べんに、日本の經常歳入は一八九五、六年に於て九百五十萬磅なりしが、一九〇三、四年に於ても二千三百萬磅を超過すること僅少なりき。而して其期間は露國に對して準備怠りなかりしにも拘らず、尙二千三百萬磅を僅に超過せしに過ぎず。又開戦前日本の國債總高は五千六百萬磅にして、其大部分は鐵道、學校、港灣の費用及び臺灣事業費等に費消せられたる者なり。又清國より收受せし償金三千二百萬磅は、其他の收入と共に日本をして今日の發達をなさしめ、諸國をして其費額の小にして効果の大なるに喫驚せしめたり。次に貿易に就きて觀察するに、一七九四年英國より生産品の輸出額は千六百七十萬磅なり、而して一九〇三年に於ける日本の商品輸出超過價格は二千七百萬磅にして、一九〇一年には二千八百萬磅なりしも、これが前後に於ける五ヶ年間の平均額は二千二百萬磅なれば、日本の商品輸出超過價格は、百十年前の英國に比し稍多し。然るに英國は當時前述の如き僅少なる商品輸出超過を有せるに

拘らず、二十二ヶ年間其戦争を繼續し六億三千万磅の國債を募集し得たり。故に現時の日本は當時の英國に比し、遙に其實力優勝なるものと云ふべく、其人口は當時の英國に比し三倍に上り、其商品輸出超過價額亦大なるに加へて、日露開戦前日本は五千六百萬磅の國債を有したるに過ぎざるに、英國は其當時の二億六千万磅の國債を有したり、日英の狀態酷似せること前記の如くなるに、日本は果して戦争の繼續に依つて其財源を涸渇するに至るべきや如何、日本は爲替の激變を防止するの目的を以て、千萬磅を倫敦、紐育の兩國市場に於て借入れたり。而して軍費は専ら内國に於ける歳入及び募債に依つて支辨せんとするの計畫ありと。日本の貿易は一八八三年より一八八五年に至る二ヶ年の例外ありたるも、常に商品の輸出超過を示し、一八九六年より現時までは其反對の趨勢を示せり。商品輸入超過の原因は幾分米の凶作なりこと、幾分内地産業不振の爲めに出でたるものなるも、其主因は軍備擴張の爲め外國品の購入大なりしに依るものなり。而して日本内地の産業は、凡ての方向に於て著大の進歩發達をなせり。以上各種の事實より推究して、日本が今後久しく戦争を繼續し得るの實力あるや明か

なり云々。
又倫敦タイムスは日本の事情の凡てが往時の普魯西に似たるを論じたる末結論を下して曰く、
兵數は近代の戦争に於て、必らずしも萬能ならずと雖、永續性の大成功は近時に於て兵數の優大に依りて得られたり。普魯西成功の秘訣は、實にこの兵數の優大に存したるなり。兵數は即ち成功に對する第二種の原因に屬するものにして、第二種の原因中には、直接勝利に資するものあり、又然らざるものあり。而も一八七〇年に於て普魯西帝國は佛軍一人に對して、其三人を境界に派遣したる單純にして且つ平凡なる事實は、即ち深く其成功の地盤に達せる者なり。普魯西は第一回攻撃に應ずることを得べき二十一萬の佛兵に對して、六十萬の兵員を其戰場に送り、一八七一年二月末、兩軍の前衛には最早動員の外存するものなきに至りて、獨逸の兵力は百三十五萬七百八十七人に増加し、内殆ど百萬は動員されたる軍隊なりき。日本は即ち學んで之に従ひ、鴨綠江に於ても且つ金州に於ても、之と等しく一に對する三の優勢を以て露國の防禦陣地を壓伏せり。

確に員數その物は萬能なりと認むべからず。蓋し軍隊は數量と品性ととの製作物なるを以てなり。この二因子に於て勝を占め、而して他の缺を補ふを得るに至らば、結果は要するに一なり。然れども若し數の優大に重ぬるに、純潔なる愛國心と屈すべからざる決死の念とを以てし、尙加ふるに教練の優秀と指揮の良好とを以てし、少なくとも其武器を對等ならしめば、戦争の結果は自ら一方に偏せりとなさざるべからず。これ軍隊的組織を行ふに於て、常に其目的とすべき標的にして、又實に其標的たらざるべからざるものなり。之に依りて戦争は之を行ふよりも寧ろ之を避くるを得べく、最後の勝利を期して戦ひを行はんとするに、餘りに危険にして且つ餘りに重荷なるを、其敵に感せしむるとに依りて、即ち我目的は達すべきなり。軍隊は此結果を得るに至りて、初めて其企畫を達したるものなり。之が爲めに要する費額如何に大なりとするも、事實に於ては無限の廉價なりとせざるべからず。然れども軍隊にして若し此結果を得るに至らずとせば、それは要するに危険なる無用の長物たらざるべからず。費を投じて之を支へたる人民は當にカーライルの箝撻を受くるに堪へ、且つ其頭に征服軍の鐵蹄を受くるに堪

へたるものなり。
日本は凡て之を普魯西に學び、而して正しく之に屬すべき名譽の悉くを得たるものなり。

日本は又直接メッセルより學びたるも、且つ間接には歸納したる所に依りて、國民戰術の自然の法則に基づき、作戰計畫を立つるの必要なるを感得せり。

次に對手國たる露國の評論界が如何なる觀察を下せしかを見ん。

露國新聞ノーヴエウレミヤは倫敦發電としてデイリー・エクスプレス通信員が、長崎に於て日本の有名なる政治家某を訪問し、某氏の語れる所なりといへる通信を載せ、評して曰く、此電報に依れば、日本は恰も露國を容赦せんと欲するものと如し。日本政治家の言に依るに、日本は決して極端まで戦争を望まず、露國の勢威を損ずることは日本の期する所にあらずして、日本はその期待したる目的を遂げ、露國艦隊を絶滅し、朝鮮に不可侵の位置を占むるに及ばず、直に媾和條件の談判を開始するを承諾すべく、其時期に至るまでは日本は如何なる提議にも耳を傾けざるべしと云へり。

吾人は此電報を以て一字一句皆僞言なるべしと思ふ。吾人はたゞひ日本に於てだに、苟くも責任ある政治家にして、斯かる無禮極まる言を吐く者あるべしとは想像し難し。然りこれ實に無禮なり。吾人は自ら重んずるを以て、斯くの如き場合と雖我敵を罵倒せざるべし。然れども露國語中に前記訪問に對する言を形容すべきもの、他に一もこれあらざるべし。

想ふに日本外交家は吾人を支那と混じたるものならん。日本の外交家は二三回わが海軍軍人の遭遇したる偶然的の不運を以て、吾人をして一敗地に塗れたる如き思ひをなさしむるを得べしと想像するものならん。蓋し運命の打撃に由りて精力の益發揮せんとすることは、日本人の頭上には思ひ浮ばざる所ならんか。日本外交家の言に依れば、露國が只管平和の調停をなすものあらんことを希望するものなりと見做せるが如し。曰く、苟くも日本はその目的を遂ぐるに於ては、直に媾和條件の談判を開始するを承諾すべしと。嗚呼これ何たる無禮ぞや。我國の史上には、日本よりも不幸災厄の更に甚だしきものあり。我に對するの敵多々ありしも、其中最強の敵は己れの目的を遂げ、わが古都を占領して、將に媾和の談

判を開始するを承諾せんとする時に際し失敗したり。彼の失敗を招きたるは此
 危急存亡の秋に際し、我々露國民が和を構するを承諾せず、巴里城内に入りて城
 下の盟ひをなさしむる時を待ちたるに依るなり。

日本人はわが過去の歴史にも現状にも通曉せざるものなり。一月二十六日二月
 八日以後露國民の感情未曾有に奮激し、露國の一打撃を蒙る毎に國民の之を感
 ずるの鋭きこと恰も各人個々に蒙りたるが如き感じをなし、露國民擧つて恰も
 一人の如く、衆心團結報復する所あらんとす。露國民の意嚮此くの如き時に當り
 て、日本假令和を構せんと欲するも、争でか和を構するの途あらんや。

日本は能く戦備を整へ、自國に取りて開戦するの最も得策なる時期に於て開戦
 したり。吾人の見る所に依れば、俄に襲はれたる露國は、日露戦争の結果、十分準備
 したる時に於て、日本に相當の報讎をなすべく、實際自國の爲めに十分の利益を
 以て終局するを得るの時始めて之を終局すべしと思ふ。日本人及び其盟友たる
 者須らく之を知れど。

ノイヴェンレミアは五月十日の紙上に「日露戦争は何の爲めぞ」といへる一論を

試みたり。曰く、暴風雷雨に際して電光を視ること恰も煙火を見るが如く、轟々た
 る雷聲を耳にして、音樂を聞くが如き思ひをなす人あり。又電光の閃々たるを見
 るや、恰も雷に打たれて殺さるゝ如き感をなし、窓掛を垂れ、臥床の下に潜み、目を
 閉ち耳を塞ぐ人あり。而してこの兩極端の間にありて、平然として電光雷聲の現
 象を觀望しつゝ、俗界の幸福は全く平常の業務繼續にありとし、偶然電光に打た
 れて死するが如きは、勇氣にも怯懦にも依らざるを知りて、依然その業務を營む
 者あり。戦時に際しても亦斯くの如きとあり。惜しい哉、今又遠隔の戦地より飛來
 するの報に接して、徒に神経を惱ます者多し。悠々泰然たる人々が黙々として業
 務に服するの間に、怯懦の徒は戦争の恐るべきを囁々唱道し、その非人道的たる
 ことを主張し、甚だしきは速に之を中止し、調停の方法を説きたる者、莫斯科人民
 中にも亦これありしが如し。然れども今已に二百年を經過したり。而も莫斯科人
 は今依然莫斯科人たるも、ニエンシャンツは今日繁盛の大都聖彼得堡となりた
 り。今より數百年を経たらんには、太平洋沿岸にも亦巍々乎たる露國の市府出現
 して、今日まで遠隔の地と稱し、他國の領土視したるものも、化して露國の一美觀

の地となるに至らん。

吾人は今西伯利亞の爲めに戦ふものなり。知らずや、一八一二年、歴山一世曰へるあり。我力全く竭き果てたらんには、朕は寧ろ蓬々鬚髯を生じて、西伯利亞の野に彷徨するも、屈辱的の條件に署名せざらん。歴山帝をして此言をなさしめたるもの、これ背後に西伯利亞あり、此美なる領土のあるを感じたるが爲めのみ。

由來吾人は、西伯利亞に對して忘恩なりき。數百年前西伯利亞は吾人に供給するに黄金を以てし、吾人は之を以て歐洲の文明を買収したり。西伯利亞は吾人に糧はしむるに貴重の毛皮を以てし、今猶吾人のため、其地層内に、森林に、河水に、未だ人の採掘せざる天富を保存せり。西伯利亞は多年吾人露國民の幸福に取りて、危険なる人民の屑を收容し、之を化じて有爲にして前途多望なる植民地人となし、稍衰弱に傾きたる露國本國民を刷新するの新生氣をなせり。

吾人は今日漸く西伯利亞に鐵道を布設し、而して今や漸く覺醒して、生氣を蘇し光明に向はんとす。今之に太平洋に向ふの窓を興ふるの必要なること、猶彼得時代の露國が歐洲に面する窓の必要なりしが如し。吾人の極東に於ける徳義的及び

物質的の至大の利益、實に茲に存するなり。現時の日本との戦争は、主として西伯利亞の將來の發達其文化の爲めにして、即ち其生存の爲めなり。西伯利亞は、是露國の亞米利加なり。吾人は未だ之を悟らざりしに、米人は吾人に先だちて之を悟りたり。米人は大洋を経て西伯利亞の價值を看破したること、吾人が烏拉爾山脈を通して見るよりも明確なりき。日本人も亦之を悟りたり。故に今回の戦争は、單に我大國の位置を保つが爲め、又は歐洲に威迫する黄色人種の危険を防ぐが爲めのみならずして、露國全帝國の生存、死活的の利益を發するが爲めの戦争なり。

吾人曾て西伯利亞鐵道敷設當時、英國の一新聞にて、紐育のエ・エッチ・フォード氏の「西伯利亞及び露國に對する米國の勢力」と題する論説を讀み、此米國人が西伯利亞に對する抱負の絶大なるに驚きたり。氏は此地の前途頗る有望なりとし、米國に於て相當の地位を有する者も、茲に移り來らば、富を作り名を揚げんこと疑ひなしと云へり。氏の説或は米國風の誇張に失する所あらんも、ダーリニー(極東)市を改稱して、リッシニー(餘計なもの)となさんと嘲笑する者に比すれば、其西伯利

亞に對する見解の妥當なるを知らん。現時列國の政略の趨勢に鑑み、且つ亞細亞人種の覺醒を顧みたらんには、吾人は太平洋沿岸に吾人の位置を鞏固にすること、黒海を化して露國の湖となさんとする妄想よりも、更に緊要なるを知らざるべからず。吾人若し極東に於て失敗したらんには、近東巴爾幹半島に於て亦なきのみ。吾人若し此くの如く明かに目的を確認する以上は、吾人は如何なる犠牲をも厭はず、一方手に劍を掲げ、一方外交上の手段を盡くして、飽くまで此目的を遂げざるべからず。一時の敗衄は敢て意に介するに足らず。如何なる災厄我等に臨むも、吾人之を排すること、猶昔時の困難なりし時代に於けるが如くなるべし。只々吾人は、何の爲めに戦ふかを知り、互に己れを賣らざらんことを確信すべきのみ。

此點に關して、進軍の上に於て軍氣を勵まし、人心を鼓舞し、帝國人民をして安然平常の業務を執らしめんが爲めには、露國政府が日露戰爭に關し、一切他國の調停干渉を容れざるの意嚮を宣言せるほど、其當を得たるものあらず。勇敢強硬なきは夙に我外交の缺點なりき。かのビスマルクすら、我外交家の怯懦に一驚を喫

せりと云ふ。伯林會議の悲むべき一件は、吾人未だこれを記憶する所なり。又セバストポールの件を思へ、マラホフ堡壘の陥落は、莫斯科の燒拂ひとは同日の談にあらず。而も吾人はクリミヤの英雄的手柄を立てたる後も、怯懦の餘り露國全土殆ど敵手に落ちたるが如き感をなせり。而も今日に至りて回顧すれば、當時世に名高き英佛伊の聯合なる者は、一セバストポールの苦戦に疲れ果て、亦戦ひを繼續するの意氣なかりき。奈破翁三世は波蘭、芬蘭、高加索に反亂の起らんとする空望を待みとしたりき。焉ぞ知らん、吾人が平和の條件に應ずるの時、三國同盟已に破れんとしたるを。若し當時歴山二世にして、西伯利亞の存在するを記憶すると、一八一二年歴山一世の記憶したる如くしたらんには、西伯利亞は吾人を救ひ、奈破翁三世の申込みたる屈辱的の媾和條件を排すること、歴山一世が奈破翁一世の提出條件を排したる如くするを得たりしならん。

我内國の不整理は、姑らく之を拋棄し、協同一致露國の國威を擁護すべきなり。土地を區劃するに方りては、先づ材を立て、而して後徐に排水肥土の業を講ずべし。若し他の列國、手に劍を掲げて、他國の領土に門戸開放政略の爲め戦はんとせん

には、吾人我家の至緊至要の部分に於て、温暖と日光とを容るゝ窓を開かんが爲め奮戦すべきは固より當然なり。

又同新聞は、韓國の國際上の位置と題する社説に於て、左の如き説をなせり。こは要するに英國外務次官パーシー卿の議會に於てなしたる答辯を附會せるものなり。

本紙の倫敦通信に記せる如く、韓國の國際上の位置に關する議員の質問に對し、外務次官パーシー卿は之に答辯して、大英國は李皇帝を以て獨立の國王と認むるものなりと聲言せり。

此報告は是、最も確實なるものなるを信せざるを得ず。此答辯は間接ながらも日本政府に對し、歐洲の輿論を代表する始めての公然たる非難なり。特に奇とすべきは、此始めての非難が、日本と同盟を成立せる英國の議會に於て發表せられし一事なり。英國當局者に依りて言明せられし此答辯が、甚だ緊要なるものなる事を認めんと欲せば、吾人は左の事項に注意せざるべからず。日本は韓國の中立を破り李帝の領土を以て全く自國の領土の如くに處理せり。日本は今回の事局に

に對して、全く是一八九四年當時の自國の政策を其儘踏襲せる者なり。日清戰爭の際に、日本は同じく朝鮮の中立を破り、韓土を以て恰も交戰地域の如くなせり。然るに一八九四年には、日本は今日に比して注意周到なる行動をなせり。當時日本は事實的に韓土の中立を破る前に、所謂對韓同盟の條約を締結せん事に盡力せり。日本が露國と開戦するに當りては、初歩の國際的禮儀をも守る事をせざりき。彼等は先づ朝鮮の中立を破り、然る後に二週間を經過して、始めて李皇帝をして二月十日(露曆)の條約に調印せしめたり。此條約の内容の確たる事は、吾人固より之を詳悉するを得ず。されども歐洲諸新聞の傳へたる零碎なる通信に徴するに、日本は朝鮮の保護者たらんとするが如き主義に基づきて、朝鮮を併吞せるものなる事を證せり。即ち日本の外交政策は韓國を以て埃及に比較せり。

之を要するに、日本の對韓政策は實際に於て、國際上の保護國關係の範圍を逸出せるものなり。日本は聖彼得堡より韓國公使を召還せしめ、又韓國をして露國に對し兵を起さしめ、朝鮮北境に於ける露國人民の租借地權の破棄さへも宣言せしめたり。

露國政府は開戦後間もなく此日本の態度を以て、韓國政府の位置を根本的に無視せる者なる事を宣言せり。此事件に關しては、露國政府は戦時に關する列國公認の原理を、最も嚴重に遵守せる者なり。一八九九年の海牙條約四十三條に従へば、他國の領土を占有する者は、其國に存する法律を遵守し、占領せる土地の社會の秩序と状態を安全ならしめ、不慮の故障を避けざるべからずと。日本が所謂、内政の改革なる名の下に、韓國の國際的位置を變改したる行動は、此海牙條約に全く違反するものなるや勿論なり。パリーシイ卿の言ふまでもなく、是英國が此問題に對して露國の見解と一致するものなる事を證し、且つ韓國結局の始末は、唯平和條約を以てのみ解決するを得べきものなること、及び日本が無遠慮なる早急の行動に出でしものなることを、明白に非難せるものなり。

又同新聞は英國にて毎週一回發行の陸海軍事雜誌より、日英同盟と日露戦争と題する一論文を譯載し、且つ之に對して、自家の意見を附記せり。即ち英國軍事雜誌の所論なるものは左の如し。

英國は現今の戦局を以て、是僅に戦争の發端に過ぎざる事を記憶し、且つ此戦争

の終極は列國の間に新なる均勢の關係を來し、此勢力均衡の關係は英國の位置に對して、著しき影響を與ふるものたる事を記憶せざるべからず。戦争終結の事を豫想して論議するは、固より無益なり。何となれば、戦争の終局には複雑なる幾多不測の事端を惹起すべきを以てなり。然りと雖、其將に生せんとする偶然の事端に備ふる所あるは甚だ切要なり。英國の政治家、法律家中には一人として、英國が日本と提携するの約束を日本に與へたる事實に論及する者更にあるなし。勿論日英同盟は露國が單獨にて戦争行動を持する間、英は中立を守るの外、何等の義務を負ふべきにあらず。然りと雖、日英同盟は英國をして左記の義務を負はしむるなり。即ち若し我同盟國(日本)の利益に反對する所の第三國の干涉一切に對抗すべき義務ある事はなり。某國が居中調停を試みんとする如きは、失敗に終るべきは、もとより其所なり。されど歐洲には、英國人をして某國(ノーヴエ・グレミヤ)は是露國を指せるものにあらざるかと附言せり。に對して、敵對の位置に立たしめん事を希望する政治家決して尠からず。吾人は固より是よりして必らずしも戦争の事端を惹起すべしと斷定する者にあらず。されど何人能く斯くの如き

發展なきを明言するを得んや。吾人は既に一の義務を負へる者なり、特に生じ來らんとする事の結果に對して、目を覆ふ如きは、吾人のなすべき事にあらず。現今の戦争が吾人に與へたる一大教訓は、國家は必らず何時も軍備を充實するの必要ある事是なり。故に吾人も亦絶えず、我防備を完成するを努め、我防備の一切連結を確實ならしめ、且つ之を試験し、絶えず我海陸軍を充實ならしむるに努力せざるべからず。

ノーヴェエブレミヤは如上の所論に附言して曰く、英國にては概して、日英同盟の事を論ずる者尠なく、英人は、日英同盟より何等の事端をも期待せざるが如く装へり、されど今や彼等は此見解を抛棄して如上の如き説をなせり。此説は甚だ悲觀的の説なるや勿論なり。其所謂某國に對して云々と云へるは露國を指せるものなるか云々。

又同新聞は説をなして曰く

過般英國の一新聞は、日本が滿洲の都市に清國の警吏を派遣せしむるの件を清國政府と商議せる旨を傳へたり。斯くの如き報知は、未だ以て十分の信を置くに

足らざれば、殊更に之を論議するの必要を認めず。由來英國新聞の傳ふる浮説は、吾人をしてさまで重きを置かじめざるの慣習をなさしめたり。されど兎に角、日本が實際に這般の周旋をなしたるは事實なるべし。

日露戦争の交戦地域を、法理上の状態より觀察する時は、是實に世界古今の史上に未だ曾て其類例を見ざる事態なり。日露の交戦既に四個月有餘を経過せるも、兩交戦國の領土内は、僅に浦鹽に對して牽掣的砲撃を觀たる外、今日に至るまで片土たりとも直接の危険に遭遇せざるなり。戦争は兩國の領土外に行はれ、兩國何れも互に其領土を犯されざるなり。戦場となりたるは清韓二國にして、彼等は戦争に關係を有せざるも、直接關係を有せざる事情の爲めに、戦争の渦中に捲き込まれしなり。

韓國が交戦地となりしは、固より同國の意志にあらず、又露國及び中立國の志望にも反せるものなり。滿洲の交戦地となりたるは、地理上必然の結果にして、又利害を同じくする列國の承認する處なり。故に日本が朝鮮の中立を破りたる事件には、飽くまでも反對し、日本が平和なる滿洲に對し、戦争の風雲を喚起せしめたる

る事は、吾人をして深く悲まじめざるを得ず。されども滿洲も朝鮮も事實上に於て法理上の結果に伴ふ交戦地域となれるは明かにして、是、法理學的思想の明示する所なり。

是何人も明かにする條理にて、敢て識者を俟つて知るを要せざるなり。然るに日本は此何人も認知せる事を忘却し、隱險にも上述の如き警察權に關する周旋の勞を取らんことをせざるなり。滿洲の警察權は何れよりするも、是、滿洲の還附に伴ひて清國に屬すべきものなるは言を俟たず、又月餘前日本は、滿洲の門戸開放なる好名稱の下に、廉價なる演劇的仕事をなすの便利を認め、安東縣を占領するや否や、彼等は米國領事を招き、兵燹の爲めに全く焦土に化したる同市に來りて、貿易事務を取らん事を請へり。日本が這般の領事招致をなせる如きは、是、明かに自己の領土主權を收め、當に清國に還附すべき正當權限外の法理上の權利を有する者となせるなり。彼等日本人は、地方の根本法律を變更し、戦争と何等の關係をも有せざる清國の行政(警察)に迄も干渉せり。彼等は韓國に於ても亦同様の行動をなし、朝鮮政府にさへも屬せざる權利を私にして、鴨綠江に於ける露國人の貸借權

を排拒せり。

然るに一ヶ月後の今日に至り、日本は清國政府をして能ふだけ戦争に接近せしむるの必要を認め、彼等日本人は俄に謙遜追従の小人となりすまじ、彼等が交戦國として正當に占有するを得べき權利の一部をも放棄せんとし、又露國人の撤退せる地方に警察權を施行せん事を清國人に謀れり。

吾人は日本人の是等の惡戯は、決して看過すべきものにあらざるを認むるものなり。凡そ還附は是、獨り其權利たるのみならず、又是至難なる責任の一に屬す。交戦國が一地方を其所屬國に還附せんと欲せば、其領域内に於て社會の秩序公安を保持するに必要なる、一切の煩勞を負ふの覺悟なかるべからず。元と還附せらるゝ方よりすれば、其人民の四圍の境遇を安泰ならしめ、戰時數行はるゝ強請掠奪殺戮等より社會を防護せられざるべからず。地方人民の安泰は還附の必要條件なり。

還附せられたる地方に警察事務を執行するは、甚だ至難の事に屬す。日本兵の哨署は何れもコック兵の襲撃を受くる憂ひあり。加之、其兵を警察事務の爲めに割

く時は、日本の現役兵を減ずるを免れず。是を以て智慮に富みたる日本人は、自家の警戒のために、清國人を利用するの用意をなし、清國人は日本軍の煩勞に堪へざる用務に當らんとす。

吾人は北京政府が、斯くの如き公然と其中立を破るの決意を看過するを得ざる者なり。清國政府にして若し斯かる事のあらんには、露國は必らず當然の復讐をなすに躊躇せざるなり。

又同新聞主筆スウォリン氏は感慨を述べて曰く、

吾人は果して何の爲めに戦ふものぞ。之を言ふ甚だ奇怪なるも、此問を起す者多く、而も之と同時に、吾人一たび戦ひを挑まれたる以上は、我武器の名譽と勢威とを守らざるべからずとは、之を言ふ者の自認する所なり。

彼等は又曰く、吾人は能く此理を知れり、然れども吾人は何の爲めに戦ふものぞ。滿洲と朝鮮の爲めにあらすやと。

吾人の戦ふは、今も未來も極東に於て、何人にも吾人を動かさしめざらんが爲めのみ。抑、國家の権力なるものは、人をして皆其勢威を公認せしむるに基づく。而し

て之を公認せしむるは、其國力を檢するに依りて起るものとす。吾人のカザンに對する、アストラハンに對する、クリミヤに對する、高加索に對する、中央亞細亞に對する、皆然りとす。露國の彼處に勢力を扶植したるは、露國の勢力を公認せしむるの方法たる戦争を以てし、今已に何人たりとも吾人より此領分を奪はんとするものなし。

露國は人の其顔面を打つことは勿論、其背部を打つことも忍ぶ能はず、若し之を形容し得べくんば、極東は露國の背部なり。獨り日本のみならず、米國も英國も我極東に手を伸ばし、就中吾人が鐵道を敷設したる時より、極東に手を染めんとせり。されば、露國は獨り日本と戦争するのみならず、英米とも戦ふものたり。是英米の日本の勝利に同情を表する所以なり。吾人は鐵道を以て、文明工業國の爲めに滿洲を開放し、彼等の食慾を激ましたり。日本は吾人を毆打したり、是に於てか露國たる者

撃下よ然らば我去らん

と云ふこと能はざりき。是吾人は何の爲めに戦ふものぞとの間に答ふるものな

り。こは即ち露西亞帝國統一史上に見ゆる一原因なり。此統一史は夙に其端を啓き、今や將に其終局に近づかんとするものなれば、吾人は如何なる犠牲を費すとも飽くまで我主張を貫かざるべからず。

日本は吾人の備なきに乗じて吾人を打ちたり。吾人の極東侵略は遅々として行はれ、而も甚だ都合好く行はれ、一滴の血を流さず、特別の勞をも要せざりき。好機の乘すべきあれば、吾人戦はずして地を略取じ、或は支那人之を吾人に譲りたり。日本人支那に勝ちて遼東を占領するや、吾人は又一兵に血塗らすして、これを斥けたり。吾人は此血を流さざるの易々たる勝利に、自惚れて、日本が斯くも速に兵力を整へ、吾人に向つて退去を迫るべしと想像する能はざりき。是吾人の失敗の原因なり。クロバトキン將軍滿洲に至りて、滿洲露軍の指揮權を握りたる時、其各地方に散在したる露兵五萬に滿たず。而して我海軍は開戦前、已に破壊せられたりき。露國は此無禮暴慢の挑戦に應じ、我史上に未だ曾て見ざる、極めて不利なる特殊の事情の下にありて戦はざるを得ざる境遇に陥れり。露國が必らず戦争を以て、極東を我手に收めざるべからざることは、勿論初めより知りたる所ならん。

これを知ればこそ、旅順口の防備を嚴にし、殆ど未曾有の海軍擴張をも企てたるなれ。この突如起りたる戦争の近因は、後世歴史の識別する所たらん、吾人は今十分勇氣を鼓して、我國事の爲め、露國の運命の爲めに戦はざるべからず。事の結果如何は吾人の知らざる所なるも、現在の事實は吾人之を知り、今日の情態の原因は十分之を説明するを得べし。予は軍事専門家にあらざれば、軍事上に容喙すべからざるも、今回の戦争が露國を去ること遠く、種々の困難之に伴ふのみならず、地形地利の我陸軍に取りて全く新奇なることに一顧せざるべからず。從來我戦争は野戦なりき。我軍はアルプスを越えて、巴爾幹に戦ひたれども、云はゞ一時的戦争のみ。遼東半島に至りては、隨處山嶽崛起し、山間馳驅の習慣なき露國人に取りては、全く新奇なり。高加索征服の時、山間の戦ひありたれども、數十年に亘りたる戦ひなれば、之と比すべきにあらず。我戦術家は能く此新なる事情を斟酌し、亦能くかの突然軍事的非常の準備と、軍事に最も必要なる協同一致を顯はし、戰場に吾人の繰出し得るよりも、殆ど二倍以上の兵を集中したる所の、新なる敵を顧みて畫策する所なかるべからず。

吾人は陸に於ても海に於ても戦はざるべからず。陸軍の勝利は未だ吾人に終局の勝利を與ふるものにあらず。是軍人も亦首肯する所なり。日本人制海權を有する以上、其本國は傷つけられずして、猶多くの兵を繰出すを得べし。故にバルチック艦隊は、露國の將來の運命に取りて、至大の價值あるものなり。此艦隊が齎らす所の勢力は、恐らく十萬の陸兵に優る者あらん。予は此にバルチック艦隊の一部分たりとも之を動かさし、以て太平洋艦隊の勢力を増さんことの希望を一言せざるを得ず。是予の常に人々より聞く所なり。此事の果して實行し得べきや否やは、吾人の固より解決し能はざる問題なれども、露國民の意氣非常に激昂奮起し、戦争の好結果を得んとするの結果、切實熱誠なる愛國の情溢れて之を言ふものなり。かの艦數微々たるも、勇敢機敏なるに由りて、強き浦鹽艦隊の豪傑的偉功に願み、吾人益、此希望を表せざるを得ず。

次に獨逸の評論界は如何。フオンツェツァイツングは曰く。

日露戦争は正に半ヶ年を経過したり。勝敗の數は最初の豫期に反し、事局推移によりて、今や露國は現在に於ては勿論、將來多年の間は、歐洲の一大國に對抗する

こと全然不能なるべしとの信念を全世界に與ふるに至れり。獨帝會て曰く、苟くも基督教信者ならば何人と雖良好の軍人たるを得べしと。蓋し此一句を以て文字通りに適用し得べきものとなすは、帝の本意にあらずべし。日本人は基督教徒にあらず。然りと雖、軍事上の能力を判断するの眼識を有せらるるウィリヤム二世陛下には、今回の攻撃及び防禦の何れに於ても、頻りに事實の上に證明せし彼等日本人の顯著なる伎倆を全然認識せらるるべし。彼等は何の爲めに戦ふかを知り、彼等の將來は海上にあらずして、亞細亞大陸にあり。彼等は同大陸に於て、露國の專制主義及び殘虐に對抗して、自由寛容及び文明の主導者を以て任せり。戦争の終局如何に拘らず、日本は永く尊敬すべき國家として存續し、列國は將來之を計算に入るを拒まざるべし。又之と同時に、露國の敗衄は歴史上永久に忘らるるゝとなかるべし。露國新聞は初め日本の開戦を以て自殺なりと稱せり。然るに事局の發展は所謂自殺者が自己に對するよりも、其敵手に對して一層危険なる創傷を與へたることを示せり。例令、日本にして今後一二の戦闘に敗るゝとするも、日本國民には其地歩を恢復する爲めに、あらゆる手段を盡くすの覺悟

あり。然も有力にして正に興隆の途にある同帝國の資源は、吾人の想像する處よりも一層豊富なるものあるべきを信ず。

六月十一日ケルニヒツアインツング新聞は、日露戦争に関する露國の輿論に關し露國通信を掲載して曰く。

開戦當時より露國軍の戦敗に關する同國人民の態度を研究するは、頗る趣味ある問題なり。同國の事情を観察する者は、今日に於て不滿の兆候は單に政府反對の側に於てのみならず、保守黨中の最も保守主義を採る社會に於ても、益顯著なるに至れるを見るべし。グラシニシ及びスウェットの如き保守主義の新聞紙も、此頃迄保有したる慎重冷靜の態度を全然變じ、從來政府の處置に信頼したるの非を自白し、且つ政府が新聞紙及び社會に事の真相を知らしめざるを難じ、新聞紙が露國人民の凡ての出來事に干與して之を報道し、又百般の事項に關し其意見を發表するは其權利にして、政府も亦宜しく之を傾聴すべきものたることを益々高調に主張するに至れり。ノーヴェウレミヤ及びビルシエツァ、ツエドモスチーの如き自由主義の諸新聞紙は更に一層政府反對の度を進め、露國の社會をして法

律上國政に干與せしむるの改革を唱道し、斯かる改革は戦争終る後に至らば、必ず論題に上るならんと論せり。而して末段一句を加へたるは、畢竟新聞檢閲に憚る所あるが故にして、新聞檢閲なかりせば、自由主義の新聞紙は戦争の終るを俟たず、既に今日に於て直に改革を請求するならん。

又新聞紙以外に於ても、露國輿論の政府に反對する傾向は更に一層甚だしき者あり。露國には平素輿論を適法に發表し得る機關殆ど皆無なるを以て、遂に同國の事情を観察する者は、正確に輿論の趨向を判知すると頗る困難なれども、同國の社會と不斷接觸し居る者は、政府反對の氣焰頗る高まりたるを明知し得べし。即ち此氣焰は、二人の對談に於ても、衆人應酬談笑に際しても、學術協會の席上に於ても、又専門家の會合に際しても、一般に之を認むるを得べし。例へば兩三日前に催されたる科學教育に關する代表者の會合及びピロダー派醫師の會合の如き、政治問題には何等の關係を有せざる會合に於てすら、輿論に驅られ不知不識の間に政府反對の言議を弄じたるにあり。此輿論は廣く傳播する多數の筆記論文及び外國に於ける露國新聞の寫に於て發表せらる。而して特に注目すべき

は平素愛讀者を有する革命黨の新聞紙のみならず、近頃成立し、既に官吏社會に於て愛讀者を有する温和なる新聞すらも、前記の如き輿論を發表するとは是なり。憲法政治を主張する政黨の檄文中に曰く、無責任なる政府の淺見利己の政略は人民の認諾を経ざるのみならず、實に其意に反して露國を危急存亡の域に瀕せしめたり。露國人民は、固より之に因つて生ずる義務を盡くさざるにあらずと雖、吾人は奴隸的誓忠者、若くは武斷的愛國の示威運動等に依らずして、吾人の態度を定めざるべからず。吾人は本年の重大なる事件は、結局露國政治上の自信力を鞏固ならしむるの結果あらんことを希望す。尙吾人の希望する所は、本國を外敵に向つて防禦すると同時に、亦内部の敵に向つても之を防禦することは是なり。露國強大の基は、官吏の專横にあらずして、全く人民の活動的生活に存することを忘るべからず。今次に多數の寫を以て有名なる露國一學者の書柬中、露國內に傳播せられたる二三の文句を擧げん。曰く抑も這般の戰爭は、露國人民の利害福祉若くは其希望に何等の關係を有するか否々決して之あるにあらず。元來此戰爭は、極東に於て單に自利を計らんとして、國民的財産の幾百萬を消費せしめたる

權勢ある人々に依りて誘致せられたるものなり。而して今や形勢は頗る重大なり。一朝戦ひ敗れんか、露國は莫大の費用と、幾多貴重なる壯丁の生命及び領地の一部分(露國には元來必要なるにあらずと雖も)も失ふべし。又露國にして戦ひ勝らんか、其失ふ所のもの蓋し之に過ぐるものあらん。即ち就中露國人民の屈從する抑壓專制に對し、之を除去せんとする最終の望みを失ふべし。吾人は此言を露國輿論の追加として、今茲に之を掲げたり。然れども此くの如き言をなすもの數、如何に多くとも、其勢力に到りては甚だ微々たるものなり。何となれば之を傳播するの組織を缺くを以てなり。又前顯輿論の反抗に比し、更に大なる憂慮を政府に與ふるものは、露國唯一の代議體たるゼムストワ(地方議會)の現今なじつゝある反對運動なり。露國の社會は、既に往年より此地方議會の意見如何に注意するの慣習あり。然るに此地方議會は機會ある毎に憲法に均しき法例を設けんことを屢、政府に建言し、又先般内務大臣との衝突ありしが、其原因は地方議會より露國赤十字社に出したる金額の使用法に係かり、地方議會は屢、政府の該金額使用法に就き不信用

なることを發表し、同時に自己の代理人を任命せんとを請求せり。斯くて多少其目的を達したりと雖、其喚起せる處の輿論は、行政權の爲めに壓服せられ、之が爲めに犠牲に供せられたる者亦決して少なじとせず。例へば最も聲望ある莫斯科府の同議會の會員にして、同會執行委員長たるシフポー氏の如きは、終に其職に留まるを得ざるに至りたり。同氏の如き、地方議會及び貴族社會より敬せられたる人に對しても、政府が右の如き處分をなじ、又公爵トルゴルキベトルンケウイチ、エウレイノウ等の名望家をも追究せる程なり。然れども斯くの如き手段は、決して地方議會に於ける政府反對の氣焰を滅せしむるの道にあらざるべし。又將校中にも不満を懐く者あるに至りたるは、全く疑ひなきの事實なり。又一方に於ては極東より發したる將校の書東諸方に傳播し、其訴ふる所は往々政府側の新聞に於てすらも記載せらるゝと少からず。一例を擧ぐれば、帝室御料地の主務者が非常の高價を以て西伯利亞鐵道の枕木を供給したるが如き、又陸海軍將校の戰場に赴くに際し、偶像の禮拜、祈禱及び寺院參詣者に對する甚だしき愚弄是なり。さればトラゴミロフ將軍が日本人は水雷を以て吾人を襲ひ吾人は祈禱を以て

日本人を撃つと云へるは、少壯の將校に甚大の感動を與へたり。何となれば右は全く少壯士官等の行ひに符合するを以てなり。尙注目すべきは、露國に於ては尊信せらるゝ某將官が友人に送りたる書東中に次に掲ぐる語句あり。曰く、我國の智者は同時に多數の兎を逐ふ故に、其今日あるは當然の事なり。自分の計算に依れば、目下の所少なくとも六正の兎あり、即ち波蘭、芬蘭、土耳其、波斯、印度及び滿洲なりと。

米國新聞は倫敦六月四日の發電を載せて曰く、日本の連戰連勝と且つ其勝利の大なるとは、歐洲の輿論に奇異なる結果を與へんとするに至れり。大陸の同情は嘗て専ら露國に傾き居り、一週間前までは、皆戰爭の遠からずして露國兵力の優大なるを示すに至らんとを確信し居たり。之が爲め南山占領の如き事實に依りて露國の假面がもし一たび襞がるとに於ては、従つて佛國に恐慌を來たさしめブルルスに容易ならざる打撃を與ふべしとは、殊に經濟界に於て憂慮し居たる所なり。然るに實際の結果は、不思議にも之と全く相違し、露國は成る程全敗したりと雖、其全敗は畢竟平和克復の遠からざるを表明する者なるを思はしめたり。

今は歐洲急に一變して、旅順口の陥落遠からざるを斷定するに至り、露國は無用の戰爭を繼續するよりも、寧ろ和を乞ふに至るべきを信せり。歐洲大陸を通じて總て輿論の既に一變したることは、具眼者にあらずと雖、之を認むることを得べし。最早世は徒に露國の爲めに其同情を濫費することなく、露の威名は殆ど消滅し盡くじ、歐洲に大國視したる其驕傲は去つて將に跡なからんとす。

露國を除くの外は、到る處に於て金州の驚くべき成功に對し、日本の信用を疑ふものあることなす。多數の軍務當局者の、皆認めて日本軍は歐洲最良の軍隊を以て當るも、尙踟蹰し失敗するを免れざるものなりとなせり。

平和の時機速かなりと云ふの問題に至りては、外交家の意見、一般の觀測者と一致すること能はずと雖、旅順口遠からずして陥落すべしとの事は、一般の承認する所にして、クロバトキン將軍潰走して、倉皇哈爾濱に退却するに至るべきをさへ豫期するものあり。

外交家は露國を以て今の事情に於て平和を求むること能はずとなし、之を求むるの道は露帝の獨斷的行動に出づるの外なしとす。但し此場合に於ては自發に

依りてか、又は強制に依りてか、何れとも露帝の讓位は免る能はざる所なり。露國全般に涉りて、容易ならざる革命の風氣横溢せる證跡は既に歴然たり。戰爭は國內を鎮靜せしめ、一致せしむるの効を有せず。よしや國民は露國の武名失墜の度合に就きて、未だ知らざることありと雖、其國民の災害は之をして到底愛國心を喚起せしむるに足らざるなり。然らば激烈なる一揆の成功するに至るべき機會ありやと云ふに、又甚だ之を認むる能はざるに似たり。

戰地に派遣する軍隊は、今尙専ら之を豫備役に採り居れり。蓋し現役兵は内亂防護の爲め、之を歐露に存置するの必要あるを以てなり。斯くの如き事情なるを以て、如何に兇暴の徒と雖、武備を有せずしては容易に起つこと能はず。然るに拘らず、秘密裁判秘密處刑類々として行はれ、人の突然にして其姿を失するもの少からず。これが爲め、遂に多數の地方に於ては、人心をして恟々たらしむるに至れり。

露國の地方總督に附與されたる專制權力の如きは、蓋し文明世界に於て其比を見る能はざる所なるべし。此等の總督は、法律を發布することを得、また廢棄する

を得、法廷を動かすこと亦珍らじからず、露國臣民一身上の事は皆擧げて其權内にあり。又之が財産を沒收するが如き事も亦敢て難しとせざる所なりと。
紐育サン曰く、吾人は檢閲を受けたる露國新聞紙上のみならず、聖彼得堡より神託を傳へられたりと想像せらるる白耳義佛蘭西の新聞紙上に於て、日本若し勝たば、依つて以て、文明諸國が脅かさるべしと云へる、かの所謂黃禍に就きては、吾人の聞くところ甚だ多し。然も露國にして遂に勝たんには、嘗に亞細亞のみならず、歐羅巴の進歩的部面は果して如何なる白禍に瀕するものぞ。是、日本が初期に於て勝利を制したるが爲めに、一般に看過せられたる問題なりとす。確に一考の價値あり。

若し日本にして、單に疲憊せしむるの策に依りて、屈服するを得るとせば、露國は金と人と船の多數を十年二十年に亘りて費消し、遂に勝利を獲得する能はずとは云ふを得ず。事茲に至らんか、露國は其敵國を島内に追ひ込みて、孤立の地位に立たしめ、自國の名譽は茲に回復することを得るのみならず、更に大に其發揚せらるるを見るべく、其亞細亞歐羅巴に對して振ふことを得べき精神的勢力は

蓋し無限ならん。これオウスマルリツ、フリードランド、アイラウに敗れ、莫斯科の占領せらるるを目睹したる露國が、奈破翁に勝ちたる後の情況なりき。亞細亞大陸の運命に關し、一原子と思惟せらるる日本を抹殺するの結果は、事固より遠慮なりと雖、露國がレヴァントより黃海、ベンゴール灣より北海迄の至高權を握るに至り、其精神的霸威は北京、ラッサ、カプール、テヘランに於て、續いて後に來たるべき軍隊の爲めに通路を開拓するや疑ひを容れず。ジンギスカン、テーマレーンが例を示せるが如く、亞細亞に於ては斯くの如く大成功を得たるものなく、武力的勇氣に依つて使はるる魔術は、常に亞細亞人をして瞠若たらしむ。且つ歐羅巴中露國の如く、然かく亞細亞人を和げ治むるに適したる者なし。蓋し獨裁政治は、亞細亞人が能く心中に描くを得る唯一の政體なり。又露國の屬僚政治は、外人に對し更に人種的自慢を現はす經驗により、佛教徒、回教徒に教ふるに、彼等の宗教は露帝の治下にありて迫害せられざることを以てしたり。

中央并に西部歐羅巴に於ける自由政治の辯護者中、一人として露國が日本の爲めに破らるるを希望せざるはなし。若しロマノフ家(露皇室)にして、極東に勝を制

せば、爲めに獨帝の專制的傾向、并に埃帝の先天的反動性が刺激を受くること、莫大なるものあるべく、露國政府は茲に、嘗て維也納會議よりクリミア戰爭に至る四十年間勤むるにありし不正なる役目を再演するに至り、西班牙、伊太利に於ける共和黨の勇士は、其目的の蹉跌を見、佛國に於ては國家の基礎を自ら動搖を來たし、波蘭人、芬蘭人は絶望の淵に陥り、教育ある露人が漸く其萌芽を示せる自由に對する渴望は、無慘にも專制の爲めに芟除せられん。

これ露國にして勝を制せば、嘗に亞細亞のみならず、進歩的歐羅巴に於て現はるべき光景なりと。

又五月二十五日アンデパンダンス、ベルシユ、伯律悉府は左の論説を掲げたり。極東より來たる戰報は矛盾を極むと雖、これ大に注意研究すべき者あり。然れども獨り之のみならず、露國公衆及び露國參謀本部の意向として傳へ來たる所、多少の誤報あるにもせよ、亦大に注意研究すべき者あり。聖彼得堡にては、人々相變らず必勝を信じ、其勝利は只々これ時間の問題にして、結局大優勢の兵力を以て日本を撃倒し得るは疑ふべきものなしと誇稱し、事もなげに表面を取繕へり。然

りと雖尙其勝利が十分日本をして露帝の意思に屈從せしむる能はざる場合、即ち日本と對等を以て戦後の媾和條件を議定するを要する場合を假想し、之を論議するもの亦尠からず。此に於て聖彼得堡の一新聞は、數日前其筋の意見を承けて、戦後列國は極東問題の總體に涉つて協定する所あるべしといへる意見を駁撃せり。即ち露國は戦後若くは交戦中如何なる形式を以てするを問はず、一切歐洲の干渉を許容する能はずと公言したり。同新聞に此説ある所以は、蓋し英國新聞界の意見に挑發せられたるなり。英國新聞界の意見に謂へらく、日露の勝敗定まる場合には、勢ひ戦後の商議を開くべきを以て、極東に利害干繋ある列國は、此機を利用して廣く極東問題の解決を議定し、列國は斷じて極東をして再び今日の戰爭あらじめざるが如き嚴重の豫防手段あるを要すと。

此意見は周密の研究を値ひす。然るを聖彼得堡に於て一概に之を排斥するは、抑も大謬見なり。何となれば此くの如き協定は、却つて露國に取りて利益少からざればなり。即ち露國若し勝ちて、日本に媾和條件を示定し得るに至る場合には、其意の儘に行ふことを得べく、滿洲の占領また何等の障礙なかるべきは、即ち露人

の自ら期する所の如く明白なり。然りと雖露國若し全く破れたる場合に於ては此列國會議より露國政府は之に取り入りて大屈辱を蒙るを免れ或程度までは其利益の顯著なるものを保存することを得べきなり。歐洲列國は露國と交戦するを願はざるを以て露國に對すること寛大なるべく、且つ露國は列國をして日本を抑へて、之が戦勝の果實を悉く收め去るを妨碍せしむる事なしとせざるなり。故に露國が危急の秋に當り、友國より來たる好意の調停をも排斥せんといふは大謬策なるのみならず、單獨にて日本と相協定せんと今より誇稱するも謬見なり。何となれば露國は日本と緊争問題を議定するに當つて、滿洲及び朝鮮に關する勢力の權衡如何に因つては、列國の干渉は必らず來たる者と見ざるべからざればなり。即ち滿洲は清國の一部をなし、朝鮮の中立は列國の承認したる所なり。事若し之に關するあらば、其關印の日に當り列國は必らず清韓兩國の領土保全に向つて喙を入れんことは豫め賭易きの理と云はざるべからず。

露國參謀本部の意見に察するに、アレキシーフ太守と、シロバトキン大將との不和なるは掩ふべからず。露國は是迄の戦敗は戦備の缺乏に由り、又此不和に由る

ものなり。アレキシーフとスクルイドロフ中將との不和は更に甚だしく、アレキシーフはスクルイドロフを引見するを拒絶して、スクルイドロフは浦鹽に往き自家の戦略を行はんとす。即ち露國極東軍には、獨立の陸海三司令官あるが如し。此結果は更に大禍敗を招かざる歟。今アレキシーフを召還するは最も妙ならん。何となれば彼は今戦地に用なければなり。然れどもアレキシーフは、宮中に熱心なる黨與を有するを以て、一朝之を召還せば陰謀に次ぐに陰謀を以てするに至り、其危険なるは三人戦地に相闘ぐよりも甚だしきものあらん。此に於て露人は其成行に任せて、更に大悲報の至らんかを自ら恐れ居れるなり。

乙、黄海大海戦、遼陽沙河戦の時期に於て彼等は如何なる觀察を下せしか

(イ) 是等の大戰に對し彼等は如何に戦評を試みしか

日露戦役に於ける黄海大海戦及び蔚山沖海戦は、猶日清戦役に於ける黄海戦の如く、日本が海上權を制し得たる點に於て相一致するところたり。又日露戦役に於ける遼陽及び沙河戦争は、日清戦役に於ける平壤戦争の如く、列強の觀察眼は

これに依りて漸次變化の度を高めしむるに至れり。彼等は此海戦に對し、如何なる觀察批評を下せしか。旅順及び浦鹽艦隊に對し、我戰捷を得たるに就きては、獨逸新聞紙は注意に値ひする特別の評論を掲げたり。尤も一般に右兩艦隊の出航は全然失敗に終りたるを認め、日本は此戰捷の爲め、其海軍を優勢に確立するを得たりと云ひ、又極東に於ける露國の海軍力が甚だしく支離滅裂に歸したるは疑ひを容れずとなせり。有力なる新聞紙中、獨りベルリン・ネルター・グブラット新聞は、本件に關し社説を掲げて曰く、露國艦隊が旅順より出航せるは全く絶望的の行動なり。何となれば、日本軍の猛烈なる砲彈は、最早露艦隊をして港内に碇泊するに堪へざらしむるに至りたればなり。今や露艦の受けたる大損害、及び其海軍將官の戦死は、共に露國に對して重大なる感動を與へたるものなるべしと雖、露國は少なくとも其艦隊の一部が破壊を免れたるに就き、之を幸運として自ら慰むるに足らん。然れども嘗て有力なりし旅順艦隊の諸艦は今正に離散し、浦鹽艦隊に合するは恐らくは容易の業にあらざるべく、従つて頼るべき所もなくして公海に漂泊しつゝありと。

りと。

米國新聞紙は我海軍の蔚山沖及び黄海の戦勝を以て、戦争の最重要なる出來事の一なりとなして、日本海軍の熟練を激賞し、極東に於ける露國の海軍力は滅却せるものと信する旨を述べたり。

主なる新聞紙は、亦露艦が武装なき運送船に乗込みたる不幸なる軍隊に對し、何等の假借を加へざりしに拘らず、上村中將が其乗員を救ひたる仁惠的行動に就きて評論せり。

又最近二回の海戦に關し、タイムズは左の評論を掲げたり。戦争中如何なる場合に於ても、日本司令官の最も重きを置きたるは、其大軍艦の安全を保つにありしこと、幾多の事例の證明する所なり。彼等は其水雷艇及び驅逐艦を用ふるに當りて、屢、表はしたる勇敢は、壯觀を極めたりと雖、其主要艦隊を構成する小數の大戦艦、及び巡洋艦に就きては、彼等は其一隻たりとも之を危険に陥るゝの方法に出づること能はず。何となれば、其損害は戦争中恢復の途なきは、彼等の常に自覺する所なればなり。此一點の考量は、彼等の計畫中及び之を

實行する行動の上に於て多大なる影響を及ぼしたり。これ實に當然の處置と云はざるを得ず。若し吾人の見解にして誤らざるば、彼等が最近二回の交戦に際して採りたる方法は、大に此點を斟酌せるものなるべく、又露艦をして遂に逃走することを得せしめ、其損害の若し右の事情なきものとするれば、一層重大なりしならんに、左程の重傷に至らざりしは、主として斯くの如き事情ありしに基づくものと信ず。然れども今回の戦闘に於ける大體の結果は、固より十分明瞭なり。露國は二回共甚だしく戦敗し、日本は比較的に微弱なる損害を受けたるに止まれり。デイリー・テレグラフは亦同様の評論をなして曰く、最少の危険を以て最大の効果を奏せんとするの方法によりしが故に、日本をして英國海軍史に於けるよりも比較的に緩慢なる方法を探らしめたるも、其結果として日本の得たる大捷に至りては同一なり。

日本海軍が其浦鹽艦隊と交戦したる詳報は、日本より倫敦に達したるが、之に依れば露艦は互に其航路を犯し其砲火を遮りたるに反し、上村中將は絶えず敵を集弾に曝露せしむる様、部下の諸艦を運用せる旨の記事あり。タイムスは之を評

論じ、日本人が艦隊運用の術に於て優れるはいま、明瞭なりと云へり。尙附言して曰く、曩に露艦は最も冷酷に日本の運送船を撃沈し、其乗員が將に溺れんとするに當り、之を收容せんが爲めに一隻のボートを下さざりしものなるに、日本人の義侠なる今や該露艦の乗員五六分を救ひたり。吾人は之を爰に記載するは一快事と言はざるを得ず。

なほ倫敦の新聞紙は一般に上村中將の屢、際會したる不運が、遂に一變して其海陸軍の同僚に譲らざる威名を揚げたるに就き、同中將を祝せり。伊太利の新聞は、殆ど皆其説を一にして、我海戦の捷利を祝せり。

トリビユナ新聞は曰く、天は再び露西亞に幸ひを下さず、其海軍は又も大敗を重ねるに至れり。日本の制海權は依然たり、而して露國の復仇は最早望みなきに至れり。バルチック艦隊の日本海に到着する頃には、皆て極東に於て露國の威嚴を維持したる要塞は既に陥落せらるべきのみならず、事茲に至りては同艦隊は最早日本を威嚇するに足らざるを見るべし。故に吾人は同艦隊派遣の果して有功なるやを大に疑ふものなり。

イル・ヂャーナレリタリヤ新聞は曰く、極東に於ける露國の勢力は、過日の海戦により一大打撃を蒙りたり。旅順艦隊は今や既に支離滅裂して收拾すべからざるに至り、最早何等戦路上の價値を有せず。浦鹽の小艦隊も亦無能のものとなり果てたり。露國は唯僅に其若干隻の軍艦が、不日旅順陥落に伴ふべき必然的破壊を免れたるを以て自ら慰むるの外なからむ。

佛國諸新聞は我海軍の勝利に關し一般に事實の報道をなすに止め、論評を試みたるもの少なし、尤も右報道を掲載する口調に依りて之を見るに、此交戦を以て露國の海軍に取りては容易ならざる敗衄にして、我海軍に取りては大成功たることを認むるに於て一致せるものと如し。有名なる親露新聞エコー・ド・パリは八月十七日の紙上に於て左の如く論評せり。

旅順艦隊は八日以前に於て、尙戦争に於て多少の成功を期望し得べきものなりき。然るに今や敵と對抗する時は其一艦毎に撃破せらるべきものとなり果てたり。而して更に落膽すべきは他なし、バルチック艦隊が太平洋に來着する場合には、其協力者とし倚頼せんとしたる旅順艦隊は今や殆ど滅亡せしにより、露國太平洋

洋艦隊の數量上の優勢も、亦最早存在し得べからざることは是なり。旅順艦隊は戦争の終局を俟たずして、破壊せらるべく、然も日本艦隊は常に完全に存在すべし。腹藏なく之を言へば、マカロフの死後、露國艦隊司令官は其慘劇的難局に當るに堪へざるなり。

ジニールナル・デ・ド・パリは、八月十八日の紙上に於て旅順浦鹽の兩艦隊は、双方相合せんことを企圖したるものと假定して、左の論評を下したり。

露國兩艦隊軍路上の計畫如何に拘らず、其行動に於ては双方とも失敗に歸し、而して極東に於ける露艦隊は今や無能のものとなりたるが如し。近日歐洲より一新艦隊出發すべしとの風説ありと雖、同艦隊は適當の時機に到着し得べしと想像し難きなりと。

獨國ブールスクリエー及びデイ・ポスト兩新聞は、ともに左の意味の論評を掲載せり。東亞に於ける現下の時局は、露國海軍の殆ど全滅に歸したる結果として、日本海軍の活動をして一時休止せしむるに至るべし。抑も辛苦慘憺絶え間なき任務に従ひたること、今回の日本艦隊の如くなるものは、全世界海軍史上未曾有の

ことなり。然も同艦隊の主要部分にして、二三ヶ月間も休養せば、同艦隊は再び其戦闘力を新にするを得べき地位にあるものなり。同艦隊の過勞彼が如きに拘らず、艦艇の損耗は世人の恐れたるが如くに大ならざるべきは、東郷、上村兩艦隊既往の活動に徴するも、幾多の教訓を與ふるものなり。即ち其重砲の頻繁なる發射も、最初の想像の如く艦隊に損害を來さざりし事、日本艦隊に用ひらるゝ所の氣力は、上は司令長官より下は一水夫に至るまで、決して輕視すべからざる是なり。現下戦争の陸海兩軍何れに於ても、日本の精神上の價値は今や能く歐洲に知れ渡りたり。日本全國民の愛國奉公何等の犠牲をも辭せざるの精神は、確乎として疑ふべからざるものあり。假りに日本人民の資力盡くるとするも、同國天然の富源は、優に他國の信用を求め得べきなり。特に事情の如何に拘らず、戰場に於て同國商工業が盛に勃興すべきは、確に豫期すべきなり。

倫敦タイムスは六月二十三日の紙上に軍事寄書家の上村艦隊に關する短評を下して曰く、

バルチック艦隊の危険は、日本人安心して可なり。巡洋艦の一分艦隊を派遣する位の事は、さして憂ふるを須ひざるべし。露國が商船破壊戦に訴ふるは、是自ら其海軍の脆弱を世界に告白するものなり。或は此絶望の餘りに成れる戰略が、効を奏するとするも、爲めに幾分か海上保険料を引上げしむるに止り、日本にして能く之に對して尋常一様の豫防手段をさへ怠らすんば、結局何程の効能かあらん。ベジブラーゾフ中將は、上村中將の追撃を受けて、甲と見せ掛けて乙の航路(虚偽の航路)を取り、六月廿日無事浦鹽港に歸還したるが、こは初めより、さもあるべき事と想はれたり。日本人が露人の計畫を看破する能はず、折角一舉之を殄滅して、後患を絶つべき好機會に接しながら、見すく之を逸したるは、決して日本人の爲めに賀する能はざるなり。蓋し上村艦隊は専ら浦鹽艦隊に當るよりも、寧ろ浦旅兩艦隊の合併を防止する目的を以て朝鮮海峡を扼し、一たび出れば又還りて之を守るにあるは、是日本海軍一般戰略の一部なるべきを以て、深く上村艦隊を責め難きものあり。されど元來浦鹽艦隊は、旅順と合併するを目的とするものと思ふは如何、吾人の推測する所を以てすれば、浦鹽艦隊が其船一たび出づれば、又無

事歸り得べくも想はれざる海面に出で、而して其力を以ては斷じて入る能はざる港に入らんとし、若くは其力斷じて對抗する能はざる敵艦隊と交戦せんと企畫することあるべきものと見る能はず、其當否は姑らく措き、此場合に處する策は、セント・ヴンセントの行ひたりしが如く、敵の居らず又來たるべしとも思はれざる處に至りて、空しく敵を待たんよりも、敵の現に居ると明かなる處に、我より奇せて之を窘迫せんと最上策ならん。セント・ヴンセント提督若し靈ありて、上村が茫渺道なき大海に空しく敵を西に東に搜し廻るを見れば、定めて嗤笑することなるべし。近世の船具には諸般の結構なる大發明ありたれど、之を用ふるは人あり、誰も先づ古名將は戦ひを知るものと心得、己のそれ以上に名案あるを確認するまでは、古名將の跡を逐はんこそ緊要ならぬ。扱ても功名心に盛なる人民に取りて、敵に一杯喰はされたりと思ふほど辛きことなかるべし。

以上は二大海戦に對する評論の概観なるが、陸戦に對しては如何なる論評を試みしか、以下三四の例を示すべし。維也納發電報に曰く、

クロバトキン大將の率ゐる主力軍の運命未だ明かならずと雖、遼陽の戦ひは當

地に於て深刻なる感動を與へ、他に公衆の注意を惹く一切の問題は、目下戰報の爲めに蔽はれて其跡を絶ちたるの觀あり。新聞紙の多數は今回の戦争を以て近世の戦争中最も顯著なるものとし、遼陽の名は永久に青史に垂るべしと云へり。即ちツアイト新聞は曰く、遼陽の戦ひに於て、クロバトキン大將の聲價は茲に地に墜ちたりと。ノイエス・ヴィエナ・ターゲブラット新聞は曰く、滿洲の運命は茲に定まりたりと。エキストラブラット新聞(?)は曰く、若し黒木大將にして露軍中堅の退路を絶ち之を包圍することを得ば、露軍の退却は茲に一變し、大潰亂を見るに至るべしと。フォルクスツァイツング新聞は曰く、日本軍は必らずや敵を追撃して一歩も假借せず、以て其勝利を利用するの途を知れりと。

又倫敦發電報に據れば、九月五日タイムズ新聞は、遼陽の戦争に關し評論して曰く、遼陽に於ては日本人の豫期し又希望せる如く、セダンの戦ひに比するに足る程の決戦を見るに至らざりしも、ライプチヒの戦ひに酷似せしものありたり(ライプチヒの戦ひとは即ち一八一三年佛軍が優勢なる同盟軍に壓迫せられ大敗を取りたるものなり)。此戦争に續きて、日本軍が遲滯なく更に一層決勝的の成功

を收むるに至るべきは、十分豫期するに足るべく、惟ふに彼等は、敵兵をして其大敗より恢復し得るの時間を與ふることなかるべし。日本軍は既に光輝ある戦勝を得たり、今又之に次ぐに最も重大なる結果を以てせんとす。其果して然るや否やは黒木軍の既に保持せる陣地如何及び同軍増援の爲め派遣せられたる兵力如何を知るときは、之を卜するに足らん。目今に於ては露軍は少なくとも待受けられたる網より免れたり。尤も之を免れたるは、單に第二の網に陥るの階梯たるやも知るべからず。

スタンダード曰く、奥及び野津兩將軍の勝利は曩に推定せられたる程に完全ならざるが如く、又露軍の渡河を掩護せる後衛は能く戦へるが如し。今や遼陽戦争の局を結ぶは、黒木將軍の双肩にあり。若しクロバトキン將軍にして首尾能く北方に退却し、以て日本軍の戦勝をして決勝的たらざらしむることを得ば、寔に良將たるに耻ぢざるを見るべし。然れども此場合に於てさへ、尙同將軍の地位は如何に利益ある解釋を加ふるも、頗る危殆なるを免れずと。

米國新聞紙の我軍に對する一般の賞讃は、遼陽に於ける戦勝に依りて一層を加

へたり。ニューヨークサン新聞は曰く、此大戦は直接に戰略に及ぼす關係を別問題とするも、戦局に一生面を開きたるものなり。從來露人の希望及び露人に同情を寄せたるものゝ所説に依るに、一旦大規模の戦闘を見るに至らば、忽ち日本軍人の氣象に固有なる弱點、又は忍耐力の缺乏、若くは或缺點を曝露するに至るべく、日本が海陸共に第一着に成功せるより推論せる局外者の断定は、茲に轉倒するやも知るべからずとせり。而して今回の戦争は實に斯くの如き希望又は所説を一掃するものなりと。

ニューヨークトリビューンは曰く、今回の戦争に就き、世界を驚倒したる一現象は、露國が軍國として無能なることなり。今日に於ては最早準備整はざるを口實とすることを得ず。自ら世界の最強軍國を以て任せし國にして、其新進の小國と看做し輕蔑せるものより自國の土地に侵入せられ、其攻撃を受くるに至りて、少なくとも六ヶ月間連戦連敗を重ねたるは、永く歴史に特筆せらるべし。他の一現象は、日本が軍國として驚くべき發達をなしたることなり。世界は既に久しく亞細亞國民を以て、到底戦捷を得

るの望みなきものと見做したるに拘らず。今回の戦争に依り、日本は從來世界の歴史中に於て、最も學理に適したる戦争を吾人に示したり。世界は亞細亞國民に於て斯くの如き武勇の再興を豫想せざりしなり。日本は國家として未だ少壯時代にあり。其今後幾世紀間世界大事件の舞臺に於て重要な役割を占むるや期して待つべし。而して日本が此役割に堪ふるは既に認むるに足れり。右二現象の依りて來たる所を察するに、少なくとも左の教訓は世人の看過すべからざるものにして、極めて明瞭なり。即ち日本に於ては平和の技術と戦争の技術は同時に發達せり。露國に於ては平和の技術は輕忽に附せられたり。従つて戦争の技術も亦成功に必要な完全の程度に發達せざりしなり。若し露國にして過去三十年間、日本の有せる如き自由教育、自由出版、自由制度を有せしならんには、其陸海軍は今少しく好結果を奏せるならん。

遼陽の戦争に關し、ノルド・ドイツェン・アルゲマイネ新聞は曰く、日本軍戦捷の結果に關し、深く考量を加ふるが如きは、未だ其時期にあらざるべし。此戦争は疑ひもなく、從來の歴史に於て最も頑強なる戦争の一として、異彩を放つものなり。其

戦局に對する直接の影響として、旅順救援の望み茲に全く絶えたりと云ふべし。この戦争の價値に就いては露國新聞ノイグオスチ、能くこれを約言せり。其言に曰く、此戦争は若し假りに日本軍の敗衄に歸せしならんには、決勝戦の性質を有せしならん。然るに實際に於ては、日本軍の敗衄に至らざりしを以て、縱令今後幾多同様の戦争を見るも、日露戦役は永續すべしと。

又北清デイリー・ニュースは、其社説に於て論じて曰く、近世史上に於ける一大會戦は、攻撃者たる日本軍の全勝に歸したり。日本皇帝が、露國の屢約して而して果さざる滿洲撤退を強制履行せしめんとを委任せさせ給ひたる日本の三軍は、連戦連勝以て此戦勝の月桂冠を戴けり。防禦軍が其陣地より擊攘せられ、自ら其軍用品を燒棄し、死傷者を戦場に委棄し、走つて新策源地を求むるに至つては、假令如何に日本軍の勞費大なる者にもせよ、其勝利は完全なる勝利と謂はざるべからず。クロバトキン大將が、未だ全く破れざる三日前、早くも公道及び鐵道に由つて輸送し得る限りの兵器彈藥を輸送し去りたるは、これ即ち三日前既に自ら敗衄を自認したるもの、即ちクロバトキン大將が其兵器彈藥の大部分を輸送し去り

たる一事は寸毫も日本軍の光輝を妨ぐるものにあらざるなり。且つ日本軍の遼陽戦は會戦なるを記憶せんことを要す。南山は露軍が數月の防禦工事を施し而して露國専門家は牢固不拔と稱したるも日本軍は一日にして之を拔けり。遼陽又五ヶ月の防禦工事を修め角面堡地雷、塹壕、狼狽、鐵條網等凡そ新式防禦術の工を盡くして之を構設し、又一個の難攻不落の陣地たり。而して之を守るの兵亦殆ど日本軍と相若き且つ中には歐洲新來の日本人を侮るに小黃人を以てする精銳の二軍團ありき。然り而して日本軍は十日にして之を拔けり。此時に當りて日本軍の死傷露軍に二倍すと謂ふも驚くに足らず而も其實半數にも上らざりき。

一昨日の倫敦ルーター電報は英國の公論一變したるを謂ふ。其タイムス、スタンダード、テレグラフ、ポスト其他世界の新聞紙が辭を盡くして日本軍を稱讃措かざりし後、幾許もなくこの事あるを見るは聊か奇異の感なくんばあらず。殊にテレグラフの如きは大山元帥はクロバトキンの機變縱横なる戰術の爲めに、其目的を破られたりと論せり。常人より之を見る時は、此等の急變調は殆ど驚駭の外

なし。抑も日本人の本年中の戰役に期せし所のものは何ぞや。旅順口を陥れ、朝鮮及び南滿洲より露國人を驅逐するは、これ其最高目的たりしたり。蓋し如何なる樂天主義の日本人と雖、日本が一挫敗をも受けずして、能く此結果を博し得べしと期したる者は一人も之なかりしならん。而も見來れば、クロバトキンの戰略は退却戰略のみ。而も日本人は能く其軍事の熟練を事實に證明したり。蓋し一時世人は、大山大將が雷にクロバトキンを撃破するのみならず、其軍の全部若くは一部を包圍捕獲するを期せしは事實なり。然れども露軍が少なくとも同數の兵力を以て五箇月以上に涉り防禦工事を施せる陣地に據りて、而も日本軍の前進に抵抗し阻止する能はざるに於て、其戰術の機變縱横を稱するは、露軍却つて自ら顧みて赧然たらざるなきを得んや。米國批評家は、其初め日本軍がセダンの功を收むるに兵力不足なるを憂ひしが、日本軍は決して初めより此志なかりしにあらざるなり。たゞ日本の友人之を望みしのみ。蜀を得て隴を望むは人の常情と雖、其期望を充たす能はざりしとて、決して日本の成就したる所を汚すに足らず。蓋し此急變調は特派員の感情より來りしならん。是亦人情なり。日本政府は必らず